



趣味・研學

故事と

熟語

始



編會及普學漢國帝

特 220
592



趣味
研究

帝國漢學普及會編

故事と熟語

東京
京文社
刊



注 意

- 一、排列は五十音順である。従つて語句の排列に於ては、キ・エ・ヲは共にワ行である。
- 二、解釋は(1)先づ劈頭に適確簡明なる解釋を施し、(2)次に字義を明にして因つて來たる譯を説き、(3)次に同意語・類語・用例を挙げ、(4)最後に出處語源を原文又は假名交り文(原文が六ヶ敷い場合に)として明にする順序によつた。
- 三、解釋の後は明治三十九年以來今日迄入學試験に課せられた學校を略名で附してある。略校名の下の2、3等の數字は同一校に於て二回或は三回と出たことを意味する。尙本文の始には、全國上級學校の所在地も合せて掲載しておいた。

緒 言

漢文字は我々の日常生活と極めて密接不可離の關係を有してゐる。別言すれば、日本精神を培養し、無比なる日本國家を組成した文化財は、この漢文字を媒介とする儒教の教義に負ふところ極めて大である。故に、我々が朝夕見聞し、しばしば使用する漢文字は、かかる意味において正しく理解せられ、驅使せられなければならない。

もし我々が漢字の眞意を無視し、語句、熟語及び故事が包蔵する意義を明確に知り得ないとすれば、我々の思想感情を正しく且つ巧みに表現することが出来ぬばかりでなく、すべての言論文章の眞意を理解することも不可能であらう。況して研學の目的を達成することなどは思ひもよらぬことである。

本書は如上の見地より漢文字の熟語及び故事並に國文のそれを選蒐し、一は全國受験者への婆心として、全國中學校、師範學校、女學校その他中學生の學習、高等、専門學校入學受験者、専檢、

高檢、普文、小學教員檢定、中學教員檢定等の受験者、並に世の研學者のため、明治三十九年より現在に至る各種學校入學試験を始め、資格試験、採用試験等に課せられたるものを基礎として、更に將來課せらるべき可能性あるものを網羅し、これに先づ適確簡明なる解釋を施し、更に進んで理解の根底を深からしめんがために出来るだけ多く其の因つて來たる語源を明にし意を用ひた次第である。

方今日支の關係日々に深きを加へる秋、彼我文化の交流の上に著大な役割を果した漢字を正しく理解し、漢學の素養を深めることは、更に重要な意義を帯びるに至つた。と共に、他面、處世達意の武器として之を自由に驅使することは、一般世人の忽緒に附すべからざることである。

幸に本書が良箇の師友として坐右に備へられ、全國各種受験者並に研學者を利するを得ば至幸至榮である。

編者識

昭和十三年蘭秋

故事と熟語 目次

ア	の	部	……………	一	……………	三〇七
イ	・	牛	の	部	……………	九・二四・三〇八・三〇九
ウ	の	部	……………	二六	……………	三〇九
エ	・	エ	の	部	……………	三〇・三五
オ	・	ヲ	の	部	……………	三〇・三二
カ	の	部	……………	四	……………	三二
キ	の	部	……………	三	……………	三三
ク	の	部	……………	三二	……………	三三
ケ	の	部	……………	八	……………	三三
コ	の	部	……………	一〇一	……………	三三
サ	の	部	……………	二	……………	三二
シ	の	部	……………	三	……………	三五
ス	の	部	……………	一四	……………	三六
セ	の	部	……………	一五〇	……………	三六
ソ	の	部	……………	一六	……………	三六
タ	の	部	……………	一七	……………	三七
チ	の	部	……………	一八	……………	三七
ツ	の	部	……………	一四	……………	三七
テ	の	部	……………	一五	……………	三八
ト	の	部	……………	一〇	……………	三八

ナ	の	部	……	三二	……	三二八
ニ	の	部	……	三三	……	三二九
ヌ	の	部	……	三六	……	三二九
ネ	の	部	……	二八	……	一
ノ	の	部	……	二八	……	一
ハ	の	部	……	二八	……	三〇
ヒ	の	部	……	二七	……	三〇
フ	の	部	……	二四	……	三二
ヘ	の	部	……	二五	……	三二
ホ	の	部	……	二〇	……	三二
マ	の	部	……	二六	……	三二
ミ	の	部	……	二〇	……	三三
ム	の	部	……	二七	……	三三
メ	の	部	……	二七	……	三三
モ	の	部	……	二七	……	三三

ヤ	の	部	……	二七	……	三三
ユ	の	部	……	二八	……	三四
ヨ	の	部	……	二八	……	三四
ラ	の	部	……	二八	……	三五
リ	の	部	……	二八	……	一
ル	の	部	……	二九	……	一
レ	の	部	……	二七	……	一
ロ	の	部	……	二〇	……	一
ワ	の	部	……	二〇	……	三五

附 學校略名並に所在地

目次終

故事と熟語

アの部

- ★愛 敬 アイケイ・アイキヤウ
アイケイは仁愛と畏敬のこと。孝經に「愛敬盡三千事ハ親」とある。アイキヤウはかはゆらしいこと。併し今はこの場合愛嬌の方を使ふ。
- ★愛 願 アイコ
かはゆがりひいきにすること。楊修答臨淄侯書に「愛願之隆」とある。
- ★愛 想 アイサウ
人をもてなすにおもむきのあること。
- ★愛 日 アイジツ
冬の日のこと。十八史略の「冬日可レ愛、夏日可レ畏」

アの部

- ★哀 惜 アイセキ
かなしみをしむこと。曰く「不レ推三哀惜」と。
- ★靄 然 アイゼン
和らぎよるこぶさま。和氣靄々も之と同じである。
- ★哀訴歎願 アイソタンダラン
なげきうつたへて助を願ふこと。
- ★歎 乃 アイダイ
船歌のこと。アイナイとも讀む。柳宗元の詩に「漁翁夜傍三西岸一宿、曉汲三清湘一、燃三楚竹一、烟消出不レ見レ人、歎乃一聲山水綠」とある。〔盛農〕
- ★變 黠 アイタイ
雲のたなびく貌。木華の海賦に「變黠雲布」とある。

又瑞雲靈鷲などいふ。

★哀悼 アイダウ

人の死をかなしみいたむこと。曰く「臨而表哀悼之意」と。

★生憎 アイニク

意外にも折あるく。〔高校・長岡・同志〕

★哀惑 アイビン

悲しみあはれむこと。

★愛撫 アイブ

かはゆがりいたはること。宋史に「愛撫士卒」とある。

★愛別離苦 アイベツリク

佛教の八苦の一で、兄弟、妻子などの親しい者と生別又は死別する悲み。

★曖昧 アイマイ

はつきりせぬこと。曖昧模糊の語あり。晋書に「不取以曖昧之見自取中後累」とある。〔米工・外語〕

★哀樂 アイラク

かなしみとたのしみ。

★鞅鞅 アウアウ

情の満足せざるをいふ。准陰侯傳に「居常鞅鞅不樂」とある。

★殃咎 アウキウ

わざはひ。殃は神又は天のとがめなり。左傳に「哀樂失時殃咎必至」とある。

★殃慶 アウケイ

禍と幸。

★塵殺 アウサツ

人をみなごろしにすること。

★鞅掌 アウシヤウ

繁多なる事務にあづかること。又は苦勞してかたちを失ふたさま。鞅は物を負ふこと、掌は物を持つこと。詩經に「鞅掌王事」とある。〔水産・山商〕

★懊惱 アウナウ

うれへもだえること。煩悶。

★鸚鵡返 アウムガヘシ

元來は和歌の言葉で、他人が言ひかけた歌の語を少しかへて返歌すること。今は直ぐ人の語をまねること。

★阿衡 アカリ

宰相(總理大臣)の義。殷代の伊尹が任ぜられた官名。阿衡の任などといふ。史記に「魏離得阿衡之佐一長益乎」とある。〔神宮〕

★赤字公債 アカジコウサイ

缺損を補ふ爲に發行する公債のこと。〔和商〕

★關伽棚 アカダナ

佛に供へる水をおく棚のこと。〔北農・北大・専檢海欄〕

★察見淵魚者不祥

ノはフシヤウなり。政治その他をなすに知識のみを重く用ひるのを戒めた語である。即ち淵の中の魚を餘りあきらかに見透すは不吉であるといふのが原義である。

★鯢鯢 アクサク・アクセク

小事に汲々として少しの餘裕もないこと。齒のこまかい義より出づ。〔盛農・専檢・大醫・海欄・長商〕

★惡事傳千里

「好事不出門、惡事傳千里」とある。〔東高師〕

★勿以惡小而爲上、勿以善小而不爲

「好事不出門、惡事傳千里」とある。〔東高師〕

情の満足せざるをいふ。准陰侯傳に「居常鞅鞅不樂」とある。

★殃咎 アウキウ

わざはひ。殃は神又は天のとがめなり。左傳に「哀樂失時殃咎必至」とある。

★殃慶 アウケイ

禍と幸。

★塵殺 アウサツ

人をみなごろしにすること。

★鞅掌 アウシヤウ

繁多なる事務にあづかること。又は苦勞してかたちを失ふたさま。鞅は物を負ふこと、掌は物を持つこと。詩經に「鞅掌王事」とある。〔水産・山商〕

★懊惱 アウナウ

うれへもだえること。煩悶。

★鸚鵡返 アウムガヘシ

元來は和歌の言葉で、他人が言ひかけた歌の語を少しかへて返歌すること。今は直ぐ人の語をまねること。

★阿衡 アカリ

ウツテナサレるナカレ

意義は解すことを要せず。蜀志の劉先生主簿の註に曰く「先生遺詔、救後主曰、勿以惡小而爲之、勿以善小而不爲、惟賢惟德、能服於人、汝父德薄、勿效之」と。

★惡辣 アクラツ

たちが悪いこと。辣はひり／＼辛い事である。〔盛農〕

★舉句 アゲク

最後の意。元來は連歌の最後七七句のこと。舉句の果などといふ。〔京城工〕

★總角 アゲマキ

昔の子供の髪の方。〔臺大・廣師〕

★阿漕 アコギ

事のたび／＼重なること。食慾にもいふ。

★朝餉 アサガレヒ

朝飯のこと。〔醫專〕

★淺茅生 アサチフ

茅が短かくまばらに生えた所をいふ。〔北大〕

★朝聞道夕死可矣

シスともカなり

人の人たる道を開き知れば、その日の朝之を聞いてよ
シ夕方死んだからとて少しも遺憾のことはない本望で
あるといふこと。これ孔子の言にして論語に出づ。

★朝不_レ及_レ夕 アシタヌフベにオヨボス

事が極めて急迫して考へる暇のないこと。今は朝であ
るが、夕刻は如何なるやらわからないといふ義より前
の意となる。「朝不_レ謀_レ夕」に同じである。戦國策に
「朝不_レ謀_レ夕、無_ニ一日之積_ニ」とある。「廣師」

★亞 相 アシヤウ

大納言のこと。亞は次ぐ意、宰相に次ぐ意を以てかく
言ふ。「高校」

★阿闍梨 アジャリ

僧官の名。てほんとなるべき人といふ義。又阿耨梨と
も書く。「水産」

★阿修羅 アシユラ

争闘をこととする悪鬼のこと。

★網 代 アジロ

冬期竹又は木を組みならべて魚を捕へる具。「専檢」

★濯_ニ足_ニ萬里之流_ニ アシをパンリのナガレにアラフ

超然として世俗の外に立つを形容した語。

★阿 世 アセイ

世俗に媚びへつらふこと。曲學阿世といふ。(同部を
見よ)「大醫大・桐工・國大」

★啞 然 アセン

あきれてもきけないさま。

★婀 娜 アダ

美人のたわやかなるさま。曹植洛神賦に「華容婀娜令_ニ
我忘_レ餐_ニ」とある。

★綽 號 アダナ

つけ名のこと。シヤクガリとも讀む。「高校」

★藉_ニ寇兵_ニ而齋_ニ盜糧_ニ アダにヘイをカシヌスピト

敵に利益を興へること。即ち攻め来る敵に兵をかし、
盜賊に糧食を興へる義より斯くなる。「海生」

★雖_レ不_レ中_レ不_レ遠 アタラザとイヘドもトホからず

誠心よりやれば目的的中せざる迄も、大なる間違は
ないといふこと。大學に曰く「心誠_ニ求_レ之_ニ 雖_レ不_レ
中_ニ不_レ遠矣、未_レ有_ニ二學_ニ不_レ後_ニ而後_ニ後_ニ也」と。

★壓 卷 アツクワン

詩文や書物の中で一番すぐれたるもの。最優等者の答
案(卷)を他の答案の上に載せた故事から出た語であ
る。壓卷の出来榮などといふ。「名工」

★壓 制 アツセイ

無理におしつけて従はせること。

★幹 旋 アツセン

とりもつて世話をすること。幹旋の勢などと云ふ。蘇
轍祭司馬相如文に「一二郷士、代_レ天幹旋」とある。

〔高校・外語・廣師・長商・海兵・京黥・山商・美校・小商〕

★四 阿 アツマヤ

四本柱で屋根をとりつけた小亭のこと。シアとも讀む。
又東屋とも書く。周禮冬官の「般人四阿重屋」より出
づ。「長商・北大2」

★懲_ニ於_ニ羹_ニ者_ニ而吹_レ壺_ニ アツモノにコリてアヘモ

戒が過ぎて却つてしくじる譬。即ち熱い食物に懲りて
冷い食物まで吹きさますといふこと。この語は屈原九
章にある。「盛農・水産」

★軋 轅 アツレキ

車の軋りあふ事より不和反目する事。「東北大・鹿農」

超然として世俗の外に立つを形容した語。

★阿 世 アセイ

世俗に媚びへつらふこと。曲學阿世といふ。(同部を
見よ)「大醫大・桐工・國大」

★啞 然 アセン

あきれてもきけないさま。

★婀 娜 アダ

美人のたわやかなるさま。曹植洛神賦に「華容婀娜令_ニ
我忘_レ餐_ニ」とある。

★綽 號 アダナ

つけ名のこと。シヤクガリとも讀む。「高校」

★藉_ニ寇兵_ニ而齋_ニ盜糧_ニ アダにヘイをカシヌスピト

敵に利益を興へること。即ち攻め来る敵に兵をかし、
盜賊に糧食を興へる義より斯くなる。「海生」

★雖_レ不_レ中_レ不_レ遠 アタラザとイヘドもトホからず

誠心よりやれば目的的中せざる迄も、大なる間違は
ないといふこと。大學に曰く「心誠_ニ求_レ之_ニ 雖_レ不_レ
中_ニ不_レ遠矣、未_レ有_ニ二學_ニ不_レ後_ニ而後_ニ後_ニ也」と。

★壓 卷 アツクワン

★阿堵物 アトアツ
錢のこと。晉書に「王衍ノ妻ハ聚斂ヲ喜ブ。衍ハ性質
潔白ニシテソノ妻ノ貪鄙ヲ疾ム。故ニ口未ダ嘗テ錢ヲ
言ハズ。妻之ヲタメサント欲シ、下女ヲシテ錢ヲ以テ
床ヲ邊ラシム。衍、起キテ錢ヲ見ル。下女ニ言ツテ曰
ク、アノ阿堵物ヲ持チ去レ」と。阿堵とは方言にて「あ
のあれ」との意である。「盛農」

★盈_レ科_ニ而後_ニ進 アナにミチてノチヌスむ

人の學問をする場合は餘り速成を欲せず、漸次進むべ
きであるといふこと。水は先づ凹んだ處に一杯満ちて
その先へ進み行くものだといふのである。「長商」

★阿鼻地獄 アビチゴク

苦を受けること間斷なきこと。佛教の八大地獄の一な
り。

★仰_レ不_レ愧_レ天_ニ俯_レ不_レ怍_レ地_ニ アフぎてテンにハチザノ

公明正大で心に少しもやましいことの無いこと。孟子
盡心上篇に出づ。「女高師」

★鴨 脚 アフキヤク

銀杏(イテフ)の木の異名。葉の形の似たるによる。

黄山谷の詩に「霜林收鴨脚」とある。

★押領 アフリヤウ
おしどりすること。横領。〔北大・外語〕

★大津日嗣 アマツヒツギ
天子のみくらゐ。〔山商〕

★網漏ニ吞舟之魚 アミドンシウのウヲをモらす
法令が寛にして大悪人をのがすこと。吞舟之魚は大魚

なり、大悪人に比す。史記に曰く「網漏ニ吞舟之魚」、
而史治悉々不に至ニ姦ニ黎民艾安」とある。

★蛙鳴蟬噪 アメイセンサウ
やかましきだけで何のとりどころもないこと。陋劣な

る文章又は無用の議論に用ふ。韓愈平淮西碑、儲欣評
に「以ニ蛙鳴蟬噪音、易ニ釣天之姿」とある。〔廣高師〕

★得飴以養老、得飴以開閉
アメをエてモツてラウをヤシなひ、アメをエてモツて

ハイをヒラク
同一の物も用ひる人によつて其の用途を異にするをい

ふ。即ち人は飴を得て老人を養ふの料とし、盗人は飴
を得て窃盜の具とするといふなり。「牛は水を飲んで

乳となし、蛇は水を飲んで毒とす」といふも同じなり。

★危如累卵 アヤフキことルキランのゴトシ
あぶないことは丁度卵を積みかさねたやうだといふこ

と。史記に「秦王之國、危ニ於累卵」得「臣則安」とある。
★過而不改是謂過矣 アヤマチてアラタメざるコ
過をして改めない時は、その過は遂に眞の過となる

といふこと。人は過失なきを得ない。たゞよく改めれば
過をせざる前に同じである。裏面の眞意は過は必らず

改むべきだといふこと。左傳に「人非ニ聖人ニ誰無レ過、
過能改、善莫大レ焉」の語がある。

★過則勿憚改 アヤマチはスナハチアラタむる
過失をなしたる時は恐れ憚ることなく速に改むべきこ

とをいふ。論語學而篇に出づ。
★改過不吝 アヤマチをアラタむるにヤアサカならズ
過失をなしたる時は直ぐに之を改めるに少しも躊躇し

ないこと。
★文過 アヤマチをカザる
過失をなした時、之を改めることを憚り、外面を取り

つくらふてよいやうに云ふこと。論語子張篇に曰く、

「子曰、小人之過也、必文。」文は飾るなり。

★不貳過 アヤマチをフタたびせず
前にした過失は再びせぬこと。近思錄に曰く「淵淵不

遷、怒、不貳過、三月不違仁」と。〔廣高師〕

★阿諛 アユ
おもねりへつらふこと。

★新沐者必彈冠 アラタにモグするモノはカナラザ
其の身を潔くする者は外物の者に汚がされんことをお

それること。即ち新に髪を洗つた者は、必ずその冠の
塵を弾き落してかぶるの義なり。史記屈原傳に曰く、

「新沐者、必彈冠、新浴者、必振衣。安能以ニ身之察
察ニ受ニ物之汶々ニ者乎」と。

★青嵐 アヲアラシ
青葉の頃に吹く風。セイランとも讀む。

★白馬の節會 アヲウマのセチエ
昔、正月七日に左右馬寮より馬二十一頭を出して天皇

の御覽に供した儀式。〔東美〕

★青丹吉 アヲニヨシ
奈良の枕詞。〔專檢・農大・臨教〕

★青出ニ干藍ニ而青ニ干藍 アヲはアキよりイでア
師より弟子の優れるに至るの譬。即ちあゝから採つた

青色が却つてもとのあゝより青く、又水から出来た氷
が却つてもとの水より冷たい。この語は荀子勸學篇に

ある。又、この語を縮めて出藍と云ひ、出藍譽といふ。
〔神商〕

★安佚 アンイツ
安樂に暮すこと。安逸も同じ。〔盛農・高校・慶大〕

★晏駕 アンガ
天子の崩御。晏はおそし、おそく車駕を出す意にして

臣子の情として、君崩すれども、あからさまに之を言
ふを諱み、猶ほおそく(晏)駕せんことを憚るから
である。

★暗合 アンガフ
期せずして一致すること。暗合默會の語がある。晉書

山濤傳に「濤不レ學ニ孫吳、而暗與レ之合」とある。
〔水原農〕

★安閑 アンカン
やすらかたしづか。又は、何事もせずにぼんやりして

あること。安間も同じ。

★行脚 アンギヤ

諸國を巡つて佛道を修行すること。祖庭事苑に「行脚者謂遠離三鄉曲一行三脚天下、脫情捐累尋訪師友、求法證悟也」とある。「女高師・桐工・東商大・米工・東音」

★行宮 アンゲウ

天子の假の御殿。行はぐめるなり、めぐりておらせられる宮即ち假の御殿となる。吳郡賦に「開梁紙有陟方之館、行宮之基二款」とある。「高校・水産」

★行在所 アンザイシヨ

天子の巡りて居らせられる所のこと。蔡邕の獨斷に「車與所至去處、皆曰行在所」とある。

★暗示 アンジ

それとなくしらせること。「女高師」

★安車蒲輪 アンシャホリン

老人を優遇すること。安車は車の中に安坐出来るやうに造つた車で、蒲輪は車の動搖を防ぐ爲に車輪を蒲の葉でつんだ義である。資治通鑑に「上使使者奉安

車蒲輪」とある。「東高師」

★安神立命 アンシンリツメイ

心を落ちつけて、天が吾人に賦與したる本性を害せぬこと。「東齒專」

★安全辨 アンセンベン

物事を安全にするしかけ。元來は汽罐が破裂せぬやう調節の爲に排出口に設けた蓋。「金工」

★安宅正路 アンタクセイロ

安宅は安全な場所て仁のこと、正路は正しい道で義のこと。孟子に曰く「仁人之安宅也、義人之正路也、曠安宅而弗居、舍正路而不行、哀哉」と。「東高師」

★暗中飛躍 アンチュウヒヤク

暗中即ち陰で人知れず活動すること。「山商・陸士」

★暗中摸索 アンチュウモサク

くらやみの中でさぐり求むること。隋唐佳話に「暗中摸索、亦可レ識」とある。「山商」

★安堵 アンド

やすらかに落ち付くこと。堵は垣で、垣の内て人がそ

の居處に安んずるの義である。

★案頭 アントウ

机の上。杜甫詩に「案頭乾死讀書燈」とある。「東齒」

★暗闘 アントウ

陰でのあらそひ。

★安寧秩序 アンネイチツジヨ

安らかにをさまり、順序あること。

★鹽梅 アンバイ

ほどよくかげんをすること。書經の「若作和羹、爾惟監梅」の註に「羹ハ鹽梅ニアラザレバ和セズ。人君美質アリト雖モ、必ズ賢人ヲ得テ、輔ケ導キテ、乃チ能ク徳ヲ成ス。羹ヲ作ル者、鹽過グルトキハカラク、梅過グルトキハ酸シ。鹽梅中ヲ得テ、然シテ後ニ羹ヲ成ス。臣ノ君ニ於ケル、當ニ柔ヲ以テ剛ヲ濟ヒ、左右規正シテ、以テ其ノ徳ヲ成スベシト」とある。漢文ではエンバイと讀む。「高校・長商・外語」

イの部

★依依 イイ

イイの部

(1)樹木の茂つてゐるさま。詩經に「昔我往矣、楊柳依依」とある。(2)離るゝに忍びざる義、即ち思戀の貌。女巽潘岳の寡婦賦に曰く「猶依依、以憑附」と。

★優渥 イウワク

手あつく、情ぶかいこと。優渥なる勅語、天恩優渥など云ふ。陳書に曰く「恩寵優渥超三千等」と。「米工」

★悠々閑々 イウウカンカン

のんきにかまへるさま。

★誘拐 イウカイ

かどはかすこと。「陸士」

★生於憂患而死於安樂 イウクワンニシヤワジ

人の生命はうれへや心配に出て、死亡は安らかなるを云ふ。この語は孟子告子篇に出づ、即ち曰く「入則無法家拂士、出則無敵國外患、國恒亡矣、然後知生於憂患而死於安樂也」と。「神商大・陸士」

★遊履 イウゲキ

各地へ遊歴すること。元來は下駄をはいて歩き廻る義、遊展廻からざる所なしなど云ふ。「海機」

★出^{ツテ}自^{ヨリ}幽^コ谷^リ遷^ル三^ニ千^ニ喬^ニ木^ニ イウコクよりイデムケ
ウホクにウツる

(1)徳の高くなること。(2)位の進むこと。

★綱^ニ繆^ス牖^戸 イウコをチヌウビウす
綱の起らない前に注意すること。牖戸はまどと戸のこと。綱繆はまとひつむむこと。故に本来の意味はまだ雨の降らぬ前に戸を閉めて用心することである。

★游^子 イウシ

國許を出て、他國に居る者。漢書高帝記に「游子悲^ム故郷^ニ」。唐の孟郊の游子吟に「慈母手中絲、游子身上衣、臨^レ行^ニ密^ニ縫^フ、意恐^ニ遲^ク歸^ル」。難^ク將^ニ寸^ニ草^ニ心^ニ、報^シ得^ズ三^ニ春^ニ暉^ニとある。

★優^柔不^斷 イウジウフゲン

ぐづぐづして決断力の乏しいこと。優游不斷も同じ。

〔外語・山商・東亞同〕

★有^終之^美 イウシユウノビ

終りまで立派に全うすること。結果のよいこと。龍頭蛇尾の反對。詩經に「靡^レ不^レ有^レ初^ニ、鮮^ニ克^ニ有^レ終^之美^ニ」とある。〔神商大〕

★右^手畫^レ圓^ニ左^手畫^レ方^ニ不^レ能^ニ兩^ニ成^ル

イウシユにエンをエがきサシユにハウをエがけばフタツながらナルアタはズ

一時に兩事を兼ね行ふべからざる喩。韓非子に出づ。隋書に「劉焯^子精明、視^レ日^ニ不^レ眩^シ、左^手畫^レ方^ニ右^手畫^レ圓^ニ、口誦^ニ目數^ニ、耳聽^ニ、五事^ニ同舉^ニ、無^レ所^ニ遺^失」とある。

★有^職 イウシヨク

高い官をいふ。イウツクは()學者、ものしり。()朝廷及び武家の禮式典故に明に通ずること。〔專檢・成溪・名工・普文〕

★有^數 イウスウ

數へることの出来る程少ないこと。有數の人物。〔神商大〕

★幽^邃 イウスオ

おくぶかいこと。誠齋雜記に「幽邃莫^レ測^ル」とある。

★遊^說 イウセイ

諸國を廻つて意見を説くこと。史記に「太公遊^ニ說^ニ諸侯^ニ、無^レ所^ニ不^レ遇^ル」とある。〔長商・大阪商・金工・桐工〕

★油^然 イウゼン

(1)氣にとめないさま。(2)雲の盛に起るさま。

★游^敗 イウテン

狩をして楽しむこと。游はあそび楽しむ。敗は狩獵。

〔臨敷〕

★右^筆 イウヒツ

昔、貴人に侍してもの事を書くことを掌つた役、今の書記。〔廣高師・九樂・高岡商〕

★幽^明黜^陟 イウメイヲチュツチヨクス

無能又は邪惡なる者をしりぞけ(黜)、有能又は善良なる者をのぼす(陟)こと。〔東醫〕

★悠^揚 イウヤウ

のびくしてこせつかないこと。悠揚不^レ迫^ラの語あり。

★游^弋 イウヨク

軍艦又は艦隊が海上を徘徊すること。

★不^遷怒^ヲ イカリヲウツサズ

腹だましい時、他の關係のない者に對してまでも怒らぬこと。論語に曰く「不^レ遷^レ怒^ヲ、不^レレ^レ過^ラ」と。

★依^稀 イキ

能く物の似たること。さも似たり。髣髴。〔女高師〕

★生 贊 イケニエ

(1)生きたまゝで神に供へるもの。(2)或事柄の爲に命をさし出して名利をなげうつこと。

★意 見 イケン

(1)心に思ふ所。(2)いさめ、忠告。親の意見などいふ。〔水原農〕

★呻 唔 イゴ

讀書の聲。群書要に曰く「呻唔詩讀聲也」

★異 彩 イサイ

かはつた色彩のこと。一きはめだつこと。放異彩等之である。〔東商船〕

★頤 使 イシ

あごて人を動かして使ふこと。輕々しく人を使ふこと。漢書賈誼傳に曰く「今陛下方制天下、頤使加意」と。

★異 日 イジツ

ほかの日。他日。〔海兵〕

★意 識 イシキ

心が醒めてゐておぼへのある状態。〔女高師・廣高師〕

★漱 石枕流 イシにクチモミギナガレにマクラナ

こちつけること。又まけおしみの強いこと。晋の孫楚

が「石に枕し流に漱ぐ」と言ふべきを誤つて「石に漱ぎ流に枕す」と言つたのを人が咎めた所、石に漱ぐは齒をみがく爲め、流に枕するは耳を洗ふ爲であると言

★倚 藉 イシヤ

たよること。〔水原農・長商・盛農〕

★意匠慘憺 イシヤウサンタン

物事に工夫を凝らして苦心すること。杜甫の丹青引贈三將軍驕に曰く「詔謂將軍拂絹素、意匠慘憺經營中」〔長商〕

★圯上老人 イジヤウのラウジン

昔、楚の地方で土橋を圯といへり、漢の張良が下都の圯上にて老人に出逢ひ、此處にて兵法を授けられし故事あり、老人は黄石公なり。即ちこの黄石公の事をいふ。史記世家に曰く「良少時於下都圯上、遇老人」。

★移 書 イシヨ

廻しよみ。移文。漢書薛宣傳に曰く「移書顯買之」。★衣食足則知榮辱。イシヨクダツてスナハチエイジヨクをシる。

★懿 親 イシン

親戚の間の親しみ。左傳に曰く「不廢懿親」と。

★異 數 イスウ

特別の禮遇。左傳に曰く「名位不問、禮亦異數」と。料理場。

★異 端 イタン

正しい教にそむく道。例へば孔子の儒教より見れば楊子墨翟は異端なり、基督教より見れば波羅門教を異端と云ふ。異端邪説などいふ。論語爲政篇に曰く「子曰攻乎異端、斯害也已」と。〔外語・鹿農〕

★夷 坦 イタン

(1)たいらか。平坦。(2)心にわだかまりのない事。〔海欄・高船・陸士〕

★一衣帶水 イタイタイスイ

帯のやうに一筋の狭い流をいふ。隋文帝曰く「豈可二

限一衣帶水、不_レ_レ杯_レ之」とある。一葉帶水も同じ。〔東商大・高松商〕

★一葉知秋 イチエウチシウ

小事を以て大事を察すること。一葉落知天下秋(一)一枚の桐の葉が落ちるのを見て秋の來るのを知る)の略。文錄に「山僧不_レ解數甲子、一葉落知天下秋」とある。〔水産〕

★一言以蔽之 イチゲンモツてコレをオム

一言で其の全體の意味を表はすこと。

★一期 イチゴ

人の死なんとするとき。臨終。

★一字千金 イチジセンキン

立派な筆蹟又は價值ある文章をいふ。一字の價千金もすると云ふ意である。晋書に「不_レ貴_レ勇而貴_レ忍、此眞一字千金之兵法也」とある。

★一日暴之十日寒之 イチジツコレをアタタめて

勤めることが少なくて怠ることの多いこと。即ち本義は草木を養ふのに一日之を太陽にさらして温め、後十日之を陰におき冷すこと。一暴十寒とも云ふ。〔廣

高師

★一日千秋 イチジツセンシウ 待遠しいこと。思ひ慕ふ情の深きこと。千秋は千年、又一日三秋之思とも云ふ。〔愛賢〕

★一樹蔭一河流 イチジュノカゲイツカノナガレ 少しばかりの因縁と云ふ事。説法明眼論に「宿一樹蔭一渡二河流」一夜同宿一日夫婦皆是先世結縁」とある。

★一時糊塗 イチジをコトす 上ぬりをして其の場を繕ふこと。

★一途 イチヅ ひとすぢ。

★一日之長 イチジツノチヤウ

(1) 少しく年輪の多いこと。(2) 少し優れてゐること。論語に「以吾一日長乎爾」母吾以「也」とある。

★一念 イチネン 一すぢに思ふこと。

★一年之計、在子春 イチネンのケイハルにアリ 一年中の計畫を年のはじめの春に定めて置かれれば、一年の方針立たざるをいふ。一年之計在子元旦とも云ふ。

ふ。

★一部始終 イチブシジユウ 事の始から終りまで。

★一盲引三衆盲 イチマウシユウマウをヒク 一人の愚者が多くの愚者を指圖すること。

★一網打盡 イチマウダジン 一度の網で多くの魚を捕へる義で、多くの犯罪人を同時に捕へて除き去る意。〔水産・明事〕

★一目十行 イチモクジフカウ 讀書の眼識の鋭きこと。〔讀書十行俱下〕などある。

★逸物 イチモツ 衆に優れたるもの。〔專檢〕

★一陽來復 イチヤウライフク 陰が盡きて陽が再びめぐり來ること。好運が向いて來ること。

★一蓮託生 イチレンタクシヤウ 衆人同一の運命に託すること。同じ蓮華の上に俱に生を託する義より轉ず。

★一葦 イチキ

小舟のこと。小舟の詩の衝風河廣篇に「雅謂三河廣一葦抗之」とある。

★一家言 イツカゲン 自己一人の考へる議論。

★一揆 イツキ 土民が徒黨して官に反抗し、又は相互に争闘すること。

揆は度なり、其の度を同じうするによる。孔安國尙書序に曰く「雅結衆義、其歸一揆」と。

★一邱一壑 イツキウイチガク 一つの丘に住み、一つの溪流に釣をする義で、世俗を離れて高く身を保つことの形容である。〔廣高師〕

★一氣呵成 イツキカセイ ひといきに事をなし終へること。〔陸士・高松商〕

★一掬 イツキク 両手ですくふこと。一掬の涙といひ、詩經小雅采芣篇に曰く「終朝采芣、不盈一掬」と。

★一饋十起、以勞天下之民 イツキにジツタビタちてモツてテンカのタミをラウす 民政に心を用ひ、一度の食事の間にも十回も起つて萬

民政に心を用ひ、一度の食事の間にも十回も起つて萬

民を慰めいたはること。

★一舉手一投足之勞 イツキヨシユイツトウツクノ 少し許りの骨折のこと。韓愈の應二科目一時、奥人書に「如有力者、莫二其第二而運二轉之二蓋一舉手一投足之勞也」とある。〔東蘭〕

★一舉兩得 イツキヨリロウトク 一つの事をなして二つの利を得ること。類書纂要に曰く「爲二看二文字二虛二心靜看、即涵養究索之功、一舉兩得一とある。

★逸群 イツグン 衆人に勝れたるをいふ。蜀志諸葛亮傳に曰く「亮少有三逸群之才、英霸之氣」と。

★一薰一蕕十年尚猶有臭 イツクンイチユウジフ 美事の消え易くして悪事の除き難きこと。薰は香草にして善事に喩へ、蕕は臭草にして悪事に喩ふ。左傳僖公四年の條に此の語がある。

★一犬吠形百犬吠聲 イツケンカダチにホれば 一人虚言を傳ふれば、萬人之に和して虚言を事實として傳ふること。一犬が影を見て吠えりと、他の百犬が

一犬が影を見て吠えりと、他の百犬が

その聲をきき傳へて吠える義による。【高校】

★一顧傾城 イツコシロをカタムく
美人を形容した語。漢書外戚傳に「李延年歌曰、北方有佳人一絶世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國」とある。

★一狐裘三十年 イツコキウサンジフネン
極めて儉約なこと。一枚の狐の皮衣を三十年間も着たといふ故事より出づ。即ち史記晏嬰傳に曰く「齊晏子、名嬰字平仲、事三節公、以節儉力行、重於齊、一狐裘十年、豚肩不掩豆」と。

★一刻千金 イツコクセンキン
少しの間もその貴さは千金の價あること。蘇軾の詩に「春宵一刻價千金、花有清香月有陰、歌管樓聲聲寂々、鞦韆院落夜沈々」。

★一切 イツサイ・イツセツ
ことごとく總ての意。史記李斯傳に「請一切逐之也」。イツセツは少しも。一向の意。

★一茶頃 イツサケイ
茶を一杯飲む程の少しの時間。癸辛雜識に「天裂凡一茶頃」。

★一瀉千里 イツシャセンリ
河水の一たび流れて千里も走るが如く、勢よく物事の進むこと。又文章の流暢にして力あるをいふ。福惠全書卷二十九に曰く「星馳華眼饒然映神輕舟、片刻一瀉千里」と。【外語】

★逸書 イツシヨ
散逸して発見されざる書。逸は紙と通ず、紙は失なり。史記に曰く「因以起其家、逸書得三十餘篇」と。

★一所懸命 イツシヨケンメイ
一の所を命にかけて大切に思ふこと。一生懸命も同じ。

★一身都是膽 イツシンヌメテコレタン
膽玉の極めて大なること。勇氣の全身に溢れること。蜀志趙雲傳に劉備曰く「子龍一身都 是膽」と。

★一炊之夢 イツスキノユメ
一度飯をかしぐ間の夢の義で、人世はたのみ難くうき世のはかなさをいふ。邯鄲の夢、盧生の夢、黃梁一炊の夢とも云ふ。唐の盧生と云ふ者が、邯鄲の宿舎で道士呂翁の枕に臥し、妻を迎へ、燕國公に封ぜられ、五

茶頃 乃合」とある。

★一 祭 イツサン
一笑といふに同じ。祭は笑ふ貌。供一祭（御一覽を乞ふ、御目にかける）など云ふ。春秋に曰く「軍人祭然 皆笑」。

★逸事 イツジ
世にしないこと。【水原農】

★軼事 イツジ
世間に知れずにある事柄。逸事なり。史記管日安解登に曰く「論其軼事」と。

★一視同仁 イツシドウジン
一様に視なし差別なく愛すること。韓愈の原人に曰く「是故樂人一視而可仁」と。【外語】

★一將功成萬骨枯
一人の大將が功をなすのみで、他の幾萬の兵卒は空しく骨を戰場に曝して少しも報いられない事。【水産】

★一倡三嘆 イツシャウサンタン
一たび吟唱して三たび感嘆すること。本來は一人稱へて三人和するといふ意。倡は唱なり。禮記樂記篇の「清

子を生み、年八十をこえるといふ生涯の榮華を夢みる。此の間前に宿婦が黃梁（アハ）の飯を炊ぐ間であつたといふ故事から出た語である。【專檢】

★一世之木鐸 イツセイノモクダク
世の指導者といふこと。木鐸は世をみちびき教へる者の意。【仙工・明事】

★一刹那 イツセツナ
甚だ短時間のこと。大藏法教に曰く「一念中有三九千刹那、一刹那中有三九百生滅」と。俱舍論に曰く「時之極少者名刹那」と。【金葉】

★一刀兩斷 イツタウリヤウダン
情實の纏綿せるを顧みず、断然として處分をつけること。朱子語錄に曰く「克己者是從三根源上一刀兩斷、便斬絕了」と。【東商船】

★一簞食一瓢飲 イツタンノシイツペウのイン
清貧に安んずること。簞は竹器にて飯を盛るもの、食は飯、故に一簞食は一杯の飯なり。瓢はひさご、飲は飲物、故に一瓢飲は一杯の飲物の義である。論語に曰く「賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、

同也不レ改其榮賢哉同也」と。「陸士」
★輸一籌 イツチウをユズ
負けること。一步譲ること。籌は勝負を争ふ時の數と
り、輸はまけること。「高校・神商大」

★一知半解 イツチハンカイ
一つばかり知り、半分ばかりさること。一知半解之
徒など云ふ。

★一張一弛 イツチャウイツチ
民を使ふに或は勞せしめ或は息はしむるの意。張は弛
を張ること、弛は弛をゆるめることなり。

★一丁字 イツテイジ
一個の文字。唐書張宏靖傳に曰く「天下幸無事、爾輩
挽二石弓一不レ如レ識二丁字一」とある。

★一朝一夕 イツテウイツセキ
短い時間のこと。易文言傳に曰く「臣弑二其君一子殺二其
父一非二一朝一夕之故一其所レ由來一者漸矣」

★一點紅 イツテンコウ
(1)座中にある一人の美人(藝者)の義。(2)青葉の中に
花一輪あるを云ふ。王安石の柘榴詩に曰く「萬綠叢中

一點紅

紅一點、動人春色不須多」と。
★一天萬乘 イツテンバンジヨウ
ひとつの天の下の土地を有する君主の義。萬乘は一萬
の兵車、轉じて一般に強大な國王の意なり。
★出一頭地 イツトウチをイダス
他人より一段ぬきんですぐれてゐること。一頭地を抜
くとも云ふ。「廣高師」
★一敗塗地 イツバイチにマミル
一度敗れて見る影もなくなる。一度敗れて肝腦が
地にまみれる義による。
★鵝蚌之爭爲二漁夫利一 イツバウのアラソヒはギヨ
二者利を争ふて、其利は却つて局外の第三者に占めら
れる事。即ちしぎが口を開けてゐる貝を食はうとして
鵝を殺の中に入れると、貝は急に殻を閉ぢて鵝の嘴を
狭み、兩々相争ふてゐる中に遂にもろとも漁夫に捕へ
られたといふ戰國策にある語。鵝蚌之爭、漁夫之利など
云ふ。その戰國策に曰く「趙且レ伐レ魏、燕二蘇代一爲レ燕
謂二惠王一曰、今日レ臣レ來、過二易水一蚌方出レ曝、而鵝啄二
其肉一、蚌合而箝二其喙一、鵝曰、今日レ不レ雨、明日レ不レ雨、

即有二死蚌一、蚌亦謂レ鵝曰、今日レ不レ出、明日レ不レ出、
即有二死鵝一、兩者不レ肯二相捨一、漁者得而并レ擒之一。
【專檢・神商大・長商・東農大・東商】

★佚 罰 イツバツ
政事をとり失へる罰のこと。佚は失なり。書經盤庚に
曰く「惟予一人有レ佚罰」と。

★一髮引二千鈞一 イツバツセンキンをヒク
極めて危きこと。即ち一筋の毛を以て千鈞の目方ある
物を引く義である。韓愈の與孟尚書に曰く「漢氏二已來一、
群儒區區レ修補、百孔千瘡、隨亂レ隨失、其危レ如二一髮
引二千鈞一」と。「仙醫」

★一般 イツパン
おしたべて。總べて。邵康節の清夜吟に「月到二天心一、
處、風來二水面一、時一般清意味、料知少二人知一」。「神商大」

★一斑 イツパン
一つの席。「神商大」

★一斑 イツパン
一部分。晉書王獻之傳に曰く「門生曰、此郎亦管中窺レ
豹、時見二一斑一、知二全豹一」と。「熊醫・神商大」

★溢美之言 イツビノゲン
褒め過ぎたる言葉。莊子人間篇に曰く「夫爾喜必多二
溢美之言一」と。「盛農・横商」

★逸品 イツピン
衆にすぐれた品。法書要録に「超然逸品」とあり。逸
物もおなじ。「東美・東高師」

★逸民 イツミン
公の責任なくして世を通れ居る人。論語微子篇に「逸
民、伯夷叔齊」と。「商船」

★乙夜之覽 イツヤノラン・オツヤノラン
天子の讀書せらるること。漢代の制にて一夜を甲乙丙
丁戊に五分し、五夜(五更とも)と云ふ。乙夜は二更、
即ち夜の十時頃で天子が寢に就かれる前である。杜鵑
雜篇に曰く「文宗視朝、即問二群書一、謂二左右一曰、若甲
夜視レ事、乙夜不レ觀レ書、何以レ爲二人君一邪」と。「東商大・
神商大・小商・東商」

★以逸待勞 イツをモツテラウをマツ
自らは居ながら安逸して、敵が遠く来て疲勞するのを
待つて戦ふこと。「海經・盛農・水産」

★異 圖 イト

むぼんの考。〔仙工〕

★倚頼之富 イトシノトモ

金満家をいふ。陶朱公と倚頼とは百萬の富を有した人であるによる。孔叢子に曰く「倚頼魯ノ窮士ナリ。耕ストキハ常ニ飢エ、桑トルトキハ、常ニ寒ユ。陶朱公ノ富ヲ聞キ、往イテ術ヲ問フ。朱公之ニ告ケテ曰ク、子速ニ富マント欲セバ、當ニ五桴（五匹のめうし）ヲ畜フマシト。是ニ於テ乃チ河ニ適イテ大ニ牛羊ヲ倚氏ノ南ニ畜フ。十年ノ間ニシテ、其ノ滋息計ルベカラズ。貨王公ニ擬ヘ、馳ニ名天下ニ以興ニ 富於倚氏、故曰「倚頼」と。

★母レ意母レ必母レ固母レ我 イナク、ヒツナク、コナ

胸中私意なく公平無私のこと。

★壽 則多レ辱 イノチナガければスナハチハチオホシ

長生の人は種々の恥辱に逢ふことがあるの意。

★意馬心猿 イバシエン

人間の欲情の馬や猿のやうに馳せ狂ひて制し難きといふ。楚綱教に曰く「心馬馳」。心地觀經に曰く「心如二

★以 聞 イアン

臣民が天子に上啓する時用ふる語。以は助語。上聞。上奏。禮記曾一問篇に曰く「有司以聞曰、古之禮、慈母無レ服」と。

★家 給人 足 イヘいヘキフレヒトびとたる。カキフ

家は富み、人は多く世運の隆盛なること。

★家 苞 イヘツト

我が家に持歸る土産。〔高校・滿教・京城法〕

★家無ニ儋石 イヘにタンセキナシ

家に少しの貯蓄もない事。儋は二石、石は一石なり。

★家貧則思ニ良妻 一モふ

意義は要せず。史記に曰く「家貧 則思ニ良妻、國亂 則思ニ良相」と。

★移木之信 イボクノシン

信用出来ること。秦の商鞅が新法律を民に勵行させんとして、三丈の大木を國都の南門に立て、北門に移す者に十金を與へんと、信ずる者なし。五十金を與へんと一人ありて之を移す、直に與ふ。之より民は新政府

野馬ニ如シ猿ノ

★衣 鉢 イハツ・エハツ

(1)佛家にて法燈を傳へること。(2)一般に於て師の教を受け其の法を承け繼ぐこと。衣は袈裟なり、即ち僧服なり。鉢は應器なり。宗記に曰く「慧能居士既受三法與其衣鉢一作證問曰、法即闍命衣鉢復傳授乎」と。〔東商大・水産〕

★倚馬之才 イバノサイ

文章を作るに早き才あるをいふ。李白上韓荊州書に曰く「請賦倚馬可待」と。

★夷蠻戎狄 イバンジユウチキ

四方の野蠻國の事。東方の野蠻國を東夷、四方の野蠻國を四夷、南のを南蠻、北のを北狄といふ。禮記王制篇に曰く「東方曰夷、被髮文身有不火食者一矣。南方曰蠻、鵝鬣交趾有不火食一矣。西方曰狄、被髮衣皮有不粒食者一矣。北方曰狄、衣羽毛穴居有不粒食者一矣」と。〔海國・商船・陸士〕

★志 忿 イファン

いかり、立腹する事。論語に「一朝之忿、忘其身」と

★倚門望 イモンのパウ

母が他國にある子の歸るのを門によりて待ちわびる情を云ふ。戰國策に曰く「汝朝出而晚來、吾即倚門而望」。倚門之望とも云ふ。

★入 相 イリアヒ

タぐれのこと。〔大分商〕

★弊 倫 イリン

人の常に守り行くべき道。詩經淇水に曰く「我不レ知ニ其弊倫修ニ紋」と。〔醫事・山商〕

★量 入爲レ出 イルをハカリテイツるをナす

収入の額をはかつて、支出の額を定めること。小學に曰く「制ニ財用之節一量レ入 爲レ出、稱ニ家之有無一、給ニ上下之衣食、及吉凶之費」。量レ入制レ出の語あり。〔東商大〕

★倚 廬 イロ

父母の喪中に喪主の居る室。禮記問喪篇に曰く「居ニ於倚廬」哀親之在土地」と。

★已 往 イワウ

今よりまへ、即ちすぎ去つたこと。

己(慣川音ヨ)はおのれ、つちのと。自己、克己。

已はすでに、やむのみ、已往。

已はみ、十二支の一。

歌に「みハ上ニ、おのれつちのときハ下ニ、いハナカバニテすてにやむのみ」。

★依 違 イキ

何れにも決定せずぐぐくすること。依は寄りつく、違はたがふ。首鼠兩端に同じ。漢書谷永傳に「展レ意無レ所ニ依違」とある。〔陸士〕

★怡 悅 イエツ

よろこぶこと。

★振ニ衣千仞岡

イをセンジンのヲカにフルふ世俗を脱して志を高尙にすること。

★暗啞叱咤

インアシツタ

怒りの聲を發して嚴しく號令すること。暗啞は怒氣を

懐くこと。叱咤は怒氣を外に發すること。史記淮陰侯

列傳に曰く「請言三項主爲人暗啞叱咤、千人皆服」と。

★隱 憂 インイウ

痛み憂ふること。隱は痛。詩經に曰く「耿耿、不レ寐、如レ有ニ隱憂」と。

★隱逸花

菊の異名。周惇頤の愛蓮說に曰く「菊花之隱逸者也」と。

★殷 殷 インイン

(1)轟く音の形容。車、雷、大砲、鐘鼓等。砲聲殷殷。

(2)うれへるさま。詩經邶風柏舟篇に曰く「憂心殷殷」と。

★霖 雨 インウ

ながあめ(十日以上續け降る雨)。禮記月令に曰く「霪雨蚤降」と。淫雨、淫霖も同じ。〔鹿農〕

★網 緼 インウン

天地の氣の交り合ふこと。易の繫辭下傳に曰く「天地

網緼、萬物化醇」と。又氣氣に通じ、氣の盛んなるさま。杜甫の句に曰く「佳氣日氣氣」と。

★因 緣 インエン・インオン

(1)後の果報を生ずべき今の關係。(2)由來、事物の起原。緣は因の字の韻に引かれてネンと發音することに注意すべし。

★姻 家 インカ

親族のこと。後漢書に曰く「與ニ羊陟ニ姻家、豈敢由助ニ私黨」と。

★殷鑑不遠

他人の失敗を見て自ら過たぬやう戒となすべきこと。

殷は殷國の人なり、鑑は手本なり。即ち殷人の手本として戒しむべきは前代夏の世の滅亡せることにありといふ意。詩經に曰く「殷鑑不遠、在ニ夏後之世」と。

〔神商大・松商・外語〕

★允 許 インキョ

ゆるすこと。允可も同じ。

★飲 泣 インキユウ

すゝりなき、聲を發せずして泣くこと。漢書賈捐之傳

に曰く「老母寡婦、飲泣哭巷」と。

★殷 懃 インギン

懇切又は丁寧の意。又殷勤と書く。史記司馬相如列傳に曰く「文君侍者通ニ殷懃」と。〔高校〕

★因果思想

原因結果の考へ。因果應報の語あり。〔水原農〕

★因果律

原因結果の法則。〔和商〕

★引 決 インケツ

責をおふて自殺する事。司馬遷報任少卿書に曰く、不レ能ニ引決自殺」と。

★淫 祀 インシ

いかゞはしいものを神として祭ること。其のやしろを淫祠と云ふ。禮記曲禮に曰く「非ニ其所ニ祭而祭之、名曰淫祀」、淫祀無レ福」と。

★因 襲 インシフ

従来よりの習慣(しきたり)に従ふこと。因襲打破の語あり。因習も同じ。劉焯の移太常博士書に曰く「法度無レ所ニ因襲」と。〔金葉〕

★印 綬 インジュ

古、官吏の佩用した印と其のひも。任命の際天子より授けらる。漢官儀に「綬ハ長サ一尺二寸、十二月ニ法ル、廣サ三尺 天地人ニ法ル」とあり、史記に「佩ニ其印綬」と。

★因循姑息 インジュンコソク

舊弊を守り、ぐづぐづして、はきくせぬこと。漢書循傳に曰く「光因循守舊」と。

★允 當 インタウ

丁度よくあてはまること。左傳に曰く「軍去曰允當即歸」と。

★隱 如ニ一敵國

一、インとしてイナテキコクのごとし人の威重なることが一の敵國のやうに動かすを得ざるが如しとのこと。隱は重くて威のあるさま。「東商大」

★隱忍自重 インニンジチヨク

辛き事を我慢し、自分の人格をたつとんで恥づべき事をなまぬこと。史記伍子胥傳に曰く「隱忍就功名」と。「鹿農」

★陰 符 インフ

兵書の名。戰國策に曰く「魯大公陰符謀」と。

★允文允武 インブンインブ

文武の兩道を備へたる明君を形容する詞。允はマコト。詩經に曰く「允文允武、照格烈祖」と。

★因 明 インミヤウ

印度に行はるゝ論理学。大論に曰く「因明考定正邪」研「覆止邪」と。

★澆 滅 インメツ・エンメツ

滅び絶ゆること。又澆滅と書く。謝惠連の祭古文に曰く「銘諱澆滅姓字不傳」と。「九藥・陸士・外語・小商」

★隱 約 インヤク

(1)はつきりわからぬこと。史記大史公自序に曰く「詩畫隱約者、欲遂其志之恩也」と。(2)困窮すること。莊子山木篇に曰く「夫豈風文豹、雖飢渴隱約、猶且胥疏于江湖之上、而求其爲」と。

キの部

★帷 帳 キヤク

(1)陣營のこと。(2)策戦計畫をなすところ。帷も帳もと

★委 蛇 キイ

もにまく。運籌帷幄之中を見よ。「陸士・海兵・海欄」
(1)恣然と落ち着きたる貌。詩經の召南に曰く「退食自公委蛇委蛇」。 (2)恐る恐る歩行する時の貌。史記蘇秦傳に曰く「嫂委蛇蒲服」と。

★委 曲 キキョク

詳しくと云ふ意。委は隠ふなり、故に委曲は隠ひ曲るること。換言すれば細かい事情と云ふもよし。鮑照の詩に曰く「開十帝事、委曲兩都情」と。「女高麗」

★遺 矢 キシ

大便をすること。矢は屎なり。史記廉頗傳に曰く「一飯遺矢」と。「高校」

★委 積 キシ

あつめたくはへること。委も積も聚むるなり。小さきを委といひ、多きを積といふ。周禮に曰く「門關之委積、以待施惠」と。

★畏 日 キジツ

夏の日のこと。十八史略の「冬日可可愛、夏日可畏」より出た語。

★娟 集 キシフ

多く集ること。娟は針風の毛、多くある故にいふ。

★慰 藉 キシヤ

なぐさめいたはり力を添へる事。後漢書に「所以慰藉之良厚」とある。「海欄・北大・山商・明事・高檢」

★偉丈夫 キジヤウフ

身のすぐれてたくましき人。宋史に「夢休丈夫被一甲入中寢室」とある。

★遺 珠 キシユ

捨てられて未だ世に出ぬ玉といふこと。古人の詩文などの傑作にして未だ世に知れざるものを「蒼海之遺珠」と云ふ。

★萎 縮 退 嬰 キシユクタイエイ

しなびちぢみしりぞき守ること。萎靡。退嬰の反対は進取。「北大・名商・桐工」

★遺 緒 キシヨ

のこした業。遺業に同じ。書經君牙に曰く「惟予小子、嗣守文武成康遺緒」と。

★維 新 キシン

政治を一新すること。詩經に「周雖舊邦、其命維新」とある。〔東商大〕

★韋帶之士

キタイノシ
貧賤の士のこと。皮帶をしめて居る人の義。漢書賈山傳に曰く「布衣韋帶之士」と。

★唯諾

キダク
承知の意。唯も諾も同意なれど、速やかに恭みて承知するを唯と云ひ、緩かにして慢かに承知するを諾と云ふ。禮記曲禮に曰く「必慎唯諾」と。

★萎凋

キテウ
しをれしむこと。〔廣高師〕

★威風堂々

キフウダウダウ
犯しがたくすがたのさかんさま。

★遺風餘烈

キフウヨレツ
後世へ残した善良なる政教や事業。風は風化、烈は業なり。宋書謝禮遺傳に曰く「遺風餘烈事極三江」と。

★遺腹之子

キフクノコ
父没して後生れたる子、即ちわすれがたみ。淮南子説林訓に曰く「遺腹子不_レ思_二其父_一」。

★韋編三絶

キヘンミタビタツ
讀書に勤むる意。古代の書物は竹札に字を書き皮にて編みて作りたり。その編み皮が三度切れる程屢々繰り返して讀みたりとのこと。史記孔子世家に曰く「讀_レ易_三絶_二」。

★偉烈

キレツ
前人ののこした立派な功績。〔明專〕

★委吏乘田

キリジヨウデン
いやしい官といふこと。委吏は倉庫を司る役人、乘田は牧場の畜類を司る官。〔陸士〕

ウの部

★烏有

ウイウ
皆無の義。漢書司馬相如傳に曰く「相如以_レ子虛_ノ言也、爲_レ楚稱、烏有先生者、烏有_二此事_一也、爲_レ齊難_二亡是公者、亡_二是人_一也」と。〔東商・名譽〕

★有緣

ウエン
佛道に縁のあること。

★烏喙

ウカイ

(1)烏のくちばし。(2)人の貪慾な相をいふ。

★烏合之衆

ウカウノシユウ
烏の集りたる様に統一されてゐないこと。忽ち合し、忽ち散ず、團結の固からざるを云ふ。〔高松商・外語・千聲〕

★于歸

ウキ
婦人の嫁すること。詩經の桃夭に「之子于歸、宜_二其室家_一」室は女、家は男なり。

★浮世

ウキヨ
定めなき世といふ意。〔小商〕

★憂世

ウキヨ
憂の多い世といふ意。

★迂愚

ウグ
世事に暗くしておろかなこと。元稹詩に曰く「拙劣_ニ仍非_レ速_ニ迂愚_ニ且異_レ事_一」。

★迂濶

ウクワツ
事情にうといこと。漢書王吉傳に曰く「以_二其言迂濶_一不_二其龍異_一」。〔和商〕

★有象無象

ウザウムザウ
(1)有形無形のすべての物。(2)ごたくある物。〔東商・小商・陸士〕

★胡散

ウサン
疑はしいこと。

★丑刻

ウシノコク
今の午前二時頃。〔神宮〕

★對牛彈琴

ウシニムカフテコトをダシ
愚人に向つて道理を説くも、其の効果のないたとへ。

★鬱金色

ウコンシヨク
黄色のこと。〔東美〕

★右近之橋

ウコンノタチバナ
紫宸殿の階下の西の方に植ゑてあつた橋。左近の櫻の對。〔東高師・小商〕

★右近之橋

ウコンノタチバナ
紫宸殿の階下の西の方に植ゑてあつた橋。左近の櫻の對。〔東高師・小商〕

★有象無象

ウザウムザウ
(1)有形無形のすべての物。(2)ごたくある物。〔東商・小商・陸士〕

★胡散

ウサン
疑はしいこと。

★丑刻

ウシノコク
今の午前二時頃。〔神宮〕

★迂 儒 ウジユ

書籍上の學問ばかりして世の中の事情に通じてをらぬ儒者。〔横商〕

★放 牛子桃林之野一歸ニ馬干華山之陽一

ウシをトウリンノヤにハナチウマをクワザンノミナミにかへす

天下に兵亂のやむこと。周の武王が殷を滅して、戦争に用ひた牛も無用になつて桃林といふ處の野に放ち、同じく戦争に使用した馬も華山の南に放ち歸したといふ故事より出づ。〔高松商〕

★字 内 ウダイ

天下のこと。ウナイとも讀む。史記に「席ニ卷天下」包ニ畢字内」とある。〔外語〕

★有 待 ウタイ

凡夫の身。凡て他の助力を待つて生存する義による。有待の身などいふ。〔盛農〕

★打 物 ウチモノ

(1)太刀、槍、薙刀などの武器。(2)太鼓、鼗鼓など。〔大

★裏 書 ウラガキ

證明をすること。手形の裏に證明書きする義より来る。〔山慈醫〕

★孟蘭盆 ウラボン

陰曆七月十三日より十五日まで三日間祖先の靈を祭ること。

★羽 林 ウリン

近衛府の大中少將の異名。〔専檢〕

★雨露之恩 ウロノオン

深い恩のこと。萬物が雨露の恩を受けるが如きをいふ。

★右往左往 ウラウサラウ

あちらへ行きこちらへ行くこと。〔北農〕

★禹 域 ウキキ

漢土のこと。禹が洪水を治めて境界を正しくしたるを以ていふ。〔廣高師〕

★有爲轉變 ウキテンベン

人生の生死變轉は定りなく、先にあつたもの今なく、今あるもの後に無いのを云ふ。〔水産・廣高師〕

商・日醫

★有頂天 ウチヤウテン

熱中して他のことを忘れること。夢中。〔陸士〕

★卯 月 ウヅキ

卯の花の咲く月、即ち陰曆四月のこと。〔神宮・海櫻・海兵・北大・日大〕

★現 身 ウツセミ

生存してゐる身。

★蔚 然 ウツセン

物のしげる貌。〔京城工〕

★烏兔匆々 ウトサウク

月日の過ぎ行くことのはやいこと。烏は日、兔は月なり。即ち太陽の中にある金烏と稱する三本足の烏と、月の中にあるといふ兔とより日月即ち月日となる。匆は早いこと。〔名商〕

★優婆塞 ウバソク

佛教を信じてゐる男僧。善男。〔高檢〕

★鬱 憤 ウツブン

腹の中に止めて置いた憤りのこと。

★雲煙過眼 ウンエンクワガン

まはり遠く實地に役に立たないこと。〔盛農・臨教〕
一時の樂にて長く心に存せざること。雲煙の眼前を過ぎて跡なきが如しといふこと。東坡の寶輪堂記に曰く「吾、富貴ヲ薄ンジテ誓ニ厚ク、死生ヲ輕ンジテ誓ヲ重ンズ。豈、顛倒錯謬シテ、ソノ本心ヲ失ハザランヤ。コレヨリ復タ好マズ。喜アベキ者ヲ見レバ、時ニ復タ之ヲ蓄フト雖モ、然レドモ、人取り去ルモ、亦タ惜マザルナリ。コレヲ雲煙ノ眼ヲ過ギ、百鳥ノ耳ニ感ズルニ譬フ。豈ニ欣然トシテ之ニ接セザランヤ、去ツテ復タ念ハザルナリ」と。〔海兵・名工・東美〕

★蘊 奥 ウンオウ

學問技藝などの奥深いところ。〔高校・米工・千園〕

★雲 客 ウンカク

殿上人のこと。即ち殿上に昇ることを許された人。

★雲合霧集 ウンガフムシウ

多く集ること。史記に「天下之士雲合霧集」とある。

★雲 漢 ウンカン

あまの川のこと。詩經に「倬彼雲漢、爲三章于天」と

ある。

★雲蒸龍變 ウンジョウリヨウヘン

英雄が機會に乗じて起ること。龍の雲を得て變化するに喩ふ。史記に「得_テ二尺寸之柄_ヲ「雲蒸龍變」とある。

★雲 水 ウンスキ

諸國を修行して歩く僧。「雲の行方定らず、水のめぐり流れる如く諸所を遍歴する僧」。〔水産〕

★蘊 蓄 ウンチク

積みたくはへのこと。〔三重・北大〕

★運否天賦 ウンブテンブ

運まかせのこと。人の運不運は天命に由るの義。

エの部

★營 營 エイエ

(1)あくせくと忙しいこと。列子に曰く「安知_ニ營々_ト而求_レ生非_ニ惑乎_ト」。 (2)しげく往來するさま。詩の小雅に曰く「營營青蠅」と。〔高校・神商〕

★榮耀榮華 エイエウエイダワ

盛にさかえときめく事。曹植王仲宣誄に「榮_ニ耀當世_ニ」

とある。又史記に「丈夫當_レ時當_ニ榮耀榮華_ト」とある。

〔鳥農〕

★永 訣 エイケツ

永のわかれ即ち死別のこと。江淹の別賦に「誰能_ニ換_ニ暫離之狀_ト、寫_ニ永訣之情_ト者_乎」とある。〔商船〕

★盈 月 エイゲツ

満月のこと。盈はみつるなり。この反對を虧月といふ。

★永 劫 エイゴフ

極めて長い年月のこと。劫は長時間のこと。〔廣高師・鹿農・京城工〕

★嬰 兒 エイジ

みどりご即ち赤子のこと。潜夫論に曰く「嬰兒常_ニ傷_ニ于飽_ト也、貴臣常_ニ禍_ニ傷_ニ于體_ト也、哺乳多_ニ則生_ニ痲病_ト、富貴而致_ニ驕疾_ト」と。〔高船〕

★榮 辱 エイジヨク

名譽とはぢ。〔米工・高靈〕

★穎 脫 エイダツ

才氣の衆に優れて抜け出ること。藝の中の錐がほさき許りてなくその柄まで抜け出るといふ故事より出づ。

即ち史記平原君列傳に曰く「乃_ニ顯_ニ脫_ニ而出_ト、非_ニ特_ニ其未見而已_ト」と。〔東高師〕

★英 邁 エイマイ

才智の人より過え過ぎること。宋史に「高明英邁」とある。〔海欄〕

★英 雄 エイユウ

才能と武勇の特にすぐれた人。十八史略東漢に「天下英雄」とある。〔海兵〕

★叡 慮 エイリヨ

天子のおぼしめし。

★瑩 城 エイキキ

墓のこと。柳宗元の書に曰く「不_ニ敢_ニ望_ニ再歸_ニ掃_ニ瑩城_ト、退_ニ托_ニ先人之廬_ト以_ニ盡_ニ餘齒_ト」と。〔彦商〕

★搖 曳 エウエイ

ゆら／＼と動かしひくさま。〔海欄〕

★要 害 エウガイ

我には必要で敵にとつては害となる場所のこと。史記始皇本紀に曰く「因_レ河爲_レ津、據_ニ億丈之城_ト、臨_ニ不測之谿_ト、以_ニ爲_レ固、良將勁弩守_ニ要害之處_ト、信臣精卒陳_ニ

利兵_ニ而誰何_ト」と。

★要 港 エウカウ

軍港以外の重要なみなと。

★要 擊 エウゲキ

途中に待ち伏せてうつこと。遊撃。〔五高〕

★要 塞 エウサイ

敵軍を防ぐ爲に要害のところ築いたとりで。禮記月令に曰く「孟冬備_ニ邊境_ト、完_ニ要塞_ト」と。

★天 折 エウセツ

わか死にすること。折はまだ結婚する年頃に至らずして死するをいふ。吳志に曰く「顔回有_ニ上智之才_ト、而夭折_ト」と。天_ニ 殤_トも同じ。〔京城工・盛農〕

★要 素 エウソ

必要で缺ぐことの出来ぬもと。〔和高〕

★窈 窕 エウテウ

静かてしとやかなさま。多く婦人の徳を形容し、又美貌をも形容す。詩經に曰く「窈窕淑女、君子好逑」と。淑は善なり、好逑は善いつれあひ。

★搖 籃 エウラン

小兒を入れてつるして置き、時々動かして慰め眠むらせる様に作つたかごのこと。搖籃の地は故郷のこと。

〔高松商〕

★要領 エウリヤウ

主要の個所のこと。要は衣の腰、領は表のえりをいふ。衣を持つには、先づ衣のこし(要)の所と、えり(領)の所とを持つを以て、事物の主要なる個所を要領と云ひ、更に轉じて、とりとめなきを要領を得ずと云ふ。

★要路 エウロ

(1)敵の來さうで油斷のならぬ路すちのこと。(2)權力を握つてゐる役。當路顯要の官。要路の大官など云ふ。

★易簀 エキサク

學徳ある人の死をいふ。簀は竹又は葦で編んだ物、易はかへるなり。禮記の檀弓に曰く「曾子、疾病ニ廢ス。曾元、曾申、足モトニ坐ス。童子阴坐シテ燭ヲ執ル。童子曰ク、幸ニシテ晄ナルハ大夫ノ簀カ。曾子曰ク、然リ、斯レ季孫ノ賜ナリ。我未ダ之ヲ能ク易ヘズ、元、起ツテ簀ヲ易ヘヨト。舉ゲ扶ケテ之ヲ易フ。席ニ反ツテ未ダ安ンゼズシテ歿ス」より出づ。〔横商米

工・長商・京城〕

★益者三友 エキシヤサンイウ

交つて益を得る三人の友のこと。即ち正直に物を云ふ人、誠意ある人、多聞の人。益友の反対は損友。〔長商〕

★奕世 エキセイ

代々のこと。奕はかさなるなり。奕世載徳の語あり。

★掖庭 エキテイ

後宮にある部屋、女官の住んでゐる處。即ち奥御殿。

★依怙最貞 エコヒイキ

特に目をかけて引立てること。依怙は(1)よりたよること。(2)轉じて父母の稱。(3)へんばなこと。〔高校・九藥・愛醫・外語・鹿農〕

★似非・似而非 エセ

似て非なること。似非宗教などいふ。〔同志〕

★因噎廢食 エツにヨリテシヨクをハイサ

少しの障害で大事なことを廢する喻へ。本義は物が喉に塞りむせんだ爲め食事を廢する意。淮南子説林訓に「有ニ噎死者ニ而禁ニ天下之食則悖矣」とある。

★傳衣鉢 〔高校〕
エハツをツク

佛家にて法を傳ふる事。又弟子が師の法を傳授するを云ふ。イハツの部を見よ。〔專檢・東高師・高校・北大・水産・明專〕

★宴安酖毒 エンアンチンドク

何事もせず、ぶら／＼として遊んでゐる禍は酖毒(鳩といふ鳥の羽を酒にひたして毒殺に用ひる毒)に同じだといふこと。左傳に「宴安酖毒、不レ可レ懼也」とある。

★演繹 エンエキ

おしひろめてのべること。演繹法は推論の一で、反対は歸納法である。〔名商〕

★沿革 エンカク

始めから今日までの移り變りのこと。沿革は其まゝ襲ひ來ること、革は變化を經來ること。

★烟霞痼疾 エンカコシツ

深く山水を愛する性質のあること。唐書に「田游巖隱ニ箕山ニ、高宗幸嵩山ニ、親至其門ニ、游巖野服出拜ス

帝曰、先生此佳乎、否、答曰、臣所レ謂泉石音旨、煙霞痼疾也」とある。〔大醫大〕

★影響 エイキヤウ

ある事柄が他の事柄にまで關係を及ぼすこと。影の形に従ひ、響の音に應ずる義。書經に「禹曰惠迪吉、從之進凶、惟影響」とある。

★燕居 エンキヨ

安息をしてゐる時のこと。燕は安んずるの義。〔長商・金工〕

★鉛華 エンクワ

おしろいのこと。

★閹官 エンクワン

宦官、去勢されて宮に仕へる男子。主として宮門の開閉を掌る。周禮に「閹人、宮中ノ門ノ禁ヲ守ルコトヲ掌ル」とある。

★捐館 エンクワン

人の死のこと。捐はすつるなり。家を捨つることにして即ち死をいふ。

★偃蹇 エンケン

人

(1)まがりくねるさま。(2)おどりたかぶるさま。左傳に「彼皆假蹇、將_レ棄_二子之命_一」と。(3)高くそびえたつ様。〔陸士・海兵〕

★鉛 槩 エンザン

紙と筆のこと。槩は木の札。古、鉛を以て槩に書す。文章を業とすることを鉛槩に従ふといふ。〔鹿農〕

★燕雀安知_二鴻鵠之志_一

エンジャクイヅクンゾコウコクノコ、ロザシをしらんや

小人は大人物の志を知ることとは出来ないといふ。燕雀はつばめと雀で小人に喩へ、鴻鵠はおほとりと白鳥で大人物に喩へたのである。〔海兵・高松商・海欄〕

★燕雀不生_レ鳳

エンジャクホウをシヤウゼズ

★厭 世 エンセイ

此の世をいやに感ずること。厭世自殺など云ふ。

★燕 石 エンセキ

玉に似たる一種の石。似て非なるものを云ふ。説苑に「愚人得_二燕石_一、燕_レ之_レ以_レ爲_二大寶_一」とある。

★偃鼠飲_レ河不_レ過_二滿服_一 エンソカにノむもマンブ
人の性分は自然に定つてゐるものであるから、各々其の分に安んじなければならぬとのこと。偃鼠(どぶれずみ)は大なる河で水を飲む時でも、腹一ぱい飲めばそれで満足するの義。莊子に曰く「鷓鴣巢_レ林不_レ過_二一_レ枝_一、偃鼠飲_レ河不_レ過_二滿服_一」と。

★炎 帝 エンテイ

夏の神のこと。

★鹽 梅 エンバイ

アンバイとも讀み、アの部で詳細説明す、参照あれ。

★偃 武 エンブ

戰をやめること。偃はやめる、しまふの義なり。

★閻浮提 エンブダイ

印度地方。又は人間界のこと。

★延 袤 エンボウ

ひろさのこと。東西を延といひ、南北を袤と云ふ。史記に「延袤萬餘里」とある。

★湮 滅 エンメツ

湮滅

インメツの部を見よ。

★炎 涼 エンリヤウ

(1)あついと涼しいと。齊書に曰く「布政司_ニ炎涼_一」。(2)人情のあついと涼しいと。李白詩に曰く「榮枯異_ニ炎涼_一」と。〔北農・東北大〕

エの部

★回 向 エカウ

讀經して亡靈の菩提(さとり)を念ずること。止觀に「回_ニ衆善_一、向_ニ菩提_一」とある。〔高校〕

★會 釋 エシヤク

(1)會得して解釋すること。(2)一禮をなすこと。挨拶。お辭儀。(3)にこやかにへりくだること。〔高校・福商・外語・北大2・長高2・山商〕

★會者定離 エシヤヂヤウリ

相ひ會ふ者は必ずまた別れることあるをいふ。會ふは別の始といふことがある。遺教經に「世皆無常、會_レ必有_レ離_一」とある。〔水産〕

★越 權 エツケン

エ・エの部

權限外のことをすること。

★若_二越人視_レ秦人之肥瘠_一 エツジンノシンジンノヒセキをミルゴトし
何等の痛痒を感じないこと。即ち越と秦とは土地甚だしく懸隔してゐるが故に、秦人の肌えやせを越人が見ても何ともないの義。

★越 俎 エツツ

自分の分限を越えて出しやばる事。俎はマナイタで料理人の道具である。その俎を越えて出しやばるなり。即ち莊子に「庖人、庖ヲ治メズト雖モ、尸祝ハ楸俎ヲ越エテ之ニ代ラズ」とあり、料理人が料理のことを勉めずとも、祭祀を司るものは、料理のことには關係しないといふこと。越俎之罪とは分限を越える罪なり。〔廣高師〕

★越鳥巢_二南枝_一 エツテウナンシニスクフ

故郷の忘れ難い喩。越の國は南に在る。故に越の鳥は他國に在つても樹の南に巢を構へる義。文選の古詩に曰く「胡馬依_二北風_一、越鳥巢_二南枝_一」と。

★會 得 エトク

のみこむこと。心に合點すること。〔北大・陸士〕

★鴛鴦 エンアウ

ワシドリのこと。鴛は雄、鴦は雌なり。雌雄相離れず人其の一を得れば、一は相思ひて死すといふ。鴛鴦の契は夫婦相親しむ事。列異傳に「宋康王埋韓憑夫婦、宿夕文梓生、有鴛鴦雌雄各一、恒棲二樹上、晨夕交頸、音聲感人」とあり、李白の詩に「玉樓巢翡翠、金殿鎖鸞鴦」とあり、又韓偓の詩に「有時時間弄筆、亦畫兩鴛鴦」と。

★苑 園 エンイウ

花木鳥獸等のあるその。〔日醫〕

★遠交近攻 エンカウキンコウ

遠い所の國と親しみ、近い所の國と攻め合ふこと。史記に曰く「不如此則交而近攻、得寸則王之寸也、得尺亦王之尺也」と。〔外語〕

★婉 曲 エンキョク

それとなく遠まはしにいふこと。露骨の反對。〔長商・北大・明專・米工〕

★淵 源 エンゲン

ふちとみなもとにて、事物の根本をいふ。班固の典引

★猿猴取月 エンコウツキ

に「將酌道德之淵源」とある。猿の爲に命をすつる喩。猿猴はさる。僧祇律に「佛、比丘ニ告グ、過去ノ世ノ時、波良奈城ニ、五百ノ猿猴アリ。樹下ニ井有ルヲ見ル。井ノ中ニ月ヲ見テ、共ニ樹ノ枝ヲ執リ、手尾相接シテ井ニ入りテ月ヲ取ル。枝折レテ一齊ニ死ス」とある。〔水産〕

★冤 恨 エンコン

うらみ。

★冤 罪 エンザイ

無實の罪。冤罪を雪ぐなど云ふ。冤枉も同じ。

★遠 邇 エンジ

遠きと近きの事。書經に「四夷咸賓、無遠弗届」とある。

★遠水不救近火

遠い所のものより近い所のものが大切といふこと。寶鑑に「遠水難救近火、遠規不如此近隣」とある。又韓非子に曰く「人ヲ越ニ假リテ、溺子ヲ救フ。越人善ク游グト雖モ、子生キズ。火ヲ失シテ水ヲ海ニ取ル、

海水多シト雖モ、火必ラズ滅エズ。遠水ハ近火を救ハザレバナリ」と。

★宛 然 エンゼン

あたかも。まながら。〔米工〕

★淵 叢 エンソウ

多く物の聚る所。淵は魚のあつまる所、叢は獸のあつまる所なるによる。書經に「爲天下逋逃主、萃淵叢」とある。

★怨 黷 エンツイ・エンタイ

うらむこと。〔商船〕

★知淵中之魚者不祥

淵から淵まで窮めるのは宜しくないとの喩。即ち淵の中の魚を見透して知るはよろしくないの義。

★怨 女 エンヂョ

夫なくして空しく怨を抱く女のこと。孟子に曰く「内無怨女、外無曠夫」とある。曠は空しなり、即ち妻なき夫。

★宛 轉 エンテン

(1)緩かに舞ふさま。(2)眉目のやさしげなさま。(3)玉な

★淵 轉 エンテン

どの轉るさま。轉じて文章などの流暢なこと。

★圓 轉 滑 脫 エンテンクワツタツ

言葉上手で角がなく如才がないこと。〔海軍〕

★猿 臂 エンビ

長さひぢ。猿臂者は善く射たりといふ。

★圓 七 取 方 篋 之 政

隅みずみまでよく行き届かぬこと。即ち圓いさじで四角な箱の味噌を取る義である。〔高商〕

★怨 府 エンブ

怨の集る所。〔鹿農〕

★轅 門 エンモン

陣營の門のこと。轅は車のかぢぼう。戰陣にて車を以て垣を造り、其の出入の處は轅と轅とを向ひあはせて門をあらはすによる。〔高校〕

★冤 枉 エンワウ

無實の罪。冤は無實の罪。枉は事實を曲げること。冤罪に同じ。〔明專・千圓・早大專〕

★謳歌 オウカ

徳をたゞへうたうこと。孟子の「謳歌者、不謳歌樂之子、一而謳歌舞」による。〔陸士〕

★應酬 オウシウ

こたへむくゆること。返事。返禮。陸游詩に曰く「老來萬水烟、不獨廢應酬」と。〔鹿農・旅工・北大・長商〕

★應接不暇 オウセツにイトマあらず

一々あいきつするひまなく多忙なること。元は山水の景勝多きにいふ。劉義慶の世説に「從二山陰道上一行、山川自相映發、使二人應接不暇」と。下二蛟蘇川一記に「交替去來、不暇應接」とあるはこれなり。

★應對如流 オウタイナガるゝがゴトシ

人と相對して話す事がよどみなく巧なこと。〔熟工〕

★嘔吐 オウド

へどつきもどすこと。嘔吐を催すなどいふ。〔水産〕

★懊惱 オウノウ

なやみもだへること。

★應揚 オウヤウ

寛大で細かいことに拘らないこと。〔海兵・海機〕

★甌窶滿篝、汗邪滿車 オウルマンカウオジヤマン

非常な豐作をいふ。甌窶は高地、汗邪は下地の田、篝は籠なり。故に高下の田地、みな收穫多くして籠に滿ち、車に滿つるをいふ。史記滑稽傳に「今者臣從二東方一來、見二道傍有二穰田者、操二豚蹄酒一盃、而祝曰、甌窶滿篝、汗邪滿車、五穀蕃熟、天下滿家、臣見二其所持者狹而所欲者奢」とある。

★臆說 オクセツ

しかとした根據なくして主張する議論。〔長商〕

★臆測 オクソク

真相を究めず自分勝手に推しはかること。後漢書李通傳に「臆測隱微」とある。

★臆斷 オクダン

真相を究めず自分勝手に推しはかつてきめること。

★乙夜之覽 オツヤノラン

イツヤノランを見よ。〔東嶺專〕

★於菟 オト

虎をいふ。左傳に曰く「楚人謂二乳殺」、謂二虎於菟、

★己所不欲勿施於人

故命之曰「殺國於菟」と。オノレのホツセザルトコロをヒトにホドコナナカレ自分の嫌なことは人にさせる勿れといふこと。論語顔淵篇に曰く「仲弓問仁、子曰、出門如見二大賓、使民如承二大祭、己所不欲、勿施於人、在邦無怨、在家無怨、仲弓曰、雍雖不敏、請事二斯語」と。〔尊檢・水産〕

★追手搦手 オフテカラメテ

城の表門と裏門のこと。追手搦手敵をうくは前後に敵をうけること。〔注大2・小商〕

★大内山 オホウチヤマ

皇居のこと。朝廷の山の義なり。〔神宮〕

★大御稜威 オホミイツ

天皇の御威光のこと。

★思過半 オモヒナカバにスグ

思ひ考へて自ら得る所の多いこと。易に曰く「知者、觀二川象辭、則思過半矣」と。〔廣高師・海經・盛農・神商大〕

★母屋 オモヤ

本宅のこと。〔京醫〕

★恩赦 オンシヤ

なされて罪をゆるされること。韓愈詩に「前日過二恩赦、私心喜還憂」とある。

★恩澤 オンタク

いつくしみ。澤はうるほひ、生物に對する雨露の恵に比していふ。史記に曰く「恩澤加二海内」と。

★陰陽師 オンヤウジ

陰陽の道によつて人の身の吉凶を占ひ、又豫言する易者。〔大東文・水産・陸士〕

ヲの部

★甕牖 ヲウイウ

いぶせき住居。カメの口を窓にするの意義なり。

★嗚咽 ヲエツ

むせび悲しむこと。張協の亡命に「婦老爲之嗚咽」とある。〔陸士・大醫・横商・海機・高檢・女高師〕

★屋烏之愛 ヲクウノアイ

其の人を受すれば其人に關する物まで皆之を受するこ
と。説苑貴徳篇に「臣聞愛其人者、其屋上之鳥、憎
其人者、惡其餘胥」とある。餘胥は僮僕なり。

★屋下架屋 ヲクカにヲクをカス
益なきことを重ねてするをいふ。又屋上架屋とも云
ふ。〔事檢〕

★惡寒 ヲカン
さむけ。ぞく／＼寒いこと。〔海欄・陸士・女高師〕

★烏澁 ヲコ
物笑の種となるおろかなこと。

★小田原評定 ヲダハラヒヤウヂヤウ
相談の容易に決定せざること。これ北條氏康（北條氏
の第三世）が小田原城にありて、敵に攻撃せられし時
夙夜評定所に集會して對策を評議せしが、遂に議論決
せざりしよりいふ。小田原評議ともいふ。

★愼終追遠 ヲハリをツ、シミトホキをオム
父母の葬祭を鄭重にすること。終は父母の喪、愼むは
その喪に哀を盡すこと。遠は父母死後の日月の遠ざか
り行くこと。追ふは思ひ出して祭祀に敬を盡すことで

ある。〔廣高師〕

★汗隆 ヲリウ
盛衰のこと。汗はくぼむ、隆は高しと訓ず。

★温噤 ヲンキヨ
大いに笑ふこと。

★温故知新 ヲンコチシン
(1)もと學んだことを究めて新知識を啓發すること。
(2)舊い事物を研究し、その上新知識を會得すること。
〔千園・京城大〕

★温習 ヲンシウ
學びしことを復習すること。

★温情主義 ヲンシヤウシユヤ
温いなきけを人にかけて、自然と己を敬ひ従はしめる
ヤリ口。〔滿教〕

★温清定省 ヲンセイテイセウ
子が父母に孝養をつくすこと。温は温めて其の寒をふ
せき、清は涼を致して其の暑さを避く、定は其の臥席
を定め、省は其の安否を省みるをいふ。定省温清とも
云ふ。〔海經・山南〕

★温袍 ヲンパウ
わたいれ。

★温飽 ヲンパウ
衣食に十分なること。〔北大〕

★温良恭儉讓 ヲンリヤウキヤウケンジンヤウ
聖人の容貌の形容。温はあたゝか、良はすなほ、恭は
つゝしむ、儉はつゞまやか、讓はゆづる。

カ の 部

★咳嬰 ガイエイ
やう／＼笑ふことを知つた程の幼児（即ち二三才の幼
兒）。咳は小兒の初めて笑ふをいふ。嬰はミドリゴな
り。史記に「不可_レ以_レ告_レ咳嬰之兒」とある。

★凱歌 ガイカ
戦に勝つて歸る時に奏する歌。司馬法に「得_レ意則凱
歌_レ示_レ喜」とある。

★啾啾 カイカイ
鳥の和き鳴く聲の遠くきこゆるをいふ。詩經に「黃鳥
千飛、集_レ于_レ漣水、其_レ啾_レ啾」とある。

★解顔 カイガン
心よく打ち笑ふこと。

★諧謔 カイギヤク
じやうだん。諧は言葉の意淺く世俗にかなひ、開きて
面白く感ずる義、謔は戲言なり。晋書に曰く「愷之好
諧謔一人多愛_レ狎之」と。〔熊鷹〕

★介居 カイキヨ
兩者の間にはさまりをること。左傳に「介_二居_一二大國之
間」とある。

★概括 ガイクラツ
大體のくゝり。

★海濶天空 カイクラツテンクウ
海のひろ／＼とし、天の蒼々として限りなきが如く、
心の廣々としたること。

★改元 カイゲン
年號を改むること。元年を改むるの意なり。史記に曰
く「惠文王十四年、更爲_二元年_一、改元之始、由_二秦惠王_一
也」と。

★開眼 カイゲン

佛體の彫刻又は鑄造の功を換へた時僧を招いて行ふ佛式。〔福商〕

★戒 嚴 カイゲン

(1) 敵が攻め來たらんとする時きびしく警戒すること。
(2) 戦時又は事變の生じたる場合、全國又は一地方を限り兵備を以て行ふ警戒。この命令を戒嚴令といふ。
〔神宮〕

★邂 逅 カイコウ

不意にてあふこと。詩の鄭風に「邂逅相遇、適我願」とある。〔仙工・高商〕

★乞 骸骨 カイコツをコフ

官職を辭することを願ふこと。骸骨は既に老いて無用の人と云ふ意。臣下が君に仕へてゐる間は、わが身を君に捧げてゐるのであるから、わが骸骨（即ち老いて無用の身體）を賜りたいと乞ふので、辭職を願ふこととなる。小學に「疏廣爲太子太傅、上疏乞骸骨」とあり、趙充國傳に「充國乞骸骨、賜安車駟馬黃金六十斤、罷就第」とある。〔福商・富山藥・海欄・廣高師・水産・盛農〕

★慨 世 カイセイ

世の有様をなげくこと。

★蓋 世 カイセイ

元氣が盛んで一世を壓すること。拔山蓋世の勇などいふ。史記項羽本紀に「力拔山氣蓋世、時不利兮離不逝、雖不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」とある。

★介 石 カイセキ

節操の石の如く堅きこと。易の「六二介于石」に本づく支那國民政府の總理の蔣介石の名はこの意なり。

★解 頤 カイイ

満足して口を開いて大いに笑ふこと。〔六高・陸士〕

★剗 切 カイセツ

適當によくあてはまること。適切。唐書に「無不剗切當三帝心者」とある。

★凱 旋 カイセン

戦に勝ちて歸ること。

★海 陬 カイツウ

海邊の片田舎のこと。

★解語之花 カイゴノハナ

言語を解する花といふことにて美人を稱する詞なり。天寶遺事に「唐ノ太液池ニ、千葉ノ白蓮開ク、明皇妃子ト共ニ賞ス。妃子ヲ指シテ左右ニ謂ツテ曰ク、何ンゾ此ノ解語ノ花ニ如カンヤト」明皇は玄宗にして、妃子は支那第一の美人と稱す楊貴妃なり。

★睚眦之怨 ガイサイノウラミ

一寸にらまれたほどのわづかな怨。睚は目を上げるなり。眦はまぶちなり。史記に「一飯之徳必償、睚眦之怨必報」とある。〔女高師・高校・陸士・愛賢〕

★開 山 カイザン

(1) 寺院の創立者。(2) 或る物事の開始者。開基は寺院其の他の基をつくること。〔神宮〕

★改 竄 カイザン

文字をあらためかへること。晋書に「無所改竄」とある。

★海 若 カイジャク

海の神のこと。楚辭に「令海若舞滌夷」とある。〔水産〕

★拐 帶 カイダイ

もちにげ。

★咳唾自成珠 カイダオノゾカラタマをナス

片言隻句みな金玉の名句をなすといふこと。咳はせき、唾はつばなり、故に咳唾は人の談話なり。趙壹の賦に「勢家多所宜、咳唾自成珠」とある。〔大分商〕

★解 答 カイダツ

説明して答へること。

★慨 歎 カイタン

うれへなげくこと。

★街談巷語 ガイダンコウゴ

世間の噂のこと。

★戒 飭 カイチヨク

いましめること。〔慶大〕

★孩 提 ガイテイ

人を見ると笑ひ、人にだかれる位の年のこども。二三歳の小兒。孩兒、孩子も同じ。孟子に曰く「孩提之童、不不知愛ニ其親」と。〔小商〕

★海棠之姿 カイドウノスガタ

美人の酒に酔ひて顔色の赤くなりたる姿のこと。唐の楊妃傳に「明帝嘗召楊貴妃、妃被酒新起、帝曰、此乃海棠之花睡未足耳」とある。

★艾年 カイネン

五十歳のこと。髪の色蒼白にして艾の如くなる年といふこと。禮記に「五十曰艾」とある。艾はサン、その意はかる。艾除。

★概念 ガイネン

同一種類に屬する事物から共通點をひきだして得た觀念。〔廣師〕

★介馬 カイバ

甲をつけたる馬のこと。唐紀に「帝介馬自臨陣督戰」とある。

★開關 カイビヤク

天地のひらけはじめて人物の生ぜし時のこと。揚雄の劇秦美新に「開關已來、未之間一也」とある。

★凱風 ガイフウ

南風のこと。詩經に「凱風自南、吹彼棘心」とある。

★解紛 カイフン

爭論を解きて仲裁をすること。

★偕老同穴 カイラウドウケツ

(1)生きては共に老い、死しては穴を同じくして葬らるゝこと。(2)夫婦の契をいふ。〔水産〕

★解纜 カイラン

船出すること。纜は船をつなぐなは、即ちともづな。故に解纜はともづなを解いて出帆すること。〔南清工專〕

★介鱗 カイリン

魚類のこと。

★行雲流水 カウウンリウスキ

一定の形質なく種々にうつりかはる喻へ。宋史に「行雲流水初無定質」とある。〔東醫〕

★好下物 カウカブツ

よい酒の肴のこと。〔海機〕

★梗概 カウガイ

あらまし。大略のこと。東京賦に「粗爲實言其梗概如比」とある。〔山商〕

★考覈 カウカク

考へしらべること。〔廣高師・專檢〕

★東高閣 カウカクニツカぬ

たばれて高い欄の上に仕舞つて置くこと。韓愈の詩に春秋三傳東高閣、獨抱遺經究終始」とある。〔高校・盛農〕

★校合 カウガウ

くらべあはせること。ケフガフとも讀む。

★好漢 カウカン

好男子。役に立つよい男。

★網紀肅正 カウキシユクセイ

國家を治める規則、政治、又は社會の秩序をたてる道徳等をきびしく正すこと。〔桐工・水産〕

★巧僞不抽誠 カウギハセツセイニシカズ

巧にいつはるは拙くして誠なるにしかずといふこと。説苑に曰く「智而用私、不如此愚而用公、故曰、巧僞不如此拙誠」と。〔海機〕

★郊外 カウグワイ

町はづれのみなか。〔廣高師〕

★膏肓病 カウクワウのヤマヒ

不治の病のこと。病入膏肓などいふ。

★狡獪 カウクワツ

ずるいこと。利己主義で卑しい心根。

★交驩 カウクワン

よろこびをまじへ、よしみを結ぶこと。漢書陸賈傳に「吾交驩大尉深相結」とある。

★豪俠 ガフケフ

すぐれて男らしいこと。宋史に「個儒任氣、結于豪俠」とある。

★江湖 カウコ

(1)世の中、世間。支那江南地方は江と湖が多き故、初め江南地方の稱となせしも、後には世の中、世間の意となつた。陶潛の詩に「良木不隱世、江湖多賤貧」と。(2)かはとみづらみのこと。〔鹿農・米工・女高師・神商・東北大〕

★硬骨 カウコツ

権力などに屈しない意氣。硬骨漢、硬骨男子などいふ。

★嚆矢 カウシ

事の始をいふ。昔の戦陣で戦争を始める前に嚆矢(か

ぶらや)を發射する例であつた故による。濫觴。「米工・桐工・海生・長商・海兵・東商大・水産・海經」

★行尸走肉 カウシソウニク

無用の人。歩く尸、走る肉といふので、徒らに形體はあつても何の働もない義による。拾遺記に「夫人好學、雖死如生存、不學者、雖生存、謂之行尸走肉」とある。「名工・名高・廣高師」

★膠膝之交 カウシツノマジハリ

親交の密の堅きこと。ニカハやウルシは固着して相離れざるによる。「天下朋友堅如膠膝」とある。「横商」

★好事不出門、惡事行千里

カウジモンをイデズ、アクジセンリをユク
好事は世間に知れ難いが、惡事はすぐ知れる事。この語は北夢瑣言卷六に出づ。「神商・明專」

★高 蹤 カウシヤウ

氣高い行跡。前漢揚雄傳に「躡三皇之高蹤」とある。

★綱 常 カウジヤウ

三綱五常の略で人の守るべき大きな道德。三綱とは君

臣・父子・夫婦の三つの間柄(綱はおぼづなで、君は臣の綱、父は子の綱、夫は婦の綱)。五常とは仁、義、禮、智、信。「神商・高師・廣高師・陸士・醫專」

★考 證 カウシヨウ

考察して證據立てること。

★好 尚 カウシヨウ

好みたつとぶこと。曹植の書に「人各有好尚」とある。「神商」

★好事家 カウズカ

ものづきな人。「陸士・大商」

★更 生 カウセイ

よみがへること。蘇生。自力更生の語あり。「仙工・神商」

★巷 說 カウセツ

町のうはき。

★浩然之氣 カウセンノキ

道德にもとづく正大の勇氣。孟子に曰く「我善養吾浩然之氣」と。「神商大・陸經」

★高 足 カウツク

弟子の中ですぐれた者。高弟。逸足。

★巧遲不如拙速

上手でのるよりも、下手で早い方がましだといふこと。晋書に「兵聞拙速、不聞巧遲」とある。

★膠柱鼓瑟 カウチユウコヒツ

融通のきかぬこと。杓子定規で事をする意などに喩へる。柱はことごと(琴の絃を支へて音の高低を調節すること)なり、これを膠でつければ音の調節は出来ないから好い音は出ない義による。史記に「王以名使括、若膠柱而鼓瑟耳」とある。括は人名にて趙括のことなり。

★更 迭 カウテツ

いりかはること。内閣更迭などいふ。「金工」

★狡兔死 走狗烹

事あれば用ひられ、事なければ罪せらるゝ喩。狡兔は足の早い兎、走狗はその兎を追ふ爲に狩に用ひられた犬。又敵が亡びると大將も誅せられる喩。史記の越世家に「蜚鳥盡キテ良弓藏メラレ、狡兔死シテ走狗烹ラレ。越王人トナリ、長頸鳥喙與ニ患難ヲ共ニヌマク、

與ニ樂ヲ共ニヌマカラズ。子何ンゾ去ラザルト」蜚は飛に同じ。又淮陰侯傳に「狡兔死シテ走狗烹ラレ、高鳥盡キテ良弓藏メラレ、敵國破レテ謀臣亡ブ。天下已ニ定マル。我レ固ヨリ當ニ烹ラルベシ」と。「小樽商・大商・東外語」

★豪 放 ガウハウ

元氣が盛んで小事にかゝはらぬこと。豪宕。豪放磊落などいふ。この場の落は太なり。

★考 妣 カウヒ

死んだ父母。亡父を考といひ、亡母を妣といふ。爾雅に「父爲考、母爲妣」とあり。禮記に「生ケルヲ父・母・妻トイヒ、死セルヲ考・妣・孀トイフ」とある。「事檢・東高師・水産・法大」

★剛 愎 ガウフク

がらじやうでかたくななること。左傳に「剛愎不仁、未嘗用命」とある。

★宏 謨 カウボ

大きなはかりごと。

★高 邁 カウマイ

たかくすぐれること。〔米工〕

★豪邁 ガウマイ

心がしつかりして人よりもすぐれてえらいこと。宋史に「氣節豪邁」とある。

★綱目 カウモク

大綱細目。大體のしめくゝり。

★行潦 カウラウ

路上の源なき水たまり。孟子に「海河之於三行潦類也」とある。〔東窗事・京城野〕

★行樂 カウラク

心やすらかにたのしみ遊ぶこと。楊惲詩に「人生行樂耳、須富貴何時」とある。

★綱領 カウリヤウ

おほもと。晋書に曰く「不足較一舉上下綱領」と。

★膏梁子弟 カウリヤウのシテイ

富貴の家の子弟。膏梁は肥えた肉と甘い粟。美味な食物の意である。〔廣高師〕

★蛟龍得雲雨終非池中物

カウリヨウウンウをエバツヒにチチユウのモノにアラ

ザ

英雄が一朝時機に逢へば忽ち勢力を得て爲すことある。吳詩に「劉備非久屈爲三人用者上恐蛟龍得雲雨、終非池中物」とある。

★亢龍有悔 カウリヨウクイアリ

物ごとその極に達すれば衰亡の兆がある喩にいふ。即ち天に昇りつめた龍は降下の悔がある義による。又亢龍の悔などいふ。史記に「易曰、亢龍有悔、此言上而不能下、信而不能諂、往而不來、能自返也」とある。〔京野〕

★稿勞 カウロウ

骨折をねぎらひいたはること。

★行路難 カウロナン

世わたりの六ヶしいこと。

★峨々 ガ

高き貌。

★河海不擇細流 カカイはサイリウをエラバズ

度量廣くして多く物を容るゝをいふ。戰國策の李斯の上書に「臣聞ク、地廣ケレバ粟多ク、國大ナレバ人衆

★佳境 カキヤウ

面白いと思ふところ。

★河魚之疾 カギヨノヤマヒ

腹の疾のこと。内部の困難のこと。即ち河魚の腐るのは内より外に及ぶ故なり。

★下愚 カグ

至つて愚かなる者。論語に「上知與下愚不移」とある。

★鶴駕 カクガ

皇太子殿下の御車。〔專檢〕

★客氣 カクキ

一時のから元氣。血氣の勇。宋書に「客氣虛張、曾無愧畏」とある。

★閣議 カクギ

内閣の會議のこと。

★角巾 カクキン

醫者の被る頭巾のこと。

★恪勤 カクキン

つゝしみつとめること。

ク、兵強ケレバ、即チ士勇ムト。是ヲ以テ太山ハ土壤ヲ讓ラズ、故ニ能ク其ノ大ヲ成ス。河海ハ細流ヲ擇バズ、故ニ能ク其ノ深ヲ就ス。王者ハ衆庶ヲ却ケズ、故ニ能ク其徳ヲ明ニス」とある。

★下學上達 カガクジャウタツ

下、人事を學び、上、天理に通達するをいふ。論語に「子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎」とある。

★案山子 カガシ

(1)竹や柴で人の形を造り、弓矢を持たせ、鳥獸をおどして作物の害を防ぐもの。(2)外観だけで無能な人を嘲つていふ語。「米工・海經・東高師・長商・北大・同志」

★呵々大笑 カカタイセウ

からからと大笑ひすること。

★下澣 カカン

月の二十一日より末日までの稱。下旬。上澣は上旬、中澣は中旬。

★牙旗 ガキ

天子又は大將軍の旗のこと。

★隔靴搔痒 カクワサウヤウ

物足らぬところのあること。即ち靴をへだてよかゆい所をかく義による。無門闕の席に曰く「掉^{ヒテ}棒打^チ月^ヲ、隔^{ナラ}靴搔^ク痒^ク、有^ニ甚^ク交渉^シと。〔高校・陸士〕

★客 観 カククワン

(1)自己以外の他物。(2)意識(即ち認識、思考、観察)の対象物。吾等が知るもの即ち主観に對して、その知らるゝものは客観である。〔明專・陸士〕

★客 作 カクサク

人に雇はれて仕事をする者。

★客 死 カクシ

旅で死ぬこと。

★確 執 カクシツ・カクシフ

(1)互に我意を主張して曲げぬこと。(2)争ひごと。(三農)

★核心に觸る カクシンにフ

問題の中心に觸れること。

★較 然 カクセン

あきらかなるさま。

★喀 痰 カクタン

痰をはくこと。

★角 逐 カクチク

勝負を競ふて他を驅逐せんとすること。角は勝負を競ふ、逐は驅逐するなり。戦國策に「與^レ秦角逐^ス」とある。(和商・三商・東商)

★角 觝 カクテイ

今の相撲のこと。角は較べ競ふなり、觝は當るなり。兩々相當り力を較べ枝を競ふなり。又角抵とも書く。

★格 鬪 カクトウ

互に打ちあふこと。

★學 閥 ガクバツ

同一學校出身者の團結の勢力。

★攪 拌 カクハン

かきまはすこと。

★摺 筆 カクヒツ

筆をおいて書きやめること。〔和商〕

★嶽 父 ガクフ

妻の父。〔蒲醫〕

★格物致知 カクアツチチ

事物の道理を究めつくして我が知を致しきはめる事。大學に曰く「致^ス知在^レ格^ル物^ニ、又物格^ヲ而後知^ル至^ルと。

★革 命 カクメイ

天子又は政體の變ること。天子は天命を受けて位に即く。その天命がすでに革るの意が即ち革命である。易に曰く「天地革^リ而四時成^ル、湯武革^レ命順^ニ天^ニ、而靡^ニ乎人^ニ、革之時大^{ナル}矣哉」と。

★革 面 カクメン

面貌を改むるのみにして、其の心未だ盡く變せざるをいふ。易經に「君子豹變^シ、小人革^ム面」とある。

★格 安 カクヤス

普通の値より安いこと。

★客 臘 カクラウ

去年の十二月。臘は臘祭といふ意である。〔盛北師〕

★閣 僚 カクレウ

各大臣のこと。

★家 君 カクン

カ の 部

己の父。

★夏 畦 カケイ

甚だ苦勞なること。夏の炎天に畦を治むるといふ義による。

★陰辨慶 カゲベンケイ

蔭で強いふりをして表向には弱いこと。

★陽 炎 カゲラウ

快晴の日に空中に見える現象。一海嶺・明專・北大・高校・専檢・東商

★下 弦 カゲン

陰曆二十三日頃の半圓形の月。陰曆初め八九日頃を上弦とす。

★雅 言 ガゲン

常に口にせる語。

★寡言篤行 カゲントクカウ

口數少くして行の正しいこと。

★加 餐 カサン

身體を大切にすること。多く飲食する意による。後漢書に「願^フ君慎^ミ疾加餐^シ、重^ニ玉體^ニとある。

★實 所 カシコドコロ

宮中にあつて天照大神の御靈代として、模造の神鏡を祭つた所。維新前は内侍所と申したのである。〔海嶺・小樽商・米工・廣高師〕

★鹿島立 カシマダチ

出發すること。この語源は香取、鹿島の祭神が、天孫降臨に先だちて葦原の中つ國を平定されたことに基くといふのと、又昔旅に出發する者は鹿島神宮に途上の安全を祈つたことから出たといふのと二つある。〔盛農・愛醫〕

★牙 城 ガジャウ

天子又は大將軍の旗を立てた城の事。即ちほんまる。

★佳 城 カジャウ

人の墓地。

★呵 責 カシヤク・カセキ

叱り責めること。〔高校〕

★假 借 カシヤク

しばし見のがすこと。〔愛知醫〕

★下 壽 カジユ

莊子によれば下壽は六十歳、中壽は八十歳、上壽百歳とあり、左傳によれば下壽は八十歳、中壽は百歳、上壽は百二十歳とある。

★雅 馴 ガシユン

文品の正しく熟せること。史記に「其文不雅馴」とある。

★稼 穡 カシヨク

穀物の植付と取入れのこと。稼は植ゑる義にして、穡はとり入れる義なり。書經に「土爰稼穡」とある。〔山商・水産・女高師・高商・高校・農大・横商〕

★霞の洞 カシミのホコラ

(1)仙人の住む所。(2)仙洞御所即ち太上天皇のおはします所。〔京城醫・専檢〕

★家 聲 カセイ

家の名譽。司馬遷の書に「類其家聲」とある。

★苛政猛於虎

むごい政治をして人民を害すは虎の害よりもひどいといふこと。禮記の檀弓に曰く「孔子過泰山側、有婦人哭於墓者而哀、使子路問之曰、子之哭也、喪似之」

重有愛者、而曰然、昔者吾見死於虎、吾夫又死焉、今吾子又死焉、夫子曰、何爲不夫去也、曰、無苛政、夫子曰、小子識之、苛政猛於虎也」と。〔水産〕

★夏 楚 カン

學校にて學生を懲らし怠慢を懲らすに用ふる具のこと。夏は楨にして楚は荊なり。

★夏 臺 カダイ

牢獄のこと。時代によりて其の名を異にせり。殷に夏臺といひ、夏に夏臺といひ、周に閼土といひ、秦に閼園といふ。

★片手落ち カタテオチ

不公平のこと。〔陸士〕

★語るに落ちる カタルにオチル

かくそりとする事が、つい話す事に知らず識らず言ふて仕舞ふこと。

★肩を持つ カタをモツ

ひいきする。かばふこと。

★加 持 カヂ

佛力によつて病災を除くべく眞言宗でやる法のこと。

眞言要記に「加諸佛大悲來加三行者、持行者信心以感佛因」とある。加持祈禱など言ふ。〔山商〕

★渴 仰 カツガウ

渴者の水を慕ふが如く甚だしく仰ぎ慕ふこと。法華經壽量品に「心懷三惡慕渴仰於佛」とある。〔水産・山商・小商〕

★割 據 カツキヨ

土地を分ち取りて據り守ること。漢書敘傳に曰く「虜三卷三秦、割據河山」と。群雄割據などいふ。

★恰 好 カツコウ

(1)すがた、状態のこと。(2)丁度よいこと。

★喝 采 カツサイ

やんやと賞めはやすこと。拍手喝采。〔専檢〕

★合従連衡 ガツシヨウレンカウ

従は縦、即ち縦に合同すること。支那の蘇秦が説いたもので、韓、魏、趙、燕、楚、齊の六國が縦に合同して敵にあつたこと。衡は横で横に前記の六國が同盟すること。史記に曰く「天下方務合従連衡以攻伐、爲賢」と。〔盛農・函教・東高師〕

★渴 不_レ飲_二盜泉水_一 カツすれどタウセンのミズを如何に困窮しても不義の祿や金銭を受けぬといふ喻。

如何に喉が渴きても盜泉などいふ名の水は飲まぬといふ義による。陸機の猛虎行に「渴_{スレド}不_レ飲_二盜泉水_一、熱_{スレド}不_レ息_二惡木陰_一」とある。

★勝つて兜の緒を締める カつてカブトのヲをシメ戦に勝つても油断せぬこと。

★合 黠 ガツテン

承知すること。うなづくこと。〔高校・福島商〕

★葛 藤 カツトウ

みだれもつれること。ごたごた。開著。くずとふちとは共にからまつて解け難い故による。出曜經に曰く「其有_三衆生_一墮_二愛網_一者、必敗_二正道_一、猶如_三葛藤_一纏_レ樹樹枯_一」と。〔東水産・明海・大豫・熊工・水産・陸士〕

★喝 破 カツバ

(1)どなりつけること。(2)眞理を説きあかすこと。類語に道破、説破などあり。〔陸士〕

★割 烹 カツハウ

食物の料理のこと。肉を切りて煮る義による。孟子に

「伊尹以_二割烹_一要_レ湯」_二とある。

★家 僮 カドウ

家の召使ひのすべてをいふ。僮は婢女の總稱なり。史記に「卓王孫家僮八百人」とある。

★河東獅子吼 カトウのシシク

妻にがみく言はれて夫が畏れてゐる義。元義は黄河の東の岸で獅子がほえるといふことで、陳季常の妻柳氏は性質が非常に悍で、來客ある毎に大聲を出して夫を罵詈した故、蘇軾が戯れに詩を作つて「龍兵居士亦可_レ憐、談_レ空説_レ有夜不_レ眠、勿_レ開_二河東獅子吼_一、柱杖落_レ手心茫然」と言つたことより出づ。

★過渡期 カドキ

舊から新へ移り變る中間期のこと。

★家 督 カトク

(1)長男のこと。一家を監督する義による。史記に「家有_二長子_一、曰_二家督_一」とある。(2)一家の系統のこと。家督相續などいふ。

★首 途 カドテ

かどで。シユトとも讀む。はじめて旅だちの道に出か

けること。「米工・専檢・早高・京城醫・陸士」

★問_二鼎之輕重_一 カナヘノゲイヂユウをトフ

(1)國家又は權者を倒さんとすること。鼎とは天下の寶物で帝位に喻へる。其の大小輕重を問ふべきものでは無い。然るに之を問ふは天下を奪はんと欲する意あるが爲めである。(2)他人の勢力をそれ程と思はぬこと。左傳に曰く「楚王ガ周ノ定王ニ鼎大小輕重ヲ問フ。對ヘテ曰ク、德ニアリ、鼎ニアラズ、德、休明ナレバ、小ト雖モ重シ。其ノ姦回昏亂ナレバ、大ト雖モ輕シ。天ノ明德ニ_二祚_一スル、底止スル所アリ。成王鼎ヲ定メテ世ヲトスル三十、年ヲトスル七百、天ノ命ズル所ナリ。周德衰ヘタリト雖モ、天命未ダ改メズ、鼎ノ輕重未ダ問フヘカラズト」と。

★河 伯 カハク

河の神、即ち水神。抱朴子に「河伯是華陰人、以_二二八月上庚日_一、渡_レ河溺死、天帝補_レ罽_二爲_レ河伯_一、故今庚辰日、不_二治_レ紅流_一河」とあり、又史記にも「鄴苦_二爲_レ河伯_一娶_レ婦」とある。

★恰 當 カフトウ

丁度よくあてはまること。

★合抱之木生於_二毫末_一 ガフハウノキもガウマツよ大きなものも小さなものから出来ること。合抱は兩手でかゝえること。一かゝえもある大きな木も、もとは小さな苗から出来たものであるの義による。

★餓 莩 ガヘウ

うゑじにすること。莩は餓死する者、又殍に同じ。孟子に曰く「野有_二餓莩_一」と。〔濱商〕

★壁 代 カベシロ

壁の代用に懸ける幕。〔廣高師・東文化〕

★下 問 カモン

目下の者に問ふこと。又目下の者に學ぶこと。〔島農〕

★牙 門 ガモン

大將軍の陣營の門。官府のこと。

★掃部助 カモンスケ

宮中の掃除役。「東高師・廣高師」

★家 老 カラウ

家臣の長。

★擲手 カラメテ

(1)捕り手。(2)城などの裏門のこと。追手擲手。「高校・陸士」

★伽藍 ガラン

寺院のこと。「福島商・東美・眞大・京法・陸士・農大・喜檢・福商」

★雁の使 カリのツカヒ

手紙のこと。「海欄・高資」

★雅量 ガリヤウ

寛大な氣象。晋書に「衆咸服其雅量」とある。「鹿農」

★迦綾頻伽 カリヨウビンガ

極樂淨土にゐて美妙の聲を發して鳴くといふ想像上の鳥。「大分商」

★家累 カルキ

手足まとひとなる者。妻子奴婢のこと。

★可憐 カレン

(1)風姿の優美なること。(2)あはれ、かあいさう。

★苛斂誅求 カレンチユウキウ

嚴しくせめて、貨財・租税などをむさぼりとりたてること。「小樽商・宇都宮農」

★我を折る ガをヲル

強硬な意見を捨て譲歩すること。「東高師・新醫」

★姦雄 カンイウ

わるぢみのある豪傑。三國志に「治世之能臣、亂世之姦雄」とある。

★閑雲孤鶴 カンウンコカク

しづかな雲、ひとり居る鶴、即ちしづかなさま。「海軍・海兵」

★閑雅 カンガ

しづかてしとやかなこと。「鹿農」

★扞拈 カンカク

さはりさからひ、互にいれないこと。「山商・鹿農・名工」

★轆軻不遇 カンカフグウ

人の志を得ずして世に不遇なること。轆軻は車のゆきなやむさま。楚辭に「年既已過大牛一分、然轆軻而」

留滯」とある。「明專・東商船・高松商・千葉藥・山商・松商・熊工」

★汗簡 カンカン

書籍のこと。火に炙りて油を取り去りたる竹の札なり、古口紙なき故に汗簡を用ひしなり。書き易く蟲が食はざる故である。

★侃々 カンカン

きびしく正しいこと。即ち剛直のさま。論語郷黨篇に「朝與下大夫言、侃々如也」とある。

★汗顔 カンガン

恥ぢて顔に汗が出ること。曰く「不堪汗顔之至」と。

★侃々諤々 カンカンガクガク

正しいと思ふことを恐れず憚らず直言すること。侃諤の論。「陸士・盛農」

★汗牛充棟 カンギウジュウツトウ

書物を多く蔵すること。車で引かせると牛が汗をかき、積み上げると棟木にとゞく程書物のある義による。柳文の陸文通墓表に「其爲レ書、處ニ棟宇、出」

則汗牛馬」とある。「專檢・神商」

★閑却 カンキヤク

うちすて、輕んずること。「名工・愛醫・京城工」

★間居 カンキヨ

暇でなす事なくゐること。大學に「小人間居爲不善」とある。

★感興 カンキヨウ

おもしろみ。曰く「湧感興」と。「東美・旅工」

★看經 カンキン

お經を讀むこと。「高校」

★干戈 カンクワ

戰爭のこと。たてとほこの義による。詩の大雅に曰く「止干戈、包弓矢」とある。

★感化 カンクワ

感動して善にうつること。

★眼光透紙背 ガンクワウシハイにトホル

讀書の理解力の強いこと。鹽谷先生の書に曰く「讀レ書眼光透紙背、識慮高卓、議論出人意表」と。

★感激 カンゲキ

他人の恩義などに深く感ずること。孟子章句に曰く「千載聞^{キテ}之^ヲ、猶有^リ感^ズ」と。〔金澤薬〕

★簡 潔 カンケツ
簡單にしてさつぱりしてゐること。

★汗血之馬 カンケツノウマ
名馬のこと。血の如き汗を出す駿馬といふ義による。

漢書武帝本紀に「李廣利將軍、斬^リ大宛王首^ヲ、獲^テ汗血之馬^ヲ來^リ、作^ル四極天馬之歌^ト」とある。

★甘 言 カンゲン
人の氣に入る言葉。左傳に「幣重^{シテ}、而言甘^{キハ}、誘^レ我^ヲ也」とある。

★寒 暄 カンケン
(1)寒さとあたまかき。(2)あつさ寒さの挨拶。〔陸士〕

★幹 蠱 カンコ
父の死後、子が能く父の跡を治むること。幹は善なり、蠱は事なるなり。故に前の意義となる。易に曰く「幹ニ父之蠱^ト」と。

★眼 語 ガンゴ
目を以て意中を語ること。

★眼孔小 ガンコウセウ
見識の狭きこと。

★閑 散 カンサン
ひまなこと。

★寒山寺 カンザンジ
支那の有名な寺の名。

★幹 事 カンジ
事物を處理する人。幹は根幹なり、事の根幹になる義なり。

★顔子克己如^シ紅爐上一^ノ點雪^ニ
ガンシのゴクキはコウロジャウのイツテンのユキのゴトし

顔回はよく自分の慾を自制したから、心中に一度私慾が生じてても、それは紅い火に一點の雪をのせたやうなもので直ぐ消え失せてしまったといふこと。

★干 城 カンジャウ
國を守る軍人・武士のこと。即ち干は楯なり。君の爲に楯となり、城となりて國家を衛るといふことなり。〔北農・専校・廣高師〕

★干將莫邪 カンシャウバクヤ
古の二つの良劍のこと。干將は吳の人、其の妻を莫邪といふ。吳王闔閭の命によりて劍を作る、遂に二劍をなせり。陽を干將といひ、陰を莫邪といふ。

★鑑 賞 カンシャウ
藝術の善惡精粗を見分けて其の味を味はふこと。〔南滿・工專〕

★雁 書 ガンシヨ
音信の書即ち手紙のこと。雁信も同じ。〔海欄・高資〕

★間 色 カンシヨク
雜りて出來たる色。青・黄・赤・白・黒を正色といひ、これ等正色の雜りて出來る即ち青と黄と交りて綠をなし、赤と黄と混じてなれる紫などを間色といふ。

★肝 食 カンシヨク
政事に勤勞して晩く食すること。漢書張湯傳に「日肝^{クシテ}天子忘^レ食^ト」とある。

★寒 心 カンシン
驚き恐れてぞつとすること。即ち心を寒からしめる義による。曰く「誠不^レ堪^ニ寒心^ト」と。〔海兵・廣高師・専

檢・日大・海兵・陸士〕

★汗 青 カンセイ
書籍のこと。文天祥の詩に曰く「留^{シテ}取^ル丹心^ヲ照^ス汗青^ト」と。〔横高商〕

★干 涉 カンセウ
その事に立ち入ること。〔廣高師・和商〕

★無^レ間^ナ然^ト
缺點を指して非難する所がないといふこと。〔陸士〕

★寒 素 カンソ
儉約にして質素なること。宋史に「性淳^{シテ}質^{シテ}難^シ顯^ス貴^ト、不^レ改^メ質^ト」とある。

★勘 當 カンダウ
善からぬ行の爲め君父又は師匠などが自分のもとへ寄せつけぬこと。唐書に「軍中不^レ暇^ニ勘^ス當^ト」とある。

★上達部 カンダチメ
三位以上の昇殿を許された人。〔高校2・大東文化・専檢・山商〕

★肝膽相照 カンタンアヒテラサ
互に心のおくそこを打ちあけて交ること。〔和商・東商

大・水原

★邯鄲之歩 カンタンノホ

獲りに己の本分を棄て、他の行爲に倣ふは、兩つながら失ふといふ喻。昔、燕國の田舎の少年が超の邯鄲郡に行きて、その町の歩き方を倣ひしに、未だ充分學び得ずして、却つて己の固有の歩行を忘れたり。因つて歩むを得ず、兩手を地につきて匍匐したりといふ富言より出づ。

★邯鄲之夢 カンタンノユメ

一炊の夢に同じ。十七頁に説明す。〔東慈賢・京録〕

★函 丈 カンヂヤウ

師の席をいふ。函は容るなり、一丈の地を容れる、餘地を存すことを要す。故に先生、長者に上つる書翰は某先生函丈と書いて尊敬の意を表すは此に本づくなり。禮記に曰く「若非^シ^ニ^ト^キ^ハ 飲食之客^ニ、則布^レ席^ヲ、席間函^レ丈^トと。

★間 諫 カンテウ

陰かに敵情を探るまはしもの。史記に「謹^ニ烽火^ニ多^ク、間諜^トとある。

★甘棠之愛 カンドウノアイ

思慕の切なること。此の意は其の人を慕ひて其の人の曾て宿りし樹まで愛すと云ふ義より出づ。

★簡 牘 カントク

手紙のこと。古は版に書くを牘といひ、竹に書くを簡といふ。

★肝腦塗^レ地 カンノウチにマミル

むごく殺されて肝や腦が地上に散亂すること。史記に「使^ニ天下之民肝腦塗^レ地^ニ、父子暴^ニ骨中野^トと。又非常に困ることにいふ。〔專檢〕

★神無月 カンナヅキ

舊曆十月のこと。カミナヅキとも讀む。〔高校〕

★堪 忍 カンニン

こらへ忍ぶこと。書經に「不^レ能^レ堪^ニ忍^ニ、虛之甚^トとある。

★堪 能 カンノウ

オのはたらきが優れて巧なる者。宋書明帝紀に「其文武堪^ニ能^ニ、隨^レ才^ニ銓^用とある。〔高校・福島商・千園〕

★幹 盃 カンバイ

配益すること。〔專檢〕

★銜 枚 カンバイ

軍馬の聲を立てるを防ぐ爲に口にくはへさせる箸のやうな木。枚は箸のやうで兩端に小さき繩があり、口に銜みて頭後につなげば、ものを言ふこと能はざるなり。

★早 魘 カンバツ

ひてりのこと。魘は早の神。詩經に「早魘爲^レ虛、如^レ僕^ト、如^レ焚^トとある。

★間不^レ容^レ髮 カンハツをイレズ

一寸の髪の毛を容れる程の餘裕もなく甚だ急なること。間はすきまなり。說苑に「其出^レ不^レ出^レ、間不^レ容^レ髮^トとある。〔和商・米工・陸士・水産・鹿農・盛農・海兵・專檢〕

★汗馬之勞 カンバノラウ

戦場の功勞のこと。戦争のとき馬を疾驅すれば汗が出る故にいふ。〔海欄・東商大〕

★姦 富 カンブウ

不義なることをして富める者。史記に曰く「本富^ヲ上トナシ、末富^之ニ次ギ、姦富^ヲ下トナス。今ノ富メル

者ハ大抵姦富ナリとある。

★冠雖^レ弊^ニ、必加^ニ於^レ首^ト カンムリヤブレたりといへ

物は各々その用ゆべき場合ありて亂るべからざるをいふ。

★感 銘 カンメイ

心に深くきざみこむこと。

★頑 迷 ガンメイ

世の中の事にうといこと。

★堪 輿 カンヨ

天地の總名。堪は天道なり、輿は地道なり。

★咸陽宮殿三月紅 カンヨウキフデンサングワツコ

秦の都が項羽に燒き滅ばされたるをいふ。

★甘 露 カンロ

甘い味の露、又天酒ともいふ。天下太平のしるしに降るといふ。瑞應圖に「王者ノ徳天ニ至リ、和氣感ズレバ、則チ甘露松柏ニ降ル」とある。

★干 祿 カンロク

仕官して俸祿を求めること。

★閑 話 カンワ

むだばなし。閉詰カシワケウダイ休題はむだばなしはやめにして、それはさておき、さて等の意なり。

キの部

★杞憂 キイウ

無用の心配のこと。とり越し苦勞。杞國の人に天崩れ懸ちて、身を寄するところ無からむことを憂ひて寢食を廢するものありといふ故事から出た語である。即ち列子に曰く「杞國有^リ人憂^ヒ天崩^レ墜^ル、身無^ク所^ニ寄^ル、廢^シ寢食^ス者^トと。又杞人憂ともいふ。〔陸士・米工・秋續・長商・神商・廣高師・商大・早大・農實〕

★氣宇 キウ

こころいき。見識のこと。晋書に「氣宇高雅」とある。

★機運 キウン

時の廻り合せのこと。機運到來などいふ。

★糾合 キウガウ

寄せあつめること。史記に「起^シ糾合^シ之^ヲ衆^ヲ收^ム散^ル亂^ル之^ヲ兵^ヲ不^レ滿^ク萬人^ニとある。〔盛農〕

★裘葛 キウカツ

一年のこと。裘は毛衣で冬きる衣、葛はクズカツラにて織りたるカタビラにて夏きる衣。一年に必らず一度かきへるものなるにより前の意義となる。韓愈の原道に「夏葛而冬裘」とある。〔東高師〕

★九牛一毛 キウギウイチモウ

極めて多数の中の一小部分にして、數に入らざる程の量をいふ。漢書司馬の遷傳に「假令僕伏^シ法受^ル誅^ス、若^シ九牛亡^ク一毛^ニとあり、又曰く「四海一滴、九牛一毛」と。

★究極 キウキョク

最後のこと。

★牛後 キウゴ

大なる者のしりに従ひ使はれること。戰國策に「寧爲^ニ騶口^ト、無^ク爲^ニ牛後^トとある。

★九五之尊 キウゴノソン

天子の位のこと。易の乾卦に「九五飛龍在天、利^レ見^ル大人^ニとある。

★九仞功虧一簣 キウジンノコウをイツキにカク

積年の勞が一失の爲め水泡に歸すること。仞は八尺。

箕は土の籠。九仞の山を築くに、一簣の土を缺けば完成する能はざる義による。書經に「夙夜罔^レ成^レ不^レ動^レ不^レ怠^レ細行^ニ終累^ニ大德^ニ、九仞功虧^ニ一簣^ニとある。〔東商大〕

★休戚 キウセキ

よるこびとられひ。喜憂。〔高校・九樂・愛賢・神商・七高・桐工・海機〕

★九族 キウソク

高祖より玄孫に至る親族即ち高祖、曾祖、祖父、父、已、子、孫、曾孫、玄孫の總べてのこと。

★舊套 キウタウ

ふるいしきたり。依然として舊套を脱せずなどいふ。

★糾彈 キウダン

しらべ正し、せめること。彈は彈劾のこと。

★九鼎大呂 キウテイダイロ

帝王が國に傳へる寶のこと。即ち九鼎は夏の禹の時、支那の九州より金を貢がせしめて鑄造せし鼎にして、夏、殷、周に傳へて國の寶とせり。大呂は、周朝の大鐘なり。故に轉じて既記の意となる。史記平原傳に曰

く「毛先生一至^シ楚使^シ趙重^ニ於^テ九鼎大呂^ニと。

★虧盈 キエイ

みちかげ。

★義捐 ギエン

こころがけによつて金品を寄附すること。〔東高師・東音・仙醫・外語・長商〕

★氣慨 キガイ

氣象のすぐれてゐること。

★紀綱 キカウ

一國の制度規定のこと。紀は小綱なり、綱は大綱なり。故に前の意となる。書經に曰く「今失^ニ其道^ヲ亂^ニ其紀綱^ニと。

★犄角 キカク

前後より敵を夾撃すること。犄は足とると訓じ、角は角とると訓ず。鹿を捕ふるに、その前をつなぐを角といひ、その後をつなぐを犄といふに因る。左傳に「譬如^ク捕^ル鹿^ヲ晉人角^レ之^ヲ、諸戎犄^レ之^ヲとある。〔高校・専檢〕

★貴革問題 キカクモンダイ

貴族院改革問題の略。

★危 機 キキ

危く大切な場合のこと。機は大切な場合なり。晉書に曰く「貧賤常思富貴、富貴必踐危機」と。危機一髮などいふ。

★忌 諱 キキ

忌みきらふこと。諱は避なり。漢書に「鄙人不レ知忌諱」とある。〔陸士〕

★繼 箕裘 キキウをツグ

父祖の業を繼ぐこと。弓人の子は、その父が堅き幹角を矯みて弓を作るを觀て、軟かなる柳條を曲げて箕を製することを學び、冶工の子は、其の父が堅き金鐵を鑄かして破器を補鑄するを觀て、軟かなる獸皮を補綴して裘を製することを學ぶ。よつて冒頭の意となる。禮記に「良冶之子、必學爲裘、良弓之子、必學爲箠」とある。〔專檢・廣高師・鹿農・西南・日醫〕

★機宜の措置 キギのソチ

時を捉へて宜しきを得たやり方。〔高校〕

★麴 藥 キクケツ

酒のこと。かうぢより轉ず。

★規矩準繩 キクジユンジヨウ

物を正しくきまりをつけるもの。規はブンマハして圓をつくるもの、矩はサシガネで方をつくるもの、準はミヅモリで平をはかるもの、繩はスミナハて直をなすもの。孟子に「非レ規矩不レ能レ定レ方圓、非レ準繩不レ能レ正レ曲直」とある。〔臺商・長商・北大〕

★危惧の念 キグのネン

恐れ危ぶむ心。

★鞠 養 キクヤウ

やしなひそだてること。

★歸 化 キクル

他國の人が或る國に籍をうつすこと。唐書に「及レ夷歸化之事」とある。

★機會均等 キクロイキントウ

利益を受ける機會を平等にすること。〔陸士〕

★買 奇禍 キクロをカフ

思ひがけないわざはひを受ける。〔各醫專・明專・高商〕

★奇貨可居 キクロオクベシ

めづらしき品物なれば、これを貯へ置きて、他日値の高くなる時を持つべしといふ義。史記に「呂不章買ニ邯鄲、見而憐之曰、此奇貨可居、乃往見子楚」とある。〔神商・盛農・海機〕

★畸形的進歩 キケイテキシンポ

不思議なはかどり。

★奇 矯 キケウ

常人に異なる言行をなすこと。〔陸士〕

★詭 激 キグキ

言行の甚だしく中正を失してゐること。〔慈醫〕

★剗 闕 キケツ

彫刻する刀とノミのこと。轉じて彫刻すること。楚辭に「擿ニ剗闕而不レ用兮、操ニ規矩ニ而無レ所レ施」とある。

★稀 觀 キコウ

まれにみる。〔横商〕

★騎虎之勢 キコノイキホイ

虎に乗つて走つてゐる勢の義で中途にて下ることの出來ぬ故、物事の中止し難い形容である。隋書に「后使

人謂之高祖曰、騎虎之勢不レ得レ下、勉之」とある。

★旗 幟 キシ

はたじるし。敵味方の態度。主義の表示。〔盛農・陸士・京城・熊工・名工〕

★起 請文 キシヤウモン

誓ひの文書。〔陸士〕

★義 塾 ギジユク

衆人の爲めに費用を義捐して設くる塾のこと。〔與衆共ニ之曰義〕とあり、又「造ニ漏澤之仁園、發ニ開蒙之義塾」とある。

★疑 心暗鬼 ギシンアンキ

心に疑ふところあれば種々の恐ろしい妄想を生ずといふこと。列子に「諺曰、疑心生暗鬼」とある。〔高校・陸士・鹿農・海機・山商〕

★犧 牲 ギセイ

(1)他の爲に己の生命、自由、權利をすてること。(2)神に供なへるいけにえ。呂覽に「殷湯克夏而王天下ニ、五年不レ雨、湯乃以レ身禱于桑林、剪ニ其髮、割ニ其爪、自以爲ニ犧牲、用祈ニ福于上帝、雨大至」とある。〔長

商・山商・女高師

★喟 然 キセン

感じてためいきをつくさま。なげくさま。喟然として歎じて曰く。漢書に「喟然大息曰、嗟乎大丈夫當レ如レ此」ツナクとある。「横商・甲商・外語」

★制ニ機先^一 キセンをセイす

一足先んずること。

★奉ニ箕帚^一 キソウをホウす

夫に對して妻の謙遜する場合などに、箕帚を奉ずと言ふ。箕は「ちりとり」、帚は「はうき」。箕帚の賤業を取りて、夫に事ふる意。史記に「臣ニ息女アリ、願クバ、箕帚ノ妻ト爲サム」とある。

★希代之朝恩 キダイノテウオン

めつたにない朝廷の御恩。

★忌 憚 キゲン

いみはばかること。禮記に「小人 而無ニ忌憚^一也」とある。「陸士・廣高師・盛農・神商・醫專」

★几 帳 キチャウ

ついたてのこと。「長商」

★頡 頡 キツカウ

雙方の力が敵して相下らざること。詩經に「燕々千飛、頡^レ之頡^レ之」とあり、鳥の上となり下となるをいふ。猶は人の相争ひて何れも負けず劣らざるが如し。勢力頡頏などいふ。又ケツコウとも讀む。「水原農」

★嗅 驚 キツキヤウ

びっくりすること。

★拮据經營 キツキヨケイエイ

事業を營むに種々苦心すること。拮据は手と口と共になすさま。詩經に「予手拮据」とある。「專檢・山商」

★橋綠橙黃 キツリヨクトウクワウ

唐曆十月の景を評していふ。東坡の詩に「荷盡已無、^ニ菊殘猶有^ニ傲^レ霜枝^一、一年好景君須^レ記、正是橙黃橘綠時」とある。

★基 調 キテウ

どだい。

★歸納法 キナフハフ

一つ一つの事實から一般に通ずる原理を發見する論理法。この反対は演繹法。

★綠^レ木求^レ魚^一 キニヨリテウヲモトム

望んでも到底得べからざること。又其道に由らざれば勞して功なきこと。孟子に「猶緣^レ木而求^レ魚也」とある。「專檢」

★歸 寧 キネイ

新婦の里方に歸ること。サトガヘリ。歸は歸省、寧は安なり、安を問ふの謂なり。即ち里歸りして父母の安否を問ふなり。詩經に「歸^ニ寧^ニ父母^一」とある。

★軌 範 キヘン

てほんといふこと。文章軌範。

★附^ニ驥尾^一 キビにフス

才名高き人又は先輩に就いて引立を求むること。驥は一日に千里を行く良馬、その尾に附いて、ともに走るをいふ。史記に「顔淵雖^ニ萬學^一、附^ニ驥尾^一、而行益^レ速^レ」とあり、後漢書に「蒼蠅之飛、不^レ過^ニ數步^一、若附^ニ驥尾^一、可^レ至^ニ千里^一」とある。「陸士」

★詭 辯 キメン

ごまかしの言葉。詭辯を弄すなどいふ。

★規 模 キボ

中 の 部

しくみ。組立。織造。「名工」

★既 望 キボウ

陰曆十六日のこと。望は陰曆十五日、それを既に過ぎしことによる。

★機務倥偬 キムコウソウ

政務の忙しいこと。「大分商」

★歸 命 キメウ

佛に歸依すること。

★強 要 キヤウエウ

無理にしひること。

★行 幸 キヤウカウ

天子の御出まし。みゆき。「高校・專檢・海經」

★狂 簡 キヤウカン

志大にして事に粗略なること。論語に「狂簡悲然トシテ章ヲナス」とある。

★匡 救 キヤウキウ

たゞしなくふこと。

★鏡花水月 キヤウタリスキゲツ

鏡に映りたる花と、水に映りたる月とにて、目に見ゆ

るも、その眞を捕へがたきこと。

★郷 關 キヤウカン

ふるさと。故郷。男子立志出郷關は有名である。

★行 啓 キヤウケイ

大皇太后、皇太后、皇后、又は皇太子の御出まし。「高
校・海欄・大阪女專・專檢」

★狂 狷 キヤウケン

中庸の道に合はぬ行。即ち狂は徒りに進むことを知り
て、守ることを知らず、狷は守ることを知れども、進
むことと快ぐるもの、論語に「狂者ハ進ミ取ル、狷者
ハ爲サザルトコロアリ」とある。

★郷 原 キヤウゲン

其の郷中で謹みぶかくして君子らしく見える偽善者。
論語に「郷原徳之賊也」とある。

★狂言綺語 キヤウケンキゴ

常理を外れた仰りの多い言葉。詩歌を評して狂言綺語
といふも此の故なり。

★強 仕 キヤウシ

四十歳のこと。禮記に「四十ヲ強トイフ、而シテ仕フ」

とある。

★行 迹 キヤウセキ

みもち。品行。行狀。

★郷 黨 キヤウタク

むらざと。轉んじて自分の生地。「慶大・醫專・陸士」

★郷黨尙齒 キヤウタクシヨウシ

むらざとでは年齢の多いものを尊ぶといふこと。「山
商」

★樞 樞 キヤウホ

むつき。おしめ。

★共 鳴 キヤウメイ

賛成すること。成程と感ずること。

★廻ニ狂瀾於既倒 キヤウランをキタウにメグラサ

傾いた大勢を再びもとのとほりにすること。既に押し
寄せて来た逆か浪をもとにおし返す義による。「北大・
高校・名工・海兵・東北大・和商」

★杏 林 キヤウリン

醫家のこと。神仙傳に「董奉居廬山、爲人治病、
重者種杏五株、輕者種一、號「董仙杏林」とある。

★逆 縁 ギヤクエン

親が子よりも後れ、老者が壯者よりも生きながらへる
因縁といふこと。

★脚 色 キヤクシヨク

脚本のしくみ。「臺北師・臨教」

★逆 睹 ギヤクト

あらかじめみること。逆睹し難し。「神商」

★脚 本 キヤクホン

演劇の筋書。旅館。

★逆 旅 ギヤクリヨ

はたごや。旅館。

★覲 覲 キユ

ねらひうかがふこと。非望を抱くこと。左傳に「民服ニ
事其上、而下無二覲覲」とある。「明專・横商」

★執ニ牛耳 ギユウジをトル

支配者となること。「福商・京城商・米工・京城大・廣高
師・專檢・外語」

★窮措大 キユウソクダイ

貧乏書生のこと。「明專・桐工・盛農・横商」

★供 御 キヨウギ

天皇の御召料、又はお伴。

★披ニ胸襟 キヨウキンをヒラク

打寛るいで語り合ふこと。胸襟は心の中。「新醫」

★恐 慌 キヨウクワウ

おそれて安堵せぬこと。財界が不振不安の状態を呈す
ること。

★恐 惶 キヨウクワウ

おそれいること。恐惶謹言など書簡の結尾に用ひ敬意
を表はす。「東商大」

★曉天之星 ギヨウテンノホシ

夜明け方の星で、数の少いこと。

★享 樂 キヨウラク

たのしみこと。

★曲學阿世 キヨクガクアセイ

眞理正道に背いた學問を修めて俗世の人氣に投じよう
とすること。史記に「務ニ正學ニ以首、無ニ曲學ニ以阿
世」とある。「名工・六高・廣高師・盛農・桐工・立大・國
大・大醫大」

★跣 踏 キヨクセキ

甚だ恐れて身の置き處のないこと。跣は頭が天に觸れんことを恐れて背を風して行き、踏は地のくぼまんことを恐れてぬき足て歩く義による。詩經に「謂天蓋高、不敢不局、謂地蓋厚、不敢不踏」とあり、局は跣に同じ。「長商・明專・高岡商・臺商・北大・大谷」

★玉石混淆 ギヨクセキコンカウ

善きと悪しきとの入り交れること。玉は美なる玉、石は悪しき石、混淆は入り交る義。故に前意となる。

★玉石俱焚 ギヨククキトモニヤク

善悪の差別なく共に燬ること。即ち玉も石も共に焼く滅ぶといふ義による。書經に曰く「火炎ニ崑岡、玉石俱焚、天吏逸、德烈ニ于猛火」と。

★跣天踏地 ギヨクテンセキチ

跣踏に同じ。

★局面變化 キヨクメンヘンクワ

事件の有様の變ること。

★魚貫 ギヨクワン

魚を串にさしたる如く一人づゝ續き進むこと。貫は連

ること。魏志に「將士皆攀木緣崖魚貫而進」とある。

★居 諸 キヨシヨ

日月のこと。詩經に「日居月諸、胡迭而微」とあり、その居諸の二字を取りて熟語とせしなり。

★魚水之交 ギヨスキノマヅハリ

君臣交友の最も親しき交のこと。魚と水とは決して相離ること能はず、故にいふ。水魚之交ともいふ。

★巨 擘 キヨハク

(1)手の大指。(2)多くの人の中で卓出せる者。孟子に「於齊國之士、吾必以仲子爲巨擘」とある。「米工・明專2・京城醫2・福商・專檢・臺農・長商・陸經・滿醫・海軍」

★漁夫之利 ギヨフノリ

互に相争ふてゐる内に、第三者が利益を横どりすること。鵜蚌之爭の部で委く説明す、参照されよ。「福商・大分商・海機」

★技倆之卓越 ギリヤウノタクエツ

うてまへがすぐれてゐること。曰く「人智計曰技倆」

と。「立大」

★羈 旅 キリヨ

たび、たび路。杜詩に「自古有羈旅」とある。「海機・高師・横商」

★疑 惑 ギワク

うたがひ。

★氣韻生動 キキンセイドウ

様子がいき／＼してゐること。

★金衣公子 キンイコウシ

鶯の異名。開元遺事に曰く「明皇、苑中ニ遊ビ黃鸝ノ羽毛鮮潔ナルヲ見ル、因ツテ金衣公子トイフ」とある。

★金甌無缺 キンオウムケツ

堅固にして完全なること。南史に「武帝曰、我國家猶若金甌無一傷缺」とある。「千醫・山商・海兵・臺農・神宮・海軍」

★欽 仰 キンギヤウ

あふぎしたふこと。

★金科玉條 キンクワゴクテウ

幸の部

法律のこと。金玉とは貴びていへるなり。揚雄の文に「懿律嘉量、金科玉條」とある。

★金枝玉葉 キンシギョクエウ

皇族のこと。「福商・米工」

★巾 櫛 キンシツ

手拭とくし。即ち巾は手拭、櫛はくしなり。女子は巾櫛を執つて男子に事ふる者なり。後漢書列傳に曰く「使股妾侍執巾櫛」と。執巾櫛は人の妻となるといふ謙遜の辭なり。又執巾櫛奉箕帚は人の妻となりて、はうき、ちりとりを取りて夫に事ふる意なり。

★金城湯池 キンシヤウタウチ

極めて堅固な城のこと。城固きこと金の如く、敵破るべからず、池熱すること湯の如く、敵敢て近かずといふ意。北齊書に「唐邕、治世ノオアリ、文宣帝、童佛寺ニ登ツテ并州ノ城池ヲ問フ。或ハ曰ク、金城湯池ナリト。帝曰ク、唐邕ハ是レ金城湯池、此ハ非ナル」と。「海機・東商大」

★金城鐵壁 キンシヤウテツベキ

堅固で安全な居所。〔東南大〕

★錦上添花 キンシヤウハナをソフ

立派な上に飾ること。

★緊縮 キンシユク

かたくひきしめること。緊縮方針。

★錦心繡口 キンシンシユウコウ

詩文などを立派に作る人を評して言ふ語。にしきの心、

にしきの口の義による。李太白の文に「吾ガ心肝五臟

ハ皆錦繡カ、然ラザルバ、何ゾ口ヲ開イテ文ヲ成シ、

毫ヲ揮ツテ霞ヲ散セムヤ」とある。

★緊張 キンチャウ

ひきしめること。十分にはりつめること。〔山商〕

★欽定 キンテイ

天子がお定めになること。〔海嶺・盛農〕

★均霑 キンテン

等しくうるほふこと。〔三農〕

★襟度 キンド

むねのうち。〔海軍〕

★金覆輪 キンフクリン

金色の金屬を以て被ひかぶせたもの。

★金蘭之交 キンランノマジハリ

極めて親しいまじはり。其の堅きこと金を以て断つべ

く、其の美なること蘭の芳香を放つが如しとの義によ

る。又金蘭之契、断金之友などいふ。

ク の 部

★煦育 クイク

あたため育てること。煦も同じ。煦は日光であた

める。焔は體温であたためる。〔水農〕

★寓意 クウイ

物に假託して或意味を含ませること。〔愛知醫〕

★空拳 クウケン

なにもも持たないこと。からて。赤手。徒手空拳な

どいふ。曰く「報國丹心嗟二獨力一、回天事業奈二空

拳」と。

★空谷梵音 クウコクノキヤウオン

孤獨を感じてゐる時、同情者を得た喜の聲。非常に珍

らしいことの聲。〔陸士・秋嶺・水産〕

★空中樓閣 クウチユウラウカク

(1)空中に現れた樓閣、虚氣樓のこと。(2)虚構にして巧

なる文章。〔名工〕

★空也念佛 クウヤネンブツ

天台宗の一派で、空夜上人が始めたもの。和讃念佛を

節面白くうたひながら拍子に合せて踊る。念佛踊とよ

ばれてゐる。

★具眼之士 グガンノシ

識者、もの知りのこと。

★公卿 クギヤウ

位は三位以上、官は中納言以上の者。〔普文・専檢〕

★區々 ヤクヤク

(1)べつべつ、まちまち。2)小さいさま。曰く「區々之

心物不ニ自揣一、欲ニ敢爲ニ 天下之大事」と、

★區劃整理 ククワクセイリ

區切を正しくきまりをつけること。

★公家 クゲ

朝廷のこと。〔醫專〕

★駒隙 クゲキ

クゲキ

ク の 部

月日の經つのが早いこと。史記に曰く「人ノ世間ニ生

マル、白駒ノ隙ヲ過グルガ如シ」と。又莊子に曰く

「人、天地ノ間ニ生マル、白駒ノ隙ヲ過グルガ如シ」

と。白駒は白い馬であり、蓋し、人生の老い易きこと

は、日影の孔隙を過ぐる如く早きを言ひしなり。

★苦言 クゲン

苦き言。良薬は苦くして却つて病に功あるが如く、耳

に聞きては障れども、其人の爲には利益になる言なり。

史記に「苦言藥也、甘言疾也」とある。

★供御 クゴ

天子の御食膳。〔東北工・高校・北大・陸士・山商〕

★愚公移山 クウコウヤマをウツス

成功を永遠に期し、倦まず撓まずして、之に従事し、

遂に其の希望を達するをいふ。列子に「北山ノ愚公ト

イフ者、年九十、己ガ前ニ峙テル山アルヲ不便ニ思ヒ、

コレヲ他所ニ移サントテ、箕畚ヲ以テ其土ヲ運ビシニ、

河曲ノ智叟トイフ者、ソノ愚ヲ笑ヒタレバ、愚公答ヘ

テ、我死ストモ、子、コレヲ繼ギ、孫、コレヲ繼イデ

毀テテ窮マラズムバ、何ゾ平ナラザラムヤ」と言ひし

に據る。
★藥眩セズンバ 厥疾癒エズク マヒイえず
眼がまぶ程の藥でない効果がない。

★虞芮争ツ 田ツ グセイタをアラソふ

虞と芮の二國が田の境を争ふて後、他を見て我を改めるといふ故事。十八史略に「四伯修徳、諸侯歸之。虞芮争田、不能決。乃如周。入界見耕者、皆避畔。民俗皆讓長。二人怒、相謂曰「吾所争、周人所取」。乃不見。西伯而還、俱讓其田不取」とある。〔陸士・商資〕

★曲物クセモノ

悪徒のこと。

★驅除クヂロ

とりのけること。

★具體的グタイテキ

事物が實際の形にあらはれること。抽象的に對する語。

★口舌クダシがなるクダシ京童キョウドウ

クチさがなきキョウワラヤ
口の悪い京の子供。

★唇亡シブ 齒寒シ クチビルホロびてハサムシ
利害關係の密接なること。唇が無くなれば齒が寒くなる。隣れる一國が亡ぶれば他國も危くなるとの義なり。

戰國策に「趙之於齊楚也、唇亡則齒寒也、猶唇之有齒也、唇亡則齒寒、今日亡趙、則明日及齊楚」とある。〔朝大・陸士〕

★颯起サクキ

(1)山などのむつくりと聳え立つこと。(2)俄におこり立つこと。豪傑崛起などいふ。

★屈辱クツジヨク

屈辱させられて恥をかくこと。

★口傳クデン

いひつたへ。〔高資・陸士〕

★愚鈍グドン

おろか者。又自分がへりくだる場合に用ふ。

★國訛クニナマリ

故郷のなまり。〔臺北大・農林・北大・農專〕

★公方様クバウサマ

將軍のこと。〔廣高帥〕

★細子千足國クハシホコチタルのクニ

日本の古名。〔北大・女職〕

★狗尾續貂クビソクテウ

粗悪なるものを以て精美なるものに續くこと。貂はテシといふ。晋の趙王倫、權を專にし、その黨皆郷相に登り、並に大封に列し、奴卒役厮に至るまで、亦た加ふるに爵位を以てす。貂尾座に滿つ。時人、これが詠を爲つて曰く「貂不尾、狗尾續」と。その意は貂の冠を著くべき有徳の人なきを以て、下賤の人を用ふと言ふのである。貂尾は侍中の冠、黄金の環を加へ、貂を附けて文となし、貂尾を飾としたるものである。

★供奉クフ

行幸などの時、お供すること。〔高校・陸士〕

★口分田クブンテン

戸別人口に割當てたる田。〔專檢〕

★雲從龍クモニヒト 風從虎カゼニヒト

天地の理は同氣相求め、物は類を以て集る。もし世に聖明の君が出づれば、必ず賢人があらはれて臣となり、その君をたすけるといふ喻。

★花押クワアウ

書き判。華押もおなじ。〔水産・高檢・專檢・長商・盛農〕

★臥遊グワイウ

臥しながら畫圖を見て、その地に遊ぶが如き樂をなすこと。南史に曰く「宋少文、好山水、愛遊、四遊、荆巫、南登衡岳、因結宇衡山、爲疾還江陵、其曰、老病俱至、恐名山難通觀、唯當澄懷觀道、臥以遊之、凡所遊歷、皆圖之於壁、坐臥向之」とある。

★談諧クワイカイ

おどけ。諧謔のこと。

★快活クワイタツツ

ほがらかに心持のよきこと。

★崑巍クワイギ

山又は家の高くして大なるをいふ。

★會計クワイケイ

金穀の出納を計算すること。

★會稽之恥クワイケイノハヂ

人からうけた大恥。越王勾踐の父は吳王闔閭といふものに破られた。勾踐は因つて闔閭を討ち破つて父の仇を報じた。所が闔閭の子夫差が今度は勾踐を攻めて之を會稽山に圍んだ。勾踐遂に敗れて和を乞ふた。之を會稽之恥といふ。其の後越王は范蠡を謀臣として臥薪嘗膽の苦を積み、遂に夫差を破つて會稽之恥を雪いだ。

★槐 梧 クワイゴ

體のノきい貌。

★懷 柔 クワイジウ

なづけること。

★膾 炙 クワイシヤ

類に人の口の上ること。膾は生の魚を細かく切りたるもの、炙はあぶり肉、ともに美味なり。故に人の口の上のほり、持て難きることとなる。虛堂錄に「千古膾炙人口」とある。「海兵・八高・長商・山商・七高・盛農」

★灰 燼 クワイジン

はひとつもえ残り、全く滅びること。「東商船」

★會心之作 クワイシンノサク

氣に入つた作品。「陸士・水産・海兵」

★外 戚 グワイセキ

母方の親戚。

★會 葬 クワイソウ

葬式に來り會すること。

★回 答 クワイタウ

返事。「東商大・大專」

★回天之偉業 クワイテンノキゲフ

國勢を挽回する大きな仕事。回天は天運の衰へたるを

回すの義なり。

★快刀斷三亂麻 クワイトウランマをタツ

切味のよい刀で亂れた麻を斷つやうによく物事を處理すること。

★從 隗始 ワクイヨリハジム

賢者を招くには、先づ劣者を用ひた方がよいといふこと。戰國策に一燕ノ昭王、位ニ即キ、身ヲ卑クシ幣ヲ厚クシテ、以テ賢者ヲ招ク。郭隗先生曰ク、臣聞ク、古ノ人ニ君タルモノ、千金ヲ以テ千里ノ馬ヲ求ムル者アリ、三年得ル能ハズ。涓人君ニ言ツテ曰ク、請フ之ヲ求メント。君之ヲ遣ス。三月ニシテ千里ノ馬ヲ得タ

★傀 備 クワイライ

(1)からくり人形。(2)人形使ひ又は他人をそゝのかして種々な行をさせる人を傀儡師といふ。「昔、匈奴ノ冒頓ナルモノ、漢ノ高祖ヲ白登ノ城ニ圍ム。冒頓ノ妻ヲ閼氏ト曰ヒ、性甚ダ妬(やきもちをやく)ナリ。陣平トイフ者、コレヲ知ツテ乃チ傀儡ノ美人ヲ作り、白登城上ニ舞ハス。閼氏、コレヲ見テ、生人ナリト疑ヒ、城

ガ破レタ日ニハ、夫冒頓必ラズ之ヲ納レルデアラウコトヲ恐レテ、遂ニ冒頓ニ勸メテ、圍ヲ解イテ退キ去レリ」とよふ故事より出づ。

★外來之刺戟 グワイライノシゲキ

外部からのけがまし。

★回祿之災 クワイロクノワザハヒ

火災のこと。回祿は火の神なり。

★魁 偉 クワイキ

大きい立派な體格。容貌魁偉などいふ。

★廣 居 クワウキ

ひろい居どころの義で仁のこと。

★黃絹幼婦 クワウケンヤウフ

絶妙といふ謎。黃絹は色絲なり、絶の字となり。幼婦は少女なり、妙の字となる。「陸士・專檢・東商大」

★曠 古 クワウコ

前例がないこと。未曾有。空前。「東高・蠶實・海樓」

★黃口兒 クワウコウジ

年少にして經驗なき者を稱して曰ふ。小雀の口は皆黄なり、以て小兒に比す。北史に「崔暹、幼ニ言フ、文

寛帝ハ黄口ノ小兒タリ」と。家語に「孔子雀ヲ羅網ニテ取ル者ヲ見ル、得ルトコロ皆黄口ノ小雀」とある。

〔小商〕

★黄 昏 クワウゴン

たそがれ。夕暮。淮南子天文訓に「日至虞淵、是謂黄昏」とある。〔海料〕

★曠日持久 クワウジツチキウ

永くもちこたふること。日をむなしくして、久しきを持すといふ義による。漢書に「曠日持久、士卒勞倦」とある。

★皇室の藩屏 クワウシツのハンメイ

朝廷擁護の人。華族。〔千國〕

★曠日彌久 クワウジツビキウ

無厭に月日を過すこと。事のながびくこと。日を空しくして久しきにわたる義による。史記に「太傅之計曠日彌久」とある。〔小商・米工・海欄・専檢・神商・盛農〕

★曠世之度 クワウセイノド

一世にまたとない大きな度胸。曠世之才などいふ。

★荒唐無稽 クワウタウムケイ

とりとめのないこと。でたらぬ。〔盛農〕

★皇 帝 クワウテイ

天皇のこと。帝皇の稱號は支那の秦の始皇帝に始まる。

徳功が三皇五帝をかねすべしる義による。〔水産〕

★曠 廢 クワウハイ

爲すべきことをおろそかにすること。

★光風霽月 クワウフウサイゲツ

人の心のさつぱりして清かなること。うららかな風や雨後の月の義による。書言故事に「人品甚高、胸中洒落、如光風霽月」とある。〔仙工・東商大〕

★皇 謨 クワウボ

天子のはかりごと。皇猷。詩に曰く「經史子集燦古今、粉繪帝道、張皇漢」とある。〔廣高師・横商・桐工・盛農2・東北大・海欄〕

★荒 涼 クワウリヤウ

(1)景色のあれてものすこいこと。(2)心のすさまじいこと。〔陸士・桐工染〕

★黄梁一炊之夢 クワウリヤウイツスキノユメ

人世のはかないこと。邯鄲之夢を見よ。〔大藥〕

★華 夏 クワカ

支那人が自國を尊びて言ひし語。華は文華の義、夏は大なり。今は中華民國といふ。

★畫 架 グワカ

繪を畫く時に、描くべき布や板、又は紙を立てかけておく臺。〔小商〕

★瓦 解 グワカイ

瓦が碎け散る如く、はなればなれに分裂して收拾す可らざるさま。〔海兵・水産〕

★科 學 クワガク

今日科學といふ語は、狹義と廣義の二様に用ひられてゐる。狹義の科學とは自然科學即ち物理學、化學、博物學、天文學、氣象學、醫學等をいひ。廣義の科學とは一種の組織立てられた知識、體系ある知識をいひ、狹義の科學は勿論のこと、それ以外に倫理學、政治學、經濟學、法律學、社會學、哲學等をも含むものである。而して科學研究の方法は第一に觀察、第二に分類、第三に説明である。即ち觀察、分類したる上に事實全般

に亘つて概括的組織的な、しかも詳細妥當な説明を與へて、初めて事實に關する體系ある知識が完成するのである。〔神商・早商・神宮・水農・京城醫〕

★蝸角之爭 クワカクノアラソヒ

極めて小さい争のこと。蝸牛角上之争、螻蛄之争ともいふ。莊子に曰く「蝸ノ左角ニ國スル者アリ、觸氏ト云フ。蝸ノ右角ニ國スル者アリ、蠻氏ト云フ。時ニ相與ニ地ヲ争ヒテ戰フ。伏尸數萬、ニグルヲ逐フテ十有五日ニシテ後反ル」とあり、又白樂天の酒に對する詩に曰く「蝸牛角上争何事、石火光中寄此身、隨富隨貧且權喜、不聞開口笑是癡人」と。〔桐工〕

★瓜葛之親 クワカツノシン

親戚のつゞき合ひのこと。瓜、葛は蔓ありて枝葉の相まといふ。魏明帝の句に「與君新成婚、瓜葛相結連」とある。

★瓦 合 グワガフ

(1)角たゞずして交ること。禮記に「慕賢而容、毀方而瓦合」とある。(2)破れ瓦の集まりたる意にて、整齊せざるものゝ集まりたること。漢書に「起瓦合之

卒^{ソウ}、散^{サン}、散亂^{サンラン}之兵^ノ、不^レ滿^{マン}萬人^ニとある。

★華 甲 クワカフ

六十一歳のこと。華の字を分析すれば六十一となるに
よる。華甲の宴は六十一歳の御祝ひ。

★果敢之氣 クワカンノキ

亭にあつて強く仕送げる氣質をいふ。王安石の祭^ニ歐陽文忠公^ニ文に曰く「果敢之氣、剛正之節、至^レ晩^ニ而不^レ衰^トと。

★蝸牛角上之爭 クワギウカクジャウノアラソヒ

極めて小さな争。蝸角之争を見よ。

★火 急 クワキウ

至急の義。時に曰く「昨夜急^{ナルコトヲ}、如火^ノ、馬蹄踏^{ンテ}、月趨^ク官衙^ニと。

★窠 臼 クワキウ

鳥の巢なり。窠は巢にして鳥の巢は多く縁だかにして中を臼の如く窪めて造る故による。又鳥が棲みて安住の想を生ずる故に、學者の得たりとして、心を落付くる場所を指して窠臼と云ふ。巢と臼とは二つのものを指すにあらず。

★科 擧 クワキヨ

官吏となる試験のこと。科目に應じ、選舉せられる儀による。

★畫 一 クワクイツ

一の字を書きたるが如く、何れも整齊にして同一なること。畫一主義。

★郭 公 クワクコウ

鳩の一種なり。我國にて杜^{ホトトギス}鵠と訓ずれど、本と其の義あるにあらず。

★畫 策 クワクサク

計畫を立てること。謀計。史記に「張良多病、未^ダ嘗^テ特將^ニ也、常爲^ニ畫策之臣^トとある。

★嬰 鏢 クワクシヤク

老年に至つても元氣の衰へないこと。後漢書光武紀に「馬援年六十二、請^レ擊^ニ武陟五溪蠻夷^一、曰、臣尙能披^キ甲^ヲ上^レ馬^ニ、光武令^レ試^シ之^ヲ、援據^リ鞍^ヲ、以示^レ可用^ニ、帝曰、嬰鏢^ニ裁是翁也^トとある。「海嶺・京軍・和商・福商・大外語・醫專・仙醫・長商・北大・海軍・明專・東協・海兵」

★廓 清 クワクセイ

書物をはらひ清めること。廓はからにする。後漢書に「廓^{クワク}清^{セイ}天下^トとある。

★廓 然 クワクセン

心の廣くさつぱりしてゐるさま。心にわだかまりの無さま。

★擴 張 クワクチャウ

おしひろげること。「米工」

★火 鎗 クワサウ

鐵砲のこと。

★火 主 クワシユ

失火せし家即ち火事の火元のこと。

★過 所 クワシヨ

旅客が關門を通行するときの切符、即ち關所の手形なり。

★華 胥 クワシヨ

寢寢のこと。列子の「黃帝が寢寢シテ夢ニ華胥トイフ國ニ行キ、ソノ太平ノ狀況ヲ見タ」といふ故事による。華胥之夢などいふ。

★火 食 クワシヨク

火を以て煮たり焼たりして食ふこと。太古は皆生の儘に食したりしを燧人氏出でて始めて、燧を鑽つて人に火食するを教へたりといふ。禮記に「東方曰夷、被^レ髮^ヲ文^ヲ身^ヲ、有^ア不^ニ火食^ニ者^トとある。

★花 燭 クワシヨク

婚姻のこと。

★華燭之典 クワシヨクノテン

結婚の儀式。花燭之典と同じ。華燭ははなやかな燈火の義。典は儀式なり。

★寡 人 クワジン

徳の少ない義で王侯が自分をいふ謙辭。

★臥薪嘗膽 グワシンシヤウタン

仇を報いんが爲めに苦心すること。越王句踐が薪の中に臥し、日夜甚だ苦しい膽をなめて自ら刺戟し、艱苦を忍んで遂に吳王夫差を滅した故事より出づ。「東商・鹿農・海兵2・法大・東商大・山商」

★花信風 クワシンフウ

花の開かんとするを知らず風。利春より初夏に至る間、

一候即ち五日毎に新たな春風が吹くものとして、之に
應ずる春の花を配當したるもの。

★花 節 クワセツ

三月のこと。

★瓦 全 クワセン

人が何の爲す所もなくして、無事に生きて居ること。
瓦の如きつまらぬものが、完全に保存せらるゝといふ
義による。玉碎の對。北齊書に「大丈夫寧可ニ玉碎ニ、
不レ能ニ瓦全ニ」とある。

★禍 胎 クワタイ

禍の由りて生ずる所。枚乘の書に曰く「禍生有レ基、
禍生有レ胎、納ニ其基ニ絶ニ其胎ニ、禍何自來」と。禍
根も同じ。

★科 第 クワダイ

學術を試験し、其の科目に依り高下次第を定めること。

★過 當 クワタウ

あたりまへより過ぎたること。

★火宅僧 クワタクソウ

住家ありて妻をたくはへ、肉を食ふなまぐさ坊主のこ

と。火宅は佛家で煩惱の多い俗界をさしていふ語で、
この世、現世の意である。

★果 斷 クワダン

思ひきりよく事を決行する意志の力。書經に「惟克果
斷、乃罔ニ後難ニ」とある。

★華 胃 クワチウ

門地の高い家柄。貴族。

★科 場 クワヂヤウ

試験を行ふ場所。宋史に「博求ニ後彦於科場」とある。

★華 蟲 クワチユウ

雄の異名。

★投 渦中 クワチュウニトウヂ

或事柄の中に引きこまるゝこと。

★花中之君子 クワチュウノクンシ

蓮のこと。

★花中之神仙 クワチュウノシンセン

海棠の異名。

★活 計 クワツケイ

生活の計、即ちくらし。白居易の詩に「莫レ厭家貧」

活計微「」とある。

★濶 達 クワツタツ

量見が大きくて小事に頓着せぬこと。

★括 囊 クワツナウ

囊の口を括るが如く、口を閉ぢて言はざること。

★刮 目 クワツモク

目を摩り拭ふこと。即ち目を十分に働かせること。刮
目相待は目をこすり拭ふて、丁寧に見るといふこと。
三國志呂蒙に「士別、三日、當ニ刮目相看」とある。

★科 條 クワテウ

金科玉條の略。法律のこと。見よ七一頁。

★瓜田不レ納履 クワデンニクツをイレズ

嫌疑を避くること。瓜を植ゑてある畑には足を納れて
はならぬ、それは瓜を盗むの嫌疑を受くるからである。
又瓜田にて履を納れずと訓みて瓜畑に若し履が脱する
も、俯して足を履に納るゝ可からずといふ説もある。
又瓜田にて履をはきかへる可らずといふ説もある。最
初のもの優る。文選の古詩に「君子防ニ未然ニ、不レ處ニ
嫌疑間ニ、瓜田不レ納履、李下不レ整冠」とある。「山

商

★瓜田李下 クワデンリカ

嫌疑を受けぬやうに氣を付けて、これを避け遣ざかる
こと。文選の「君子防ニ未然ニ、避レ居ニ嫌疑間ニ、瓜田
不レ容レ履、李下不レ正レ冠」より出づ。その意は瓜畑の
中へ足を入れゝば瓜を取るの疑を受け易く、李樹の下
に於て冠を正しつゝくらはふ時は、恰も手を延ばして李實
を取るに似たり。共に疑を被り易いといふのである。

★科 頭 クワトウ

頭巾又は冠を被らず「すあたま」のこと。

★過渡時代 クワトジダイ

舊時代より新時代にうつりかはる時代。過渡期。

★果 報 クワハウ

(1)仕合のよいこと。幸運。(2)因果の應報。「東高師」

★畫 伯 クワハク

繪畫をよくする人。畫家の敬稱。伯はかしら。

★禍福如ニ糾 繩 クワフクはアザナハるナハのゴトシ

禍と福とはいつもつきまとつてゐるといふこと。繩を
合すを糾といふ。史記に「因レ禍爲レ福、因レ福爲レ禍、

成敗之轉、譬者「科繩」とある。「大外語・東商大・明專」

★過分 クワブン

身分不相應なること。又適度を過ぐること。

★畫餅 クワハイ

五がいた餅で食ふ能はず、なんの用にもならぬこと。畫餅に屬す、畫餅に歸す、などいふ。魏志に「選舉莫取有レ名者、如畫地作餅、不レ可食也」とある。「醫專・千問・東商大・神商」

★臥龍 クワリヨウ

英雄の未だ時を得ずしてひそみ居る喩。龍は臥してあても一度時を得て雲に乗れば天地に上下する靈物なりとの義による。曰く「諸葛孔明臥龍也」とある。「海鏡・高校」

★畫龍點睛 クワリヨウテンセイ

肝要な一點に手を入れて全部をいかすこと。龍を畫いて最後の眼のひとみを書き入れると、始めていき／＼した龍が出來上る義による。水滸記に「張僧繇于金陵安樂寺、畫四龍于壁、不點睛、每曰、點之即」

飛去、人以爲謎、因點其一二、須臾雷電破壁、龍乘雲上天」とある。「六高・關大・東農教・小商・海兵」

★火輪 クワリン

太陽のこと。

★花王 クワワウ

牡丹のこと。

★緩急 クワンキヤフ

急に事のさしせまつた場合。緩は助語。「東商・商船・海兵・立命大」

★環境 クワンキヤウ

周圍の有様のこと。「成蹊高」

★鰥居 クワンキヤ

年老いた男の一人居のこと。「横商」

★觀光 クワンクワウ

外國の風景・文物・制度を見ること。觀光園。觀光之實。易經に「觀三國之光」とある。「米工・金澤藥・丸商・山商」

★棺槨 クワンクワク

死骸を納めるもの。「高岡商」

★鰥寡孤獨 クワンクワコドク

顧るところのない不幸な人々。孟子に「老イテ妻ナキヲ鰥トイヒ、老イテ夫ナキヲ寡トイヒ、幼ニシテ父ナキヲ孤トイヒ、老イテ子ナキヲ獨トイフ。此ノ四ノ者ハ、天下ノ窮民ニシテ、皆グルコトナキ者ナリ。文王政ヲ發シ、仁ヲ施ス。必ラズ斯ノ四者ヲ先キニス」とある。

★管見蠡測 クワンケンレイソク

極めて見識のせまいこと。管で天をのぞき、ほら見て大海の水を測る義による。東方朔客難に「以管窺天、以蠡測海」とある。「陸士・高松商」

★寛厚 クワンコウ

心が廣くして追らず人情に篤いこと。

★換骨奪胎 クワンコツダツタイ

古人の詩や文章の意趣を取り、その語句のみを換へて自分のものとすること。黄山谷曰く「詩意窮リナクシテ、人ノ才ハ限リアリ。限アルオヲ以テ窮リナキノ意ヲ追ハマ、淵明・小陵ト雖モ、工ナルヲ得ザルナリ。」

★莞爾 グワンジ

につこりと笑ふこと。論語に「子之武城、聞弦歌之」

摩^ナ、夫子莞爾^{トシテヒナククニヲシテ}而笑^ヒ曰^ク割^レ鵝^ヲ焉^用ニ牛^ヲ刀^ニと。

★緩衝國 クワンシヨウコク
甲乙二箇國の衝突をさける爲めの國。〔桐工・羅北師〕

★勸進 クワンジン
すゝめて善に向はせること。〔金澤藥〕

★欸待 クワンタイ
親切なもてなし。〔米工・海軍〕

★貫道之器 クワンダウノキ
文章のこと。

★灌頂 クワンチャウ
眞言密教で、受戒の時又は修道の上進する時、香水を頂にそそぐ儀式。〔北大〕

★寛恕 クワンヂョ
心が廣くおもひやりのあること。後漢書に曰く「以^テ三簡朴寛恕^ニ爲^レ政」と。

★勸懲 クワンチョウ
善事をすゝめ、悪事をこらすこと。勸善懲惡。漢書に曰く「慶賞以^テ勸^レ善、刑罰以^テ懲^レ惡」と。〔北大・山商〕

★環堵蕭然 クワントシニクセン

ナリ」とある。〔京城大・山口・廣高師〕

★灌佛會 クワンブツエ

四月八日即ち釋迦佛の生れた日にその像に甘茶を灌ぎかける法會。

★玩物喪志 グワンブツサウシ

無用の物をもてあそび耽つてその本志を失ふこと。

★完璧 クワンペキ

完全なる玉。物の全くして缺點のないこと。趙の蘭相如^クが秦^ニに使^シ璧^ヲを完^ラうして歸^リたる故事に據る。

★冠冕 クワンメン

頭に戴くもの。又第一等の義に用ふ。

★冠履倒置 クワリタウチ

上下尊卑の序を失ふこと。冠を足にはき、履を頭に戴く字義による。明史の太祖、中原に檄する語に曰く「元ハ北夷ノ人ヲ以テ、中國ニ主タリ。コレ豈ニ人カナラムヤ、實ニ乃チ天授ナリ。然レドモ達人志士猶ホ冠履倒置ノ羞アリ」と。

★還曆 クワンレキ

六十一歳の稱。これ干支の再びもとにかへるによる。

家の内のさびしいこと。環堵はまはりの垣、家の内なり。〔名工・甲南・仙工・早高〕

★観念 クワンネン

(1)あきらめ。(2)意識の中に把住する考。〔米工・水産・廣高師・専檢〕

★管鮑之交 クワンバウノマジハリ

仲のよい交。管仲・鮑叔の善く交りたるに出づ。列子に「管仲嘗^テ歌^ジテ曰^ク、吾少クシテ窮困ナリシ時、管^テ鮑^叔ト買^ス。財^ヲ分^チテ多ク自^ラ與^フ。鮑^叔我^ヲ以^テ食^ト爲^サズ、我^ガ貧^ヲ知^レバナリ。吾嘗^テ鮑^叔ノ爲^メニ事^ヲ謀^リテ大^ニ窮困^ス。鮑^叔我^ヲ以^テ愚^ト爲^サズ、時^ニ利^ト不利^トアル^ヲ知^レバナリ。吾嘗^テ三^タビ仕^ヘ、三^タビ君^ニ逐^ハル、鮑^叔我^ヲ以^テ不肖^ト爲^サズ、我^ガ時^ニ遭^ハザル^ヲ知^レバナリ。吾嘗^テ三^タビ職^ヲヒ三^タビ北^ニ去^リ、鮑^叔我^ヲ以^テ怯^ト爲^サズ、我^ニ老母^アル^ヲ知^レバナリ。公子糾^ヲ敗^レ、召^忽之^ニ死^ス。吾嘗^テ四^セラレテ辱^ヲ受^ク。鮑^叔我^ヲ以^テ恥^ナシト爲^サズ、我^ガ小節^ヲ蓋^ヂズシテ、名^ノ天下^ニ顯^ハレザル^ヲ恥^ズル^ヲ知^レバナリ。我^ヲ生^ム者^ハ父母、我^ヲ知^ル者^ハ鮑^叔

この時行ふ祝を還曆の賀、還曆の祝、華甲の宴などいふ。〔東高師・高資・鹿農・陸士〕

★蓋棺事始定 クワンヲオホヒテコトハジめてサダ

人の眞價は、その死後に始めて定まるといふこと。

★訓詁 クンコ

字句の意義を解きあかすこと。〔廣高師・専檢〕

★君子不器 クンシはキナラズ

器は各々その用に適して、相通ずることは出来ない。君子は之と異つて備はらないものはない。即ち君子は一藝のみに通ずるのではないといふこと。

★君子盛徳 容貌若愚 クンシハセイトクあるもヨウバウオロカなるがゴトシ

高徳の人は立派な徳をそなへてゐるが、見たところはばかげてゐるといふこと。史記に曰く「吾聞^ク良賈^深藏^シ若^ク虚^シ、君子^盛徳^容貌^若愚^トと。

★君子交絶 不出惡聲 クンシハマジハリタユる

君子は絶交の後も其の人の悪事をいはない。

★葦酒 クンシユ

蕨(れぎ)・蕨(ら)・にんにく等すべて臭氣あるもの

と酒。佛寺の門前などに不_レ許_ス酒入_ニ山門_ニと石に
鑄りつけてある。これは、僧は其身を清淨潔白にせね
ばならぬ故に、これ等の物を飲食することを一切嚴禁
するとの意なり。莊子に「仲尼曰ク、齊セヨ、顔回曰
ク、回ノ家貧シク、唯ダ酒ヲ飲マズ、葷_クヲ茹_ハザルコ
ト數月ナリ。此ノ若クナレバ、以テ齊人ト爲スベキカ」
とある。

★薰 陶 クンタウ
教へ導いて人物を養成すること。〔陸士・京城醫・女高
師_ノ・東外語〕

★訓 蒙 クンモウ
子供に教へること。書經に「具訓_ニ千蒙士_ニ」とある。
〔鹿農〕

★群 盲 グンモウ
多くのあき盲。

ケの部

★桂 庵 ケイアン
奉公人・縁談などに関して媒介をなすもの。承應の頃

江戸京橋の大和桂庵といふ醫者が好んで縁談の媒介
をなしたるに由るといふ。

★涇 渭 ケイイ
涇も渭も川の名。支那の陝西省にあり、涇水は濁りて、
渭水は清めり。故に善惡正邪を分つを涇渭を分つとい
ふ。

★形影相弔 ケイエイアヒトムラフ
孤獨の淋しいさま。己が形と影とが互に憐れみ、とむ
らふ義による。李智の陳情表に「竊々獨立、形影相弔」
とある。

★經 筵 ケイエエン
(1)經書講義の席。(2)天子が經書の講義を聞く席。〔小
商・海兵・高松商〕

★猊 下 ゲイカ
高僧を呼ぶ敬語。猊下は獅子座で、佛の坐する座。佛
は人の中の獅子なりとの意に本づく。

★傾 蓋 ケイガイ
車を留めて笠を傾ける義より、一寸道中にて行き違ひ
て、車を寄せ合せ、車の蓋をかたむけて互に話をした

るのみにして、舊來の知人の如く親しくなること。こ
の語は孔子家語の致思篇に出づ。即ち曰く「孔子郷ニ
之ク、程子ニ途ニ遭ヒ、蓋ヲ傾ケテ語ル、終日甚ダ相
親シム」と。又史記に曰く「白頭如_レ新傾蓋如_レ故」と。

★警 欬 ケイガイ
しはぶき、せきばらひ。人の聲。警咳とも書く。警欬
に接す、とはお目にかゝることを謙していへるなり。
〔海兵・仙工・専檢₂・米工・京城工・海關・長商・大商・外
語〕

★景 仰 ケイカウ
人の徳をあふぎしたふこと。景慕、仰望。

★計 較 ケイカウ
はかりくらべること。商量。

★啓 行 ケイカウ
貴き人の發足すること。啓は開くなり、故に啓行は發
足することとなる。

★圭 角 ケイカク
かどなり。圓滿ならざる人を圭角ある人といふ。程子
の語に「孟子有_二些英氣_一、才有_二英氣_一、便有_二圭角_一」

とある。〔京醫〕

★炯 眼 ケイガン
能く事物を見ぬくまなこ。〔七高・桐工〕

★桂 玉 ケイギョク
物價の高き土地のこと。桂は良木なり、食の高きこと
玉よりも甚だしく、薪の價の高きこと桂よりも甚だし
の義なり。戰國策に「蘇秦曰、楚國之食、貴_ニ於玉_一、
賤_ニ於桂_一」とある。

★挂 冠 ケイクワン
官を辭すること。又クワイクワンと訓む。衣冠を脱い
で柱などに掛ける義による。漢の逢萌が王莽に事へる
ことを欲せず、冠を東都の城門に掛け、家屬を連れて
遼東に逃れた故事に出づ。即ち曰く「萌、友人ニ謂ツ
テ曰ク、三綱絶ヘタリ、去ラズンバ禍將ニ人ニ及バン
トスト。即チ冠ヲ解キ、東都ノ城門ニ挂ケ、家屬ヲ將
キ、海ニ浮ンテ遼東ニ客タリ」と。〔明專₂・千圓・高
松商・鹿農〕

★鯨 鯢 ケイゲイ
海甲の大魚なり。小魚を取り食がふ故に、又惡人の首

魁を稱す。鯨は雄くぢら、鯨は雌くぢら。

★敬 虔 ケイケン

つゝしみかしこむこと。〔海兵・鹿農〕

★頃 刻 ケイコク

しばらく。〔海樓・京城醫・神商〕

★荆 妻 ケイサイ

自分の妻の謙稱。後漢の梁鴻の妻の孟光がいばらのか
んざしをさした故事による。

★警 視 ケイシ

高等官の警察官吏。判任官の警察官吏は警部。

★閨 秀 ケイシウ

婦人のすぐれたる者。閨は寢屋。古への制、婦人は外
に出てずして常に閨室の内に在りし故にいふ。閨秀作
家、閨秀畫家などいふ。晋書に「張玄之妹、有ニ才質、
適ニ千頃氏、濟泥曰、願家婦清新玉映、自是閨房之秀」
とある。

★形而上 ケイジヤウ

かたち以上のもので即ち無形のもの。無形の義で道の
こと。形而上學は精神界に関する學問、即ち哲學、倫

理學などのことをいふ。この反對の形而下は有形のも
の。有形の義で器物のこと。形而下學は物質界に関す
る學問、即ち、物理學、博物學などをいふ。易に曰く
「形而上者、謂ニ之道、形而下者、謂ニ之器」と。
〔京城醫・大分商・神商・盛農・水産・陸經〕

★霓裳羽衣 ゲイシヤウウイ

天人の羽衣。天上世界の音楽にまねして唐の玄宗皇帝
の作つた舞曲の名。

★卿相雲客 ケイシヤウウンカタ

宰相や殿上人。月卿雲客も同じ。〔六高・同志〕

★藝 術 ゲイジュツ

美を表現する手段。詳しく言へば、人生及び自然に觸
れて生ずる人の感覺・情緒・氣分・感性等の美を表現
するもの。〔廣高師・早高2・大分商〕

★經 書 ケイシヨ

聖賢の書いた書物。〔水産〕

★敬神崇祖 ケイシンスウソ

神を敬ひ、先祖をたつとぶこと。敬神崇祖は世界に誇
る我が日本精神の一をなすものである。〔東商船〕

★經 世 ケイセイ

世をおさめること。

★警 世 ケイセイ

世の中の人をいましめること。〔明專・鳥農・朝大〕

★警 醒 ケイセイ

れむりや迷をさまし醒めること。〔桐工〕

★傾 城 ケイセイ

人を迷はす美人のこと。傾國も同意なり。詩經に「哲
夫成レ城、哲婦傾レ城」とあり、哲は知なり。漢の李延
年の詩に「北方有ニ佳人、絶世、而獨立、一顧、傾ニ
人城、再顧、傾ニ人國」とある。後には娼婦の異稱と
もなれり。

★勁 捷 ケイセツ

つよくすばしこいこと。〔水産〕

★螢 雪 ケイセツ

螢や雪の光によりて辛苦して學問すること。晋書に「車
胤字武子、幼、恭勤博覽、貧、不ニ常得レ油、夏月以ニ練
囊ニ盛ニ數十螢火、照レ書讀レ之、以レ夜繼レ日、後官至ニ
尚書郎」とあり、又同書に「孫康少、清介、交游不レ

★輕 諾寡信 ケイダクワシン

物事をたやすく受合ふものは信すくなくて違約するこ
とが多いといふこと。

★輕 煖 ケイダン

輕くてあたゝかい衣服。〔鹿農・陸士・西南・廣高師〕

★逕 庭 ケイテイ

大差があること。甚だかけはなれてゐること。逕は門
前の路にして、庭は中庭なり。逕は狭く、庭は廣し。
その相違ふ義による。莊子に「太有ニ逕庭、不レ近ニ人
情」とある。〔神商2・千園・外語・水産〕

★兄弟閥 牆外禦ニ其侮

ケイテイカキにセメげどもホカソのアナドリをフセぐ
兄弟が家の内で互に争ふも、外の侮あれば兄弟一致し
て之を禦ぐといふこと。經詩に出づ。〔海兵・陸士〕

★輕佻詭激 ケイテウキゲキ

心がかかるくしくて眞面目な考をもたず、言動が中正
を失して極端に走り道理に違ふこと。〔名工・桐工〕

★輕佻浮薄 ケイトウフハク

心がかろくしくして眞面目な考をもたず、しつかりせぬこと。

★系統的 ケイトウテキ

すぢみちをたてよといふこと。〔水農〕

★鯨波 ゲイハ

おほなみ。ときの聲。開聲。〔陸士・水産〕

★教坊 ケイバウ

すべての藝をしこむ場所のこと。事物紀原に曰く「唐ノ百官志ニ曰ク、開元二年、教坊ヲ蓬萊宮ノ側ニ置キ、京都ニ左右教坊ヲ置イテ俳優雜劇ヲ掌ラシム」と。又讀事始に曰く「玄宗、教坊ヲ立テ、新聲散樂ノ曲、優倡受倡優術ノ戲ヲ以テ、ソノ諧謔ニ因ツテ、金帛章綬ヲ以テ之ヲ賞ス。因ツテ、使ヲ置イテ以テ之ヲ教習ス。國家、乃チ伶人久次ノ者ヲ以テ使ト爲スト云フ」と。後世には妓流の居る所をいふ。

★啓發誘掖 ケイハツイウエキ

知識を開き、導きたすけること。論語に「子曰、不レ憤不レ啓、不レ悱不レ發」とある。〔金工・米工・桐工〕

我が心をひらいて君王の心にそむぐこと。忠言を君の耳に入れること。〔山商・北大・仙工〕

★經綸 ケイリン

國家を治むること。絲筋を整理する義よりいふ。經綸胸に溢るなどいふ。易に「君子以經綸」とある。〔熊工・慈醫〕

★桂林一枝 ケイリンイツシ

多くの好き物の中の唯一なるをいふ。晋書に「臣舉賢良、對策爲天下第一、猶桂林一枝、崑山片玉」とある。

★雞肋 ケイロク

役にはたゝぬが棄てるには惜しいもの。鶏のあばらばれは之を食へば得るところなけれど棄てるには惜しいとの義による。〔日本商〕

★稀 有 ケウ

めつたにないこと。珍しいこと。希有も同じ。

★僥倖 ゲウカウ

思ひがけないさいはひ。又よくばるさま。〔陸士・海商〕

★警蹕 ケイヒツ

天子若くは大名などが、路の人を戒めて猥りに其行列を亂ることを許さぬこと。さきばらい。漢書に「從二千乗拾騎、出稱警蹕、入稱蹕」とある。〔金澤藥・横商・東商〕

★傾覆 ケイフク

くつがへること。〔三高・米工・陸士・北大〕

★鷄鳴狗盜 ケイメイクトウ

賤劣の人物のこと。齊の孟嘗君が雞のこわいろを使ふ人と、犬(狗)のまねをして物を盗む人との助けにより、秦の函谷關から逃れ歸つた故事。本會漢學講義録の十八史略七十一頁を参照されたし。〔小商・海經〕

★啓蒙運動 ケイモウウンドウ

蒙昧なる者の智を開き導くはたらき。〔明專・高松商・山商〕

★形容枯槁 ケイヨウコカウ

かほかたちがやせおとるへること。屈原の漁父の辭に「顔色憔悴、形容枯槁」とある。〔横商〕

★啓沃 ケイロク

★校合 ケウガフ

讀み合せて異同を調べること。カウガフとも讀む。〔水産・高校・七高・京醫〕

★澆季 ゲウキ

道德風俗の輕薄になつた時代のこと。世の末。澆は浮薄、季はすゑの義なり。〔小商・水産・早高〕

★警句 ケイク

鋭く實際を穿つた短い句のこと。

★矯激 ケウゲキ

中正にはづれてはげしいこと。〔廣高師〕

★教唆 ケウサ

そゝのかし煽動すること。惡智慧をつけること。〔長商・山商・米工〕

★趨捷 ケウセウ

身が速くすばしいこと。〔神商・山商・早高・海商〕

★翹楚 ゲウソ

衆に秀でたるもの。高く抜き出た薪の義による。詩經に「翹楚錯薪、言刈其楚」とある。

★翹望 ゲウバウ

足をつまだて、切にのぞみまつこと。〔東高師〕

★矯風 ケウフウ

悪い風習をなほすこと。矯は曲つたものをまっすぐにためなほすこと。

★堯風舜雨 ゲウフウシュウ

聖天子の仁徳。堯・舜は共に支那の聖天子。〔九藥〕

★梟雄 ケウユウ

たけく強いこと。又悪人のかしら。後漢書に「除忠害善專爲梟雄」とある。〔陸士・横商〕

★怪我之功名 ケガノコウメイ

意外な功名。期せずして成した功名。〔愛賢・濱商〕

★擊壤 ゲキジャウ

支那の古代の遊戯のこと。壤は木にて造り形状履の如し。その一壤を地にたて、三四歩を去り、他の一壤を以て之を撃ち、中りたるものを上となす。史記に「帝遊康衢、人撃壤而歌于路」とある。撃壤の世といへば、天下無事にて、人民が撃壤して榮める世といふことにて、即ち太平の御世といふこと。

★缺舌 ゲキセツ

言語の典雅ならざる喩。又外國人のもの言ふ様を卑めた語である。缺はもずにして惡聲の鳥なり。缺舌はもずの喙る如しの義なり。孟子に「南轅缺舌之人」とある。

★擊柝 ゲキタク

拍子木のこと。又拍子木を打つて夜廻りする。〔長商〕

★激湍 ゲキタン

激しい瀬のこと。はやせ。湍は水の急に流るゝ瀬なり。

★逆旅 ゲキリョ

旅館のこと。逆は迎なり。旅の客を迎ふる義による。李白の語に「天地者萬物之逆旅」とある。〔金賢・專檢・高商・濱商〕

★逆鱗 ゲキリン

天子の御いかり。韓非子に曰く「龍ノ蟲タルヤ、柔ナレバ狎レテ騎ルベキナリ。然レドモ其ノ喉下ニ逆鱗ノ經尺アリ、若シ人之ニ嬰ル者アレバ必ズ人ヲ殺ス。人主モ亦逆鱗アリ。説者、能ク人主ノ逆鱗ニ觸ル、コトナクバ、則チ幾カラシ」と。龍は人君の象なり。〔横商・陸士・北大・小商・長商〕

★下剋上 ゲコクジャウ

下のが上のを侵すこと。臣が強く君に迫ること。

★戲作三昧 ゲサクサンマイ

娛樂を目的とする本即ち小説を作るに熱心なること。〔水農〕

★懈怠 ケタイ

おこたること。怠慢。〔旅工・盛農・長商・女高師・明大・關大〕

★解脫 ゲダツ

現實の世俗の念を脱すること。煩惱の縛をとき三界の苦を脱すること。法華經に「念三解脱門」釋然得三解脱」とある。〔專檢・水農・水産・外語・大分商・早高〕

★下知 ゲチ

下の者に知らせる意にて、さしづ、命令のこと。〔山商〕

★結願 ケチグワン

願掛の日数が満ちること。

★月暈 ゲツウン

月のかき。〔早高〕

★桔槔 ケツカウ

はねつるべ。

★結跏趺座 ケツカフザ

あぐらをかくこと。坐禪を組むこと。

★缺陷 ケツカン

かけてゐること。缺點。不足。不備。〔金工〕

★血氣 ケツキ

物に感激しやすい気分。〔神商〕

★譎詐 ケツサ

いつはること。〔水産・農大〕

★血食 ケツシヨク

神が祭の時の血ある犠牲（牛羊等）を召し上ること。又神を祭ること。左傳に「社稷實不血食」とあるは祭の絶え國の亡ぶ義なり。〔廣高師・長商〕

★月旦 ゲツタン

月の初の日。又人物を批評すること。即ち、後漢書許劭傳に「初劭與從兄靖俱有高名、好共覈論黨人」

物、毎月輒更ニ其品題ニ、故汝南俗、有二月旦評一焉」の故事に出づ。魏の曹操、劭に請ひ問ふて曰く、我ハ如何ナル人カト」劭曰く「子ハ治世ノ能臣、亂世ノ奸雄ナリト」操、大いに喜ぶと。〔紳商・京城工・高檢・國學・海經〕

★築狗吠ノ堯 ケツのイヌゲウにホゆ
主人の爲には善者へても向ふといふこと。築の如き惡人に寄はれてゐる犬でも、其の主人の命をきいて、堯の如き聖人にも吠えつくといふ義による。〔名工・廣高師〕

★潔 癖 ケツベキ
きれいなこと。

★建 氣 ケナゲ
かひなくしいこと。神妙なこと。

★懸 念 ケネン
気がかりのこと。〔專檢〕

★下馬評 ケベヒヤウ
門外者の批評のこと。しろうとの批評。徳川時代に江戸城の下馬札の立つた附近で下々の者が將軍などを批

評した義による。〔臺師〕

★狹 隘 ケフアイ
せまくて窮屈なること。〔米工・陸士・海兵〕

★俠 氣 ケフキ
男だてのこと。〔山商〕

★協 商 ケフシヤウ
相談してはからふこと。

★怯 懦 ケフダ
いくぢなし。臆病。〔千葉醫・山商〕

★篋 底 ケフテイ
はこのそこ。〔廣高師〕

★協 調 ケフテウ
互に心をあはせること。勞資協調。〔鹿農・紳商・水産〕

★業精ニ于勤 荒ニ于嬉 行成ニ于思 毀ニ于隨
ケフはツトムるにタハしくタノシムにスサミ、オコナヒはオモフにナリてシタガふにヤブる
學業は勤勉にやれば精通し、遊戯すれば荒廢する。行は行の善惡を考へてやれば成就し、我意のままにやればやぶれる。〔大分商〕

★脅 威 ケフキ
おびやかすこと。〔金工〕

★下 膺 ケラウ
身分のひくいもの。

★吹毛求疵 ケをフいてキズをモトむ
毛の中で吹き尋ねて、きづを求めらるやうに、強いて人の缺點を指摘すること。韓非子に「有司吹毛求疵」とある。〔陸士・神宮〕

★懸 案 ケンアン
解決せずに残つてゐる問題のこと。〔航機・京城醫〕

★眩 耀 ゲンエウ
目がくらむほどかがやくこと。

★儻 焉 ケンエン
あきたるさま。是認して満足するさま。〔東商船・甲南・水産〕

★權 衡 ケンカウ
つりあひ。平均。〔高校・八高〕

★言行君子之樞機 ケンカウはクンシノスウキ
言語と行動は君子にとつて最も大切なものであると

いふこと。樞はひらき戸を開閉する軸となる所、樞はイシユキ
考のはじきがね、共に大切なところ。

★檢 覈 ケンカク
しらべ考へること。〔陸士〕

★縣 隔 ケンカク
かけへだまり。〔金工〕

★簞諤風衰 ケンガクのフウオトロヘたり
正しくやかましい様子が衰へたといふこと。〔明專〕

★懸河之辯 ケンガノメン
辯説水の流るゝ如き能辯をいふ。即ちよくしやべること。晋書に「郭象少クシテ才理アリ、老莊ヲ好シテ清言ヲ能クス。王衍毎ニイフ、象ガ語ヲ聽ケバ、如ニ懸レ河洶レ水而不干焉」とある。〔千閩〕

★牽強附會 ケンキヤウフクワイ
無理にこじつけること。〔東美・海經・金工・京城大・藏北商・熊工・大醫大〕

★喧 廔 ケンクワイ
かまびすしいこと。

★元 勳 ゲンクン

國家を興すに與り又は君主を輔佐して大功ありし者。

★檢 校 ケンゲウ

盲人の上官のこと。

★蹇々匪躬 ケンケンヒキユウ

臣が君の爲に心をこめて忠義をつくすこと。蹇蹇い上の蹇は自分のなやみくるしみ、下の蹇は君のなやみくるしみ、即ち自分の困難に屈せずして往いて忠義を盡すをいふ。匪躬は自分の爲にするのでなく君の爲にするのである。〔關大・山商〕

★拳々服膺 ケンケンフクヨウ

捧持して膺（むね）につけ肌身をはなさないこと、よく覚えて片時も忘れないこと。中庸に「得一善則拳々服膺而弗失之」とある。〔長商〕

★乾 坤 ケンコン

天地のこと。乾坤一擲は天地を賭して、のるかそるか勝負をなすこと。〔名商・和商〕

★滅 殺 ケンサイ

へらし少くすること。〔山商〕

★見 參 ケンザン

お目にかゝること。〔此農大〕

★研 鑽 ケンザン

事物の道理をきはめしらべること。研はとぎ磨き、鑽は物を穿つ器（ノミ）の類。〔鐵道〕

★現 實 ケンジツ

ありのまま。まことのさま。

★謙 讓 ケンジャウ

けんそんしてゆるぶること。

★賢聖障子 ケンシャウのシャウジ

紫宸殿にある障障子で、支那三代より唐迄の聖賢三十二人の像をかいてある。

★見性成佛 ケンシャウジャウブツ

さとりを開くこと。

★黔 首 ケンシュ

人民のこと。黔は黒いこと、黒い首といふ義による。黎も黒い義にて黎民は同じく人民のこと。史記に「更メテ民ヲ名ツケテ黔首トイハン」とあり、又書經に「黎ハ黒ナリ、民ノ首皆黒シ、故ニ黎民トイフ」とある。〔横商・水産〕

★牽 制 ケンセイ

自由にさせないやうにおさへること。又牽掣とも書く。唐書に「牽掣首尾」とある。〔米工・東北大・北大〕

★言 責 ケンセキ

言つたことに對する責任。孟子に「有言責者、不三得三其言則去」とある。〔鹿農・高師〕

★儼 然 ケンゼン

おごそかなさま。〔明專・長商・專檢・桐工〕

★檢 束 ケンソク

警察官が公力を以て一時人の行動の自由を束縛又は停止すること。

★還 俗 ゲンソク

僧がもとの俗人になること。〔上竄・愛賢大・海機・外語〕

★眷 族 ケンゾク

家族のこと。眷はなまきけをかける。〔農大・臺農〕

★倦 怠 ケンタイ

らみつかれること。

★獻 替 ケンタイ

★權 道 ケンダウ

方便に仗ふ手段。臨機應變の策略。〔山商・海兵・長商・京城商名工・桐工・男專・千園・高岡商・京城工〕

★健 啖 ケンタン

大食すること。啖はくらふ。〔和商〕

★軒 輕 ケンチ

ちがひのこと。へだまり。優劣。輕重。〔千園・海兵・北大・長商・專檢・陸士・海機・名工・早高〕

★玄 猪 ゲンチヨ

あやしし。〔廣高師〕

★慳 貪 ケンドン

慳ふかいこと。

★原動力 ケンドウリヨク

運動は活動をおこすもの力。

★堅忍不拔 ケンニンフバツ

に背紫の個所にあつたといふ故事による。〔海欄・福商・海生・神商・明専・東協大・高校・長商・陸士・水産・名工・海兵〕

★工業動員 コウケフドウケン

戦時の急に應ずる爲め、工場・従業員・原料・製作品等を國家政府の有とすること。〔高松商〕

★後 見 コウケン

幼主又は家長が家事を見難い場合に、その人の爲にうしろだてとなつて、身體の保護・監督・教育・財産の管理をなし輔佐すること。〔鹿農〕

★貢 獻 コウケン

力をつくすこと。獻は獻の俗字なり。〔明専〕

★拘 牽 コウケン

なづみひかされること。〔高校・陸士・大醫大〕

★後 願 コウコ

後の心配のこと。後願の憂などいふ。〔鹿農〕

★鴻鵠之志 コウコクノコ、ロザシ

貧賤にして大志を抱くこと。鴻はオホトリ、鵠はクダヒ。史記に「陳勝字ハ涉、少時家貧シク人ノ爲ニ傭耕

ス。同耕ノ者ニ謂ツテ曰ク、他日富貴トナラバ、汝等ヲ忘レジト。同耕ノ者笑ツテ曰ク、貧寒此ノ如シ、焉ゾ富貴ナルコトアランヤト。勝曰ク、燕雀豈ニ鴻鵠ノ志ヲ知ランヤト」とある。

★後 昆 コウコン

子孫、後世のこと。昆も後なり。書經に「垂ニ優足之道ニ示ニ後昆」とある。

★構 想 コウサウ

思想の組立のこと。

★鴻 爪 コウサウ

跡の遺らざること。鴻は雁の大なるもの、初春北に歸る時雪に爪痕を残して心覺えとすれども、再び來る時には雪は、消えて爪跡は知れずといふによる。蘇軾の詩に「人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥、泥上偶然留指爪、鴻飛那復計東西」とあり、頼山陽の鴻雪處記に「鴻之蹄、爪ニ於雪ニ以記ニ其所ニ過、其來雪滅、而痕ニ不可知也、古人以喻ニ人之游歴無ニ跡」とある。
★無ニ恒産ニ者無ニ恒心ニ ンナシ
コウサンナキモノはコウシ生活をする一定の財産の無い者は、貧賤の爲めに心が

亂れて人なる善心を失ひ、邪道に迷ふに至るといふこと。孟子に曰ク「無ニ恒産ニ而有ニ恒心ニ者、惟士ニ爲レ能、若レ臣則無ニ恒産ニ、因無ニ恒心ニ、苟、無ニ恒心ニ、放辟邪侈、無レ不レ爲ニ己」と。〔東高師2・海軍・山商・専檢・海欄・明専・東商大・臨教・陸士・普文・立命大・和商・海經〕

★口 實 コウジツ

いひぐさ。他の事を借りて、わが非をいひわけする義。書經に「恐ニ來世以レ我爲ニ口實」とある。〔和商〕

★口 耳之學 コウジノガク

耳から聞いたものを口から出して説く淺はかな學問。キムカチリの學問。揚子曰ク「小人之也、入ニ乎耳ニ出ニ乎口、口耳間四寸耳、易ニ以美ニ七尺之軀ニ哉」と。

★公生涯 コウシヤウガイ

役所づとめの一生の中。〔鹿農〕

★苟 且 コウシヨ

かりそめ。一時のまに合せ。〔陸士・専檢・盛農・北大〕

★口 錢 コウセン

コウセン

賣買のとりつぎをなして取る手数料。〔鹿農〕

★倥 偬 コウソウ

いそがしいこと。兵馬倥偬などいふ。〔臨教・高商〕

★拘 束 コウソク

自由な行爲をさせないこと。〔専檢〕

★拜 二 後塵 コウヂン

人の爲したることを有難がつて其通りをすること。かすを倣めること。〔海兵・名商〕

★肯 定 コウテイ

然りとすること。反対は否定。〔千國・宇農〕

★拘 泥 コウテイ

或事柄にかゝはりなづむこと。〔海欄・産師〕

★後 天的 コウテンテキ

生れてから後に經驗によつて得た識見といふ意。反対は先天的。

★口 頭 コウトウ

ことば。くちさき。

★功 成 名 遂 身 退 天 之 道 也

コウナリナトナトけてミシリゾクはテンノミチナリ

既に成功し名譽も出来れば、退いて其の身を守るは、これ天の道にかなへるものである。〔海兵〕

★勾配 コウバイ

傾斜のこと。

★黄白之慾 コウハクノヨク

金銭上の慾のこと。

★口碑 コウヒ

いひつたへ。傳説。〔愛賢・山商〕

★洪謨 コウボ

天皇の御はかりごと。大きなはかりごとの義による。

〔三農・千園〕

★拘留 コウリウ

つかまへてとめておくこと。違警罪に科する刑で、一定の場所に留置して自由を束縛すること。

★孤影蕭然 コエイセウゼン

たゞひとり身の寂しいさま。〔桐染〕

★吳下阿蒙 ギカのアモウ

學識なきつまらぬもの。吳下は地名、阿蒙は吳の孫權の臣の呂蒙をいふ。呂蒙は始め學を知らざりしも、孫

權にすゝめられて學に就き學識英博となり、昔日の吳下の阿蒙に非らずと言はれし故事による。即ち吳志に「魯肅遇^レ蒙言議、拊^ニ蒙背曰、吾謂^ニ大弟^ト但有^ニ武略^ト耳、今者學識英博、非^ニ復吳下阿蒙^ト」とある。阿蒙の阿は發語の辭である。〔京城醫・水産・鹿農〕

★互寒 ギカン

きびしい寒さ。〔専檢・明專〕

★古稀 コキ

七十歳をいふ。杜詩の「人生七十古來稀」より出づ。

〔水産〕

★狐疑 コギ

疑多くして決せざること。狐は疑ひ深い獸にして、氷河を渡るときは、且つ躊躇き且つ渡るといふによる。

★古今集 コキンシフ

古今和歌の略で平安朝の勅選歌集である。即ち醍醐天皇の勅により紀貫之等が撰集した和歌で、二十卷よりなつてゐる。〔専檢〕

★國家主義 コクカシユギ

自己の屬する國家の福利安寧の増進を圖るを至上至高

のものとする主義。

★國際問題 コクサイモンダイ

國と國との交際上の問題のこと。〔成蹊高〕

★國際聯盟 コクサイレンメイ

各國の相互扶助を目的として約束をきめたもの。〔水産〕

★告朔餼羊 コクサクのキヤウ

無用の費用のこと。虚禮なりとも存して置く方がましであるといふこと。論語に「子貢愆^レ去^ニ告朔之餼羊^ト、子曰、賜也、爾愛^ニ其羊^ト、我愛^ニ其禮^ト」とある。告朔は毎月の朔日（一日）に廟に告げること、餼羊は牛牲の羊。即ち昔、支那の天子が毎年季冬に來年十二ヶ月の曆を諸侯に頒ち與へ、諸侯は之を受けて先祖の廟に藏め、毎月一日には羊のいけにへを供へ、廟に告げるを例としたが、子貢之れを虚禮として廢せんと欲せしも孔子は禮を愛す故に存して置くがよいとした故事に出づ。〔京城商〕

★國士 コクシ

國の中に於て最も勝れたる人物。〔東高師〕

★酷似 コクジ

極めてよく似てゐること。〔廣高師〕

★國手 コクシユ

名高き醫者のこと。國語に「上醫醫^レ國、其次救^レ人、固^ニ醫官也^ト」とある。〔京城醫・和商・高校・東北大・盛農・上野・六高・北農〕

★曲水之宴 コクスキノエン

文人等が流水に盃を流し、詩を賦して遊び、流した盃の己の前を過ぎないうちに詩を作り、その盃を取つて飲んだ風流な遊び事。後に日本では、御前で詩を作り宴を賜はる公事をも云ふ。キヨクスキのエンとも讀み、曲水流觴ともいふ。觴は盃なり。

★國粹保存 コクスキホゾン

國家の固有の長所を大切に殘すこと。〔大阪外・名工〕

★國是 コクセ

是と認めたる國の施政の方針。〔金葉・高校・東高師・陸士・鹿農・高專〕

★告訴 コクソ

被害者が訴へること。

★告天子 コクテンシ

雲雀の異名。

★國 蠹 コクト

國家の賊。蠹は木くひ虫で物事を害す。〔北大・北農〕

★告 發 コクハツ

被害者以外の者が訴へること。

★五 經 ゴケウ

五つの經書。經書とは聖人の書いた書物。即ち五經とは詩經・書經・易經・春秋・禮記。〔京城大〕

★虎 穴 コケツ

虎のすまへる穴の意にして、非常に危険なる場所。後漢書班超傳に「ソノ同往ノ士卒ニ謂ツテ曰ク、虎穴ニ入ラズンバ 焉 ソ虎子ヲ得ム」とある。〔仙醫〕

★估 券 コケン

人間としてのれうち。價格。土地の所有を證する證券の義による。估券にかゝはるなどいふ。

★糊 口 ココウ

くちすぎ。糊は一に糊に作り、かゆ、又はかゆをすゝるの意となる。〔桐工〕

★股 肱 ココウ

モ、ヤヒチの如く頼みとするもの。人の體に於て心腹を君主に譬へ、股肱を輔佐の臣に喩ふ。股肱の臣といふ。書經に「帝曰、臣作三股肱耳目」とある。〔海欄・山商・甲南〕

★心廣體胖 ココロヒロクタイユタカナリ

心が廣々とし身體がのび／＼としてくつろぐこと。この語大學に出づ。〔專檢・女高師〕

★五 彩 ゴサイ

五色のいろどり。即ち青・黄・赤・白・黒なり。書經に「以五彩彰施于五色、作服」とある。〔小商・廣高師・宇農〕

★故 事 コジ

いにしえありしことども。史記に「余所謂述二故事一、整齊其世傳」とある。

★估 侍 コジ

父母の異稱。詩經に「無父何估、無母何侍」とあるに出づ。〔廣高師〕

★居 士 コジ

(1)學徳があつて仕官せざる隱者。(2)眞言宗以外にて男子の法名の下に附ける稱號。

★虎視眈々 コシタンク

強力者が機會をねらつてゐる形容。虎が恐ろしい目つきをして、飽くなき慾を逞しうせんとしてゐる義による。易に「虎視眈々、其慾逐逐」とある。〔鹿農・和商・長商・水産・陸士・盛農・海兵〕

★痼 疾 コシツ

久しく疾んでなほらない病のこと。宿痼。〔東北大・新醫・廣高師〕

★故 實 コジツ

後世の範例とする古き事實のこと。國語に「問于遺訓、咨于故實」とある。

★五十歩百歩 ゴジツホヒヤツホ

大差のないことをいふ。孟子に曰く「兵刃既接、棄甲曳兵而走、或百步而後止、或五十步而後止、以五十步笑百步、則何如、曰、不可、直不百步耳、是亦走也」と。即ち五十歩逃げたものが、自分より逃足が早くて百歩逃げたものを嗤ふやうなもので

逃げたことは同じで大差がないといふ義による。〔海欄・海兵・專檢〕

★五 常 ゴジャウ

人の常に身に備ふべき大切な道で仁・義・禮・智・信のこと。三綱五常を見よ。〔愛醫・大工・長商・鮮大・廣高師・陸士・大醫・東高師〕

★孤城落日 コジヤウラクジツ

援兵の無い城と西に沈ませんとする日とで、即ち心細いこと。王維の詩の終の句に「愁見孤城落日邊」とある。

★五車書 ゴシヤのシヨ

澤山の書籍のこと。莊子に「惠施多方、其書五車」とある。五臺の車に載積する程の書といふ義による。

★扈 從 コジユツ

君主につきそひて行くこと。扈は後に従ふこと。宋史に「詔扈從人、毋壞民舍什器樹木」とある。

★鼓 吹 コスキ

すゝめはげますこと。鼓は鼓を撃つて勵ますこと、吹は笛を吹くことにして、併せて激勵する義による。世

説に「往開^{ヤク}黃鸞^ノ、此俗耳針砭、詩陽鼓吹」とある。〔鹿農〕

★五 節 ゴセツ

大嘗會又は新嘗會に行はれる女の舞樂。

★五 攝家 ゴセツケ

舞政關白に補せられる家柄の五家。即ち近衛・九條・一條・二條・鷹司。

★姑 息 コソク

間に合せのこと。姑は少時、息は安なり。一時の安きを求むる義による。禮記に「君子之愛^{スル}人也、以^テ徳、細人之愛^{スル}人也、以^テ姑息」とある。〔京麩・女高師・名工〕

★御 説 ゴヂヤウ

おほせ。おことば。〔千醫・鹿農〕

★忽 焉 コツエン

にはかに。忽然。〔米工・神商大〕

★骨 鯁 之 臣 コツカウノシン

直言して憚らざる臣のこと。鯁は魚の骨なり。魚の骨が喉中に留るが如き臣の義なり。史記に「方今吳ハ外

楚ニ困ンデ、内空シク骨鯁ノ臣ナシ、是レ我ヲ如何トモスルナシ」とある。

★刻苦勉勵 コツクマンレイ

非常に辛苦をしつゝせい出すこと。

★滑 稽 コツケイ

おどけ。じやうだん。滑は亂なり、稽は同なり。辯捷の人、非を以て是の如く、是を言つて非の如く、能く同異を亂る義による。史記に「淳于髡ハ齊贅婿ナリ、長七尺ニ滿タズ、滑稽ニシテ辯多シ。數々諸侯ニ使シテ未ダ嘗テ屈辱セラレズ」とある。〔海兵〕

★忽 諸 コツシヨ

ゆるがせ。なほざり。忽は消滅する貌、諸は無意味の助辭。〔水産・愛醫・新醫・米工・名工〕

★骨 董 コツトウ

古物のこと。本、方言にして定解なし。王世貞の文に「豐道生ハ骨董肆ノ如シ、眞贋雜ヘ陳ヌ」とある。〔大商〕

★骨肉相闘 コツニクアヒセメグ

親子兄弟が互に相争ふこと。〔明専・海欄〕

★牛頭馬頭 ゴツメン

地獄の獄卒の名。牛頭又は馬頭をなす。〔米工〕

★虎擲龍拏 コテキリヤウダ

はげしい争のこと。〔横商・濱商〕

★胡蝶之夢 コテフノユメ

莊周が夢に胡蝶に化して樂んで彼我の別を忘れたること。莊子の齊物論に「莊周夢爲^ニ胡蝶、栩栩然^{トシテ}胡蝶也、栩栩然^{トシテ}胡蝶也、俄然^{トシテ}覺、則遽遽然^{トシテ}周也、不知^レ周之夢爲^ニ胡蝶、胡蝶之夢爲^ニ周也」とある。

★糊 塗 コト

ぬりかくす。ごまかすこと。續着。宋史に「太宗呂端ヲ相トセント欲ス。或人曰タ、端ハ人トナリ糊塗スト。帝曰ク、端ハ小事ハ糊塗スレドモ、大事糊塗セズト。竟^テ決シテ之ヲ相トス」とある。〔鹿農〕

★好 面 人 者 亦 好 背 毀 之

コノんでヒトをメンヨするモノはマダコノんでコレをハイキス

好んで人の目の前で追従する者は、また好んで人の居

ない所て人を誘ふものである。〔陸士〕

★胡馬北風 コバホクフウ

故郷の忘れ難い喻。北方の胡の國から出た馬は北風の吹く毎に胡國を慕ふて嘶くといふ義による。〔京城醫・農大〕

★小春日和 コハルビヨリ

舊の十月頃のよい日和のこと。小春日は陰曆十月の異稱で、この月の氣候は温暖で春に似てゐるからである。〔高校〕

★小 判 コベン

徳川時代の金のこと。〔大阪女専〕

★狐 媚 コビ

巧に媚び諂うて人を惑はすこと。狐は人を惑はすといふよりいふ。晉書石勒の語に「欺^キ孤兒寡婦、狐媚^ヲ以取^ル天下」とある。

★誤 謬 ゴビウ

あやまり。〔海兵〕

★庶 幾 コヒネガフ

願ひ望むこと。又シヨキともチカシとも讀む。〔水産〕

明專

★五風十雨

ゴフウジフウ
平和なこと。五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降るは氣候の順を得たる義なり。玉菴論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊」とある。「小農・廣高師」

★鼓 舞

コブ
すゝめ立て、奮ひ起さしむること。楊子に「鼓舞萬物者、其唯風雷乎、鼓舞萬民者、其唯號令乎」とある。「女高師」

★鼓 腹

コフク
腹づゝみを打ち、衣食足りて満足し、太平を樂しむ民のさま。「水産・海兵」

★鼓腹擊壤

コフクゲキヤウ
太平をよるこぶさま。十八史略に「有老人含哺鼓腹擊壤而歌」とある。擊壤の部を見よ。「海兵」

★虛無僧

コムソウ
善化宗の僧侶のこと。有髮にして丸ぐしの帯を締め、下駄を履き、絹布の小袖を重ね、深緇笠を冠り袈裟を

かけ、尺八を吹き、錢を乞ひて諸國を修行す。武士の罪を犯せしもの、刑罰を逃れんため多く此の群に入りたりといふ。

★五里霧中

ゴリムチュウ
迷うて思案のつかない譬。

★五 倫

ゴリン
人の守るべき五つの道。即ち君臣有義、父子有親、夫婦有別、長幼有序、朋友有信の五つ。「仙醫・長商・陸士」

★語 路

ゴロ
言語又は文句のいひまはしの調子。

★胡 廬

コロ
口を掩うて笑ふこと。孔叢子に「衛君胡廬而笑」とある。

★古 渡

コワタリ
古く外國から渡來したること。「廣高師」

★吳越同舟

ゴエツドウシュウ
敵味方が同席すること。轉じて利害關係の同じ時は敵味方の別なく助け合ふこと。「米工・愛醫」

★託孤寄命

コをタクシメイをヨス
先君が幼君をまもりて國政をとり扱ふことをゆだられたること。「海欄・專檢」

★渾一融

コンイチユウ
すべてが一つになること。「水農」

★閩外之任

コングワイノニン
將軍の職のこと。閩はシキミ、又は城郭の門をいふ。史記に一閩以内者、寡人制之、閩以外者、將軍制之」とある。「高檢」

★權 化

ゴンゲ
假に姿をあらはしたるもの。「水農」

★權 現

ゴンゲン
神様が衆生濟度の爲に、假に化身して此の世に現はれたるもの。「高校・桐工染・金醫」

★混 淆

コンコウ
いりまじること。混も淆もまじる。玉石混淆などいふ。

★言語道斷

ゴンゴダウダン
いふにたへぬこと。もつての外。言語で述べべき道の絶える、言語に述べ難いこと。朱子陸象山に「言語道

斷、思路絶」とある。「東女師・神宮・長商」

★袞 職

コンシヨク
天子の職なれど、又三公の職をいふ。唐の明皇の句に「集賢招袞職、論道命合臣」とある。

★濁 濁

コンダク
けがれにござること。「小商・海軍・字農」

★昆 弟

コンテイ
兄弟のこと。「東高師」

★根 柢

コンテイ
もと。どだい。「高文資・長商・高校・北大・陸士・專檢・外語・小商」

★困 憊

コンバイ
つかれること。疲勞。

★紺屋之白袴

コンヤノシロバカマ
自分のことは却つてしないこと。「東高師」

★袞 龍

コンリョウ
天子の御衣のこと。天子。その御衣には龍のぬひとりがあふ。周禮に「袞龍衣也、衣五章、裳四章凡九、皆繡畫以爲袞」とある。我國の大維禪家尾崎行雄氏が袞龍の

袖に隠るの語を以て時の政府を攻撃されたことは有名である。〔米工〕

★金輪際 コンリンザイ

どこまでもといふこと。大寶積經に「コノ大地ノ厚サ、百六十萬由旬アリテ、ソノ最下底ヲ金輪際トイフ」とある。

★賣婚 コンをウる

嫁いりする時に財貨を収め取ること。史通に「山東、士人尙三閭閨、嫁娶必多取資、人謂之賣婚」とある。

サの部

★齋戒 サイカイ

心身を洗ひ清めて物忌をすること。齋は齊に同じく心を齊へること。戒はモノイミすること。易に「聖人以レ此齋戒以神三明其德」とある。

★猜疑心 サイギシン

ひがみうたがふ心。〔外語〕

★齋宮 サイグウ

歴代天皇が一代毎に伊勢大神宮に奉侍せしめる爲め差

遣される皇女若しくは女王。いつきの宮。伊勢又は加茂におく。〔校高・明專〕

★彩官 サイクワン

繪筆のこと。〔和商〕

★細君 サイクン

人の妻の敬稱。漢書に「東方朔、郎トナル。休日ニ武帝肉ヲ賜フ。朔、先ヅ持チ歸ル。帝、之ヲ責ム。朔曰ク、歸リテ妻君ニ遺ル、何ゾ仁ナルヤ」とあるは戯に自己の妻をいへるなり。

★叢爾 サイジ

小さいさま。左傳に「叢爾國」とある。〔水農〕

★富濟勝之具 サイシヨウノグニトビ

丈夫な足を持つてゐること。濟はわたり歩くこと、勝は景色のよい所。即ち景色のよい所をわたり歩いて見物する具、即ち健脚を持つてゐる義による。〔專檢〕

★宰相中將 サイシヨウチュウジャウ

古の參議をかけた近衛中將。

★才色 サイシヨク

才能と容色のこと。

★采薪之憂 サイシンノウレヒ

薪を採りたるつかれとて、己か病を卑下して云ふ語である。孟子に「有采薪之憂、不能造朝」とある。

★催促 サイソク

うながしせまること。〔海兵〕

★濟度 サイド

衆生の苦患を救ひ成佛の境地へわたらせること。

★采配 サイハイ

昔、大將が士卒を指揮する爲に持ったもの。厚紙を細くたつて之に柄をつけたもの。采配を振るはさしずをする事。

★財閥 ザイパツ

經濟關係の閥族のこと。

★細胞組織 サイボウシキ

生物が細胞といふこまかい球體で組織されてゐるが如く、黨員又は組合員の一數、例へば五人、十人を以て地域的又は工場的な黨又は組合の基礎的中心分子となす制度をいふ。

★淬勵 サイレイ

サの部

つとめはげむこと。〔專檢・上蠶・水産・秋續〕

★淬厲 サイレイ

とぎみがくこと。

★才媛 サイエエン

才智ある婦人のこと。

★塞翁馬 サイワウのウマ

人の禍福の定りなき喻。淮南子人間訓に「塞上ノ翁、ソノ馬ヲ失フ。人々之ヲ弔ス。翁曰ク、何ンゾ福ニ非ラザルヲ知ラムヤト。數月ニシテ、ソノ馬、一駿馬ヲ帶ビテ歸ル。人々之ヲ賀ス。翁曰ク、何ンゾ福ニアラザランヤト。既ニシテ其子之ニ乘リ墜チ、背ヲ折ル。人之ヲ弔ス。翁曰ク、何ンゾ福ニ非ラザルヲ知ランヤト。ソノ後、官、兵ヲ徵シテ壯丁ヲ抽キ、胡ト戦フ。戦死スルモノ多シ。ソノ子、背ヲ折リシ故ヲ以テ、免レテ存シ、遂ニ父子相保ツヲ得タリ。故ニ福ノ禍トナリ、禍ノ福トナル、化、極ムベカラズ。深、淵ルベカラザルナリ」とあるより出づ。元の僧、照晦の詩に「人間萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠」とある上句の意は、人間の事は總て定まらず。禍が福となり福が禍と

なり、轉轉して極まり無しの意。推枕軒は睡櫓が住持たりし仰山の方丈の寢室の名。

★爪 牙 サウガ

頼になり助になる部下。折衝輔佐の臣。爪と牙とは禽獸の身を守るものなるによる。漢書に「將軍者國之爪牙也」とある。「大外・水産・神宮・鹿農・高師」

★蒼 昊 サウカウ

あをぞら。蒼はあを、昊は夏のそら、春のそら。

★糟糠不飽者不務二梁肉

サウカウにアかザるモノはリヤウニクにツトメズ米のかすやぬかできへ充分に食ふことの出来ない貧乏な者は、上等の米や肉のやうな美食を食はうとはつとめないといふこと。

★糟糠之妻 サウカウノツマ

貧賤の時より、粗食を食ひて艱難を共にしたる妻のこと。糟は米のかす、糠は米のぬかなり。糟糠を食ひ、貧苦を同じくして一家を整理して來たる妻の義なり。後漢ノ宋弘、大尉タリシ時、光武帝ノ姉胡陽公主、寡居セリ。帝、コレガ爲ニ贅婿ヲ選バムコトヲ欲シ、詳

臣ヲ觀ルニ、宋弘ニ過ギタルモノ無シ。帝、乃チ姉公主ヲ以テ弘ニ嫁セシメムト欲シ、弘ノ意ヲ探ランガ爲メ問フテ曰ク、貴クシテ交ヲ易ヘ、富ミテ妻ヲ易フハ人情カ。弘曰ク、貧賤ノ交ハ忘ルベカラズ、糟糠ノ妻ハ堂ヨリ下サズト。帝、顧ミテ公主ニ謂ツテ曰ク、事謂ハズト」とある。堂ヨリ下サズとは、富貴になつても之を愛して見棄てざること。

★象 嵌 ザリガン

金銀をちりばめること。「東美」

★蒼 穹 サウキユウ

あを空のこと。蒼はあを、穹は天の穹窿をいふ。「高岡商」

★造 化 ザウクワ

萬物をつくりそだてる天地の造物主。又天地自然の理をいふ。列子に「造化之所始、陰陽之所變、謂之生二謂之死二」とある。造化の樞機に參ずは自然の玄妙に入ること。「明專・商大・米工・千醫・筑鏡・仙工」

★倉 皇 サウクワウ

あはてること。風土記に「大雪被ニ南越ニ、犬皆倉皇トシテ

吠」とある。「鹿農・米工・山商」

★造 詣 ザウケイ

學問又は技藝の深く進むこと。唐書に「咸造詣研選、間游二路南山一、乘二月吟嘯」とある。又人の家を尋ねて行くこと。「米工・千醫・神商・長商・海兵・名工・愛醫大・京法」

★創業易守成難 サウゲフハヤスクシユセイハカタシ

貞觀政要に「太宗、侍臣ニ謂ツテ曰ク、帝王ノ業、草創ト守成ト孰レガ難キカト。房玄齡對ヘテ曰ク、天地草昧、群雄競ヒ起ル、攻メ破ツテ乃チ降シ、戰勝ツテ乃チ尅ツ、此ニ由リテ之ヲ言ヘバ、創業ヲ難シトナスト。魏徵對ヘテ曰ク、帝王ノ起ル、必ラズ衰亂ヲ承ケテ彼ノ昏狡ヲ覆ヘシ、百姓推スコトヲ樂ミ、四海命ニ歸ス、天授ケ人與フ、乃チ難シトナサズ、然レドモ既ニ得ルノ後、志趣驕逸シ、百姓靜カナラント欲シテ徭役休セズ、百姓凋殘シテ修務息セズ、國ノ衰弊恒ニ此ニ由リテ起ル、是レヲ以テ言ヘバ、守成則チ難シト。太宗曰ク、玄齡、昔、我ニ從ヒテ天下ヲ定メ、具ニ艱苦ヲ嘗ム、萬死ヲ出デ、一生ニ遇フ、草創ノ難キヲ見

★象牙之塔 ザウゲノタウ

現實の生活を厭ひ、自分だけの寂しい天地を求めて學問藝術の爲に學術の中に隠れること。

★操觚者 サウコシヤ

文章に携はる者のこと。文士。操はトル、觚は木の札で、昔、紙の無かつた時代に字を書くに用いたもの。詩話に「欣然操レ觚染レ翰」とある。「米工・字農・金工・陸士・福商・外語」

★錚々 サウク

よく練へた鐵の鳴る音の形容。人物のすぐれたるさま。錚々たる人物。

★滄桑之變 サウサウノヘン

世の中の移り變りのはげしいこと。滄海が變じて桑田となる義による。神仙傳に「麻姑謂ニ王方平曰、自

接待^ニ以來、見^ニ東海三變^ノ爲^ニ桑田^ト、向^ニ蓬萊^ト、水乃淺^ニ於^レ往者^一略^ニ中^也、豈復爲^レ陸乎^トとある。〔慶大・高檢・仙工・千薬・和商・六高・專檢²・廣高師・東北大〕

★踏々跟々 サウ〜ラウ〜
足もとのよろ〜するさま。踏跟。〔商船・和商・仙工〕

★桑 梓 サウシ
故郷のこと。桑とあづき。桑は以て蠶を養ふべく、梓は以て器を作るべし。古、每户必らずこの二本を牆下に植ふといふ。子孫が父祖の植ふつたる桑梓を見ると自ら父母を思ふ出す、故に故郷のこととなる。詩經に「維桑維梓、必恭必敬止」とある。〔廣高師〕

★造次顛沛 ザウジテンバイ
僅かの間。造次は忙しい時、顛沛は俄の時。論語に「君子無^ニ終^レ食^ノ之間^ニ遑^レ仁^ト、造次必^ニ於^レ是^ニ、顛沛必^ニ於^レ是^ニ」とある。〔桐工・廣高師・小商・明專・熊工・大分商・海兵・東商大・專檢〕

★操 縦 サウジユウ

自由にあやつり使ふこと。人にも機械にもいふ。〔慶大〕

★草 宿 サウシユク
野宿すること。南史に「單身勤苦、霜行草宿」とある。

★蒼 生 サウセイ
人民のこと。人類が此世に生れるのは草木が青く茂ると同じやうに、地上に生ずるといふ義による。晉書に「安石不^レ出、將如蒼生何」とある。〔水産・海標〕

★草 賊 サウゾク
小盗人のこと。又は百姓一揆。

★相對的 サウタイテキ
相互に關係を有すること。この反對は絶對的。〔海經・鹽土〕

★掃 蕩 サウダウ
はらひつくすこと。惡人などを平げ滅ぼすこと。〔早高・高校・慈賢〕

★裝 置 サウチ
しかけ。〔金工〕

★桑田變 成^ニ碧海^ト
時勢の變遷の甚だしいこと。即ち桑ばたけが何時しか變つて青海となるといふ義による。〔六高・廣高師・專檢〕

★蒼 茫 サウバウ
あをくして廣々としてゐること。

★臧 否 ザウヒ
よしあし。善惡のこと。詩經に「小子未知^レ臧否^ト」とある。臧否を^レ陟^ニ罰^トすは、善はのぼせ惡を罰すること。〔山商・高校・海經・長商・海兵〕

★桑蓬之志 サウホウノシ
男子四方に遠遊する志のこと。禮記の「男子生^レ桑^ノ弧^六、蓬^六矢^六、以射^ニ天地四方^ト、天地四方者男子之所^レ有^レ事也^ト」より出づ。

★草 昧 サウマイ
世の中の開けはじめのこと。草は亂雜、昧は暗。物事の未だ明かならざる時をいふ。易に「天造草昧、宜^レ建^レ侯而不^レ寧^ト」とある。〔盛農・高校・山商〕

★滄 溟 サウメイ

サの部

自由にあやつり使ふこと。人にも機械にもいふ。〔慶大〕

★草 宿 サウシユク
野宿すること。南史に「單身勤苦、霜行草宿」とある。

★蒼 生 サウセイ
人民のこと。人類が此世に生れるのは草木が青く茂ると同じやうに、地上に生ずるといふ義による。晉書に「安石不^レ出、將如蒼生何」とある。〔水産・海標〕

★草 賊 サウゾク
小盗人のこと。又は百姓一揆。

★相對的 サウタイテキ
相互に關係を有すること。この反對は絶對的。〔海經・鹽土〕

★掃 蕩 サウダウ
はらひつくすこと。惡人などを平げ滅ぼすこと。〔早高・高校・慈賢〕

★裝 置 サウチ
しかけ。〔金工〕

あをうなばらのこと。海。〔水産・小商〕

★草莽之臣 サウモウノシン
仕官せずして野に居る者のこと。草莽はくさむら、民間。孟子に「在^レ野曰^ニ草莽之臣^ト」とある。〔水産・廣高師〕

★臧 物 ザウモツ
まひなひ又は他の不正の手段によつて得た品物のこと。贓品も同じ。〔仙工〕

★桑 門 サウモン
僧侶のこと。沙門に同じ。又世捨人のこともいふ。梵ニ沙門トイヒ、或ハ桑門トイヒ、唐ニ動息トイフとある。〔高校・日醫・桐工・横專・廣高師〕

★桑 榆 サウユ
日暮のこと。轉じて西方の意となり、人の晩年に喩へることもある。唐書に「筋骨將^ニ盡^ト、桑榆且^ニ迫^ト」とある。

★創 立 サウリツ
初めてたてること。創設。〔東水産〕

★倉廩實 則知^ニ禮節^ト
サウリンミちてレイセツをシ

人は生活の安定を得て始めて禮節を知る者であるといふこと。倉廩は米ぐら。管子に「倉廩實則知禮節」、衣食足則知榮辱」とある。〔水産〕

★莊園 サウエン

しもやしきのこと。別荘。シヤウエンは租税・課税を免れ、國司の治權以外に立つた土地。

★盛場 サカリバ

人の寄集つてにぎやかな場所。〔廣高師〕

★防人 サキモリ

邊要の地を守る爲に派遣した兵士。〔東北工・普文・東北大〕

★索引 サクイン

書中の事項を探し出す爲の案内。〔高松商・松山商〕

★錯誤 サクゴ

あやまり。李白詩に「流俗多錯誤」とある。

★嘖々 サクサク

口々に嘖して稱賛おこさるさま。好評嘖嘖などいふ。

★横梁賦詩 サクをヨコタへてシヲアサ

〔長商・高檢〕

★蹉跎 サダ

つまづくさま。又不運にして志を得ないこと。曰く「宿昔青雲志、蹉跎白髮年」と。

★刹到 サツタウ

すさまじい勢で押寄せること。

★左祖 サタン

彼を捨て、此に與すること。助勢すること。説苑に曰く「齊ニ一女アリ、二家コレヲ求ム。ソノ父、女ニ語ツテ曰ク、東家ヲ欲スレバ左祖セヨ。西家ヲ欲スレバ右祖セヨト。ソノ女左右祖シテ曰ク、願ハクバ東家ニ食シテ、西家ニ宿セム。東家ハ富ミテ醜、西家ハ貧ニシテ美ナルヲ以テナリ」とあり、又職國策に「王孫賈曰ク、淳齒、齊國ヲ亂シテ閔王ヲ殺セリ。我ト與セムト欲スル者ハ右ヲ祖セヨ」とあり、又史記に「諸呂事ヲ用ヒテ、權ヲ擅ニシ、亂ヲ爲サント欲ス。大尉周勃、軍門ニ入ル。行々軍中ニ令シテ曰ク、呂氏ノ爲ニスルモノハ右祖セヨ、劉氏ノ爲ニスルモノハ左祖セヨト。軍中皆左祖シテ劉氏ノ爲ニス」とある。左祖の語源は頗る古く、普通に單に周勃の事を引けども、必らずし

軍中にて刀を小脇に挟みて詩を賦すといふことにて、英雄の胸中浩達なること。

★左契 サケイ

證文のこと。契を二つに分けて、左右とし、一片を與へて後日の證據とす。

★左顧右盼 サコウウエン・サコイウエン

首を左右に向けてあちこち見まはすこと。顧盼だけ出ることもある。〔外語・醫學・大外・京城工〕

★左衽 サジン

ひだりまへ。野蠻人の衣服の着方。

★流石 サスガ

さうはいふものゝ。音に聞えてゐる丈けあつて。迫にと響く。〔陸士・水産・山商・高校・醫學・廣高師〕

★左遷 サセン

官位をおとされること。右を上となし、左を下とす。故に左に遷すは官位をおとすこと。〔金業・米工〕

★沙汰 サダ

官府のさしづ。通知。沙汰の限りは是非を判断すべき分限。〔廣高師・京城醫・大醫大・陸士・熊醫〕

も然らず。祖は肌をぬぐこと。〔仙醫・山商・長商・水産〕

★刷新 サツシン

舊態を一新して改めること。〔米工・千間〕

★撒水 サツスキ

水をまくこと。サンスキとも慣用されてゐる。撒水夫

★殺青 サツセイ

竹を火にあぶつて青みを去ること。又書物のこと。古、紙なくして竹の札を用ひて字を書くに、書き易く且つ虫くひを防ぐ爲に火にあぶつて青みを去りしによる。

★左提右挈 サテイウケイ

互に助け合ふこと。左にひつまぎ、右にひつまぎ義。漢書に「以二兩賢王二左提右挈」とある。〔横商・水産〕

★蹉跌 サテツ

つまづくこと。失敗。

★里内裏 サトダイリ

皇城の中に一時假に設けた皇居のこと。里第を内裏とする義による。〔專檢〕

★差配 サハイ

所有主に代つて貸家又は貸地の取締をすること。

★瑣尾 サビ

勢の微弱なること。瑣は細、尾は末なり、小なり。詩經に「瑣兮尾兮、流離之子」とある。瑣細はこまかいこと。

★遮莫 サモアラバアレ

どうであらうともよい。「遮莫家郷憶二遠征」の語あり。「東高師・愛賢・高松商」

★座元 ザモト

劇場其他興行場の持主。「廣高師」

★作用 サヨウ

はたらきといふこと。「和商」

★猿樂 サルガク

戯に演ずる滑稽な動作のこと。又後世能樂の源をなした古舞樂。散樂も同じ。「専檢」

★猿に烏帽子 サルにエバウシ

柄にもないこと。「九葉」

★散佚 サンイツ

ちりうせること。散逸も同じ。「女高師」

★三界 サンガイ

欲界と色界と無色界、即ちこの世のこと。又過去・現在・未來の三界のこと。

★三更 サンカウ

夜を五更に分ち今の八時が初更にして、二時間毎に二更三更となる。故に三更はその真中にて夜の十二時なり。

★三綱五常 サンカウゴジヤウ

人の守るべき大きな道德。三綱とは君臣・父子・夫婦の三つの間。綱はおほづなで、禮記に「君爲二臣之綱一、父爲二子之綱一、夫爲二妻之綱一」とある。五常とは仁・義・禮・智・信のこと。「専檢・陸士・秋鏡・濱工」

★慚愧 サンキ

はぢること。「高校」

★三軍 サンゲン

大軍のこと。一軍は一萬二千五百人。周禮に「天子ハ六軍、諸侯ハ三軍、次國ハ二軍、小國ハ一軍」とあるも、三軍は必ずしも人數に係らず、大軍の義に用ゆ。

★讒言 ザンゲン

事實を虚構して人を悪くいふこと。

★三公 サンコウ

支那の周代では大師・大傅・大保のこと。漢では大司馬・大司徒・大司空のこと。唐では大尉・司徒・司空のこと。我國では太政大臣・左大臣・右大臣のこと。

★三才 サンサイ

天・地・人をいふ。才は裁なり、萬物を裁制するはたらきあるの義による。

★三史 サンシ

史記と漢書と後漢書のこと。「京城大」

★三秋 サンシュ

初秋・仲秋・晩秋のこと。又は三年の意。三秋の思は思慕の情の切なるもの。

★三舍 サンシヤ

軍は日に三十里を行きて舍す、故に舍は三十里、三舍は九十里(軍隊三日の道程)なり。三舍を避くといへば、敵すること能はずして後すざりすること。「外語」

★三尺秋水 サンジヤクノシウスキ

かたなこと。三尺は長さ、秋水は秋水の如き色といふ義による。「陸士・商船」

★三從 サンジユウ

女の三つの道で、家に在つては父に従ひ、嫁しては夫に従ひ、夫が死んで老いては子に従ふこと。

★蠶食 サンシヨク

蠶の桑の葉を食ふが如く、國土を片はしより、少しづつ奪ひ取ること。史記に「蠶食三諸侯二竟成二始皇」とある。「東高蠶・東北」

★散人 サンジン

役に立たぬ人のこと。又世事を棄て、閑なる人のこと。散は不才の義なり。書言故事に「唐陸龜蒙、以レ舟載二茶籠筆床釣具二往來二江湖一、號二江湖散人一」とある。

★斬新 ザンシン

甚だ新しいこと。斬新奇抜は甚だ新しくて變つてゐること。この場合斬は誤なり。「米工・長商・桐工・千園」

★三省 サンシヤイ

一日の内に三度吾が身を省みて過失のなきやう注意す

ること。三省と雖も三度に限る意にあらざ、たびく
と廣義に解するもよし。論語に「吾日三省吾身」と
ある。〔小商〕

★三世相 サンセサウ

過去・現在・未來の三世に亘る姿をあらはしたるもの。
〔同志〕

★三遷 サンセン

孟子の母が孟子を教育する爲に住所を三度遷りしをい
ふ。列女傳に「孟子之母、其舍近墓孟子之少也、嬖
爲墓間之事、踊躍築埋、孟母曰、此非所以居子
也、乃去、舍市、其嬉戲爲賣街、孟母曰、此非所以
居子也、乃徙、舍學宮之旁、其嬉戲乃設豆、拊
籥進退、孟母曰、此真可以居子矣、遂居之」とある。

★殘喘 ザンセン

死にかゝつた命のこと。餘命。

★嶄然見ニ頭角 ザンセントウカクをアラハス

きは立つて人にすぐれてゐること。嶄然は山の高くぬ
きん出る貌、頭角は頭のさき。韓愈の柳子厚墓誌銘に
「子厚、少年ト雖モ、已ニ自ラ成人ノ如シ。能ク進士ノ

第ヲ取り嶄然頭角ヲ見ハス」とある。〔高校・八高・海
兵・陸士・高松商・北大〕

★三多之辨 サンタノマン

文章に上達する三つの條件。即ち多く讀むこと、多く
作ること、多く考へること。曰く「爲文有三多、看
多、做多、商量多也」とある。

★三嘆 サンタン

幾度も感心してほめること。

★慘憺 サンタン

いたましいさま。

★慘澹 サンタン

意を極めて考へること。苦心慘澹などいふ。〔長商・海
軍〕

★三傳 サンデン

孔子の作りし春秋三傳の略で、左氏傳、公羊傳、穀梁
傳の三つのこと。

★竄匿 ザンタク

にげかくれること。

★讒謗 ザンバウ

そしること。韓愈詩に「愛才不擇行、觸事得
讒謗」とある。〔東商船・海兵・仙巖〕

★酸鼻 サンビ

酸酷なることを傷ましく感ずること。ナマリ泣きする
義より轉ず。

★三伏 サンブク

極暑の時節のこと。夏至の後第三回目の庚の日を初伏、
第四の庚の日を中伏、立秋の後の第一の庚の日を末伏
とす。この三伏の頃は最も暑き時であるによる。三伏
の夏などいふ。〔専檢〕

★三昧 サンマイ

一事に心を專一にすること。金剛經註に「道家云三眞
一、儒者云三致一、釋氏云三昧」とある。〔山商・明
專・山商・専檢・臨教〕

★三餘 サンヨ

讀書に最もよいといふ冬と夜と陰雨の時のこと。魏略

シの部

★三猿主義 サンエンシユギ

見ざる聞かざる言はざる主義のこと。

★士 シ

(1) 學徳のある者。士君子、名士。(2) ものふのこと。
武士。(3) 官吏のこと(周代では大夫の次位)。(4) 將校に
附屬して戦争に従事する者。士卒。(5) 兵卒を指揮する
者。士官。(6) 男子の尊稱。

★緇衣 シイ

僧の衣、墨染の衣のこと。

★四友 シイウ

筆・墨・紙・硯のこと。

★弑逆 シイギヤク・シギヤク

臣子が君父を殺す大逆のこと。〔水産〕

★徒倚耽戀 シイタンレン

さまよひて耽りしたふこと。〔横商・京城醫〕

★秋毫 シウガウ

すこし、わづかのこと。秋には獸の毛が非常に細くなる故による。史記に「三人言レ利、分ニ秋毫」とある。〔水産・海欄・外語・京城醫・専檢〕

★祝儀 シウギ

祝意を表はす爲めに贈る金銭・品物のこと。〔京法・外語〕

★蒐集 シウシフ

あつめよせること。蒐輯も同じ。〔水産・福岡商・福島商・和商〕

★周章狼狽 シウシヤウラウバイ

あわてうろたへること。文選に「東西周章」とある。〔水産2・東商・鹿農・京蠶・高資・米工〕

★袖手傍觀 シウシユバウクワン

ふところ手をして何もしないで見てゐること。〔外語〕

★秋水 シウスキ

刀の異名として用ふ。秋の水の清めるに喩ふ。三尺の秋水とも云ふ。越絶書の「劍色如秋水」より出づ。

★周旋 シウセン

事を行ふにあちこちとりもつこと。〔盛農・明專〕

★秋波 シウハ

美人の媚を呈する眼元を形容していふ。成語考に「横指如三春筍」、媚眼若「秋波」とある。

★開愁眉 シウビをヒラク

心配して居た事が去つて安心すること。

★柔能制剛 ジウヨクガウをセイす

弱い者が却つて強い者を支配すること。柔は徳なり、剛は賊なり。老子に「柔勝レ剛弱勝レ強」とある。〔海經・海兵・陸士〕

★羞惡 シウヲ

自分の不善をばぢ、人の不善を惡むこと。孟子に「羞惡之心、義之端也」とある。〔水産・長商〕

★四恩 シオン

天地・國王・父母・衆生の四つの恩をいふ。佛書に出づ。〔山商〕

★齒牙にかけぬ シガにかけぬ

何んとも問題にしないこと。顧りみぬこと。〔東北大・新醫〕

★施行 シカウ

しき行ふこと。

★嗜好 シカウ

このみ、すきといふこと。〔神商大〕

★刺客 シカク

不意に人をだましうちにする者。暗殺者。〔長商〕

★耳學 ジガク

耳から聞く學問。受賣の學問のこと。宋書に「衆人古今ヲ見ルト雖モ、下官ノ耳學ニ如カザルナリ」とある。

★志學之年 シガクノトシ

十五歳のこと。論語に「吾十有五而志ニ於學」とあるによる。〔専檢・海欄〕

★自我之實現 ジガノジツケン

自己が本來有する所の性能を外部に現實に發揮するこ

と。類語に自己實現・自我發展、自我充實などある。

〔廣高師2〕

★自家撞着 シカドウチヤク

己の言行が前位衝突して辻つまのあはぬこと。撞はツキアタル、着は助辭。〔長商〕

★逐鹿者不見山 シカをオふモノはヤマナミズ

利益に急なる者は道理を考へざるに譬へる。虚録堂に「逐鹿者不見山、攫金者不見人」とある。〔山商・水産〕

★士氣 シキ

人間の意氣のこと。

★敷島之道 シキシマノミチ

和歌の道のこと。又日本神道の道。〔専檢・山商・國學〕

★色代 シキダイ

挨拶をすること。〔日醫・陸士〕

★自給自足 ジキフジツク

自分に入用なるものを自分で作ること。〔陸士〕

★自彊不息 ジキヨウヤマズ

自ら勉めてやまないこと。〔専檢・關大〕

★四 苦シク

生・老・病・死の四つの苦しみ。法華經に「生老病死、四苦也」とあるによる。

★時 雨シグレ

秋冬の頃断續して降る雨のこと。時雨はほどよい時に降る雨。孟子に曰く「君子之所^ナ以^テ教^フ者五、有^リ如^キ時雨化^ス之^者上」と。「神宮・神商・外語・旅工」

★死灰復燃

シクワイマタモゆ

勢を失ひし者、再び起ること。火の氣の無い灰がまた燃え出した義による。漢書に「安國法ニ坐シテ罪ニ當ル。獄吏、安國ヲ辱カシム。安國曰ク、死灰獨リ復タ燃エザラン。獄史曰ク、然ラバ則チ之ニ尿セント」とある。「専檢」

★枝 梧シゴ

さからひ、くひちがふこと。史記に「諸將解^シ服^ヲ莫^ク敢^テ枝^梧」とある。「陸士海樓」

★指 顧シコ

ゆびさし見渡すこと。又指顧の間は近くにある義なり。「高商・愛賢」

★事後承諾

シゴシヨウダク
断斷の處置をなしたことを、後で關係者が承認すること。

★仔 細シサイ

こまかいわけ。事由のこと。「海兵・六高」

★思 索シサク

考をめぐらすこと。「高松商」

★四 至シシ

四方の遠い國々のこと。「東農教」

★孳 々シシ

つとめはげむさま。孜孜。孟子に「鷓鴣^ニ起^ル孳^々爲^レ善^者舜^之徒^也」とある。

★獅子吼

シシク
雄辯なるを形容する辭のこと。獅々が一度吼ゆれば百獸を威服させるが如く、佛が一度法を説けば惡魔も皆服せられるといふ譬から轉じた言葉である。即ち涅槃經に曰く「一切禽獸聞^テ獅子吼^ニ水性之屬潜^ニ沒深淵^ニ陸行之類藏^ニ穴^ニ飛者墮落云々」とある。「盛農」

★獅子身中之虫

シシシチヌウノムシ

主人又は味方の害をなす者。即ち獅子の身中に居ながら獅子の身に害をなすものの義による。

★自 若ジジャク

落ち付いた形容。泰然自若。史記に「魯人曾參ト姓名ヲ同シクスル者アリ。人ヲ殺セリ。人其ノ母ニ告ゲテ曰ク、曾參人ヲ殺スト。其ノ母織ルコト自若タリ」とある。

★錮 銖シシユ

極めて少きこと。十釐を釐とし、十釐を銖とし、二十銖を兩とし、八兩を鎰とす。

★自 主ジシユ

他の干渉を受けず、一切のことを自分を主として處理すること。自主外交などいふ。「仙工」

★私 淑シシユク

わが敬慕する所の人あるも、或は時相隔り、或は居相遠く、その門に入ること能はず。因つて唯だその道を聞き、その書を読み、其人を慕ひ、又師として我が道を修めること。孟子に「予未^レ得^レ爲^ニ孔子^之徒^也、予私^ニ淑^諸人^ニ」とある。「福商・桐工・名工・小商・廣高

★耳 順シシユン

六十歳のこと。論語に「六十而耳順」とあるに本づく。「富業・東商大」

★諮 詢シシユン

意見をとりはかること。「大工・水産」

★四 書シシヨ

大學・中庸・論語・孟子の四つの書のこと。人間社會の眞理正道を書教へたもので、かならず讀むべきである。五經とは易經・書經・詩經・春秋・禮記。「京城大・専檢」

★爾 汝ジジヨ

人を輕侮していふ語。孟子に出づ。又爾汝之交はキサマ、オレと呼びあふ親友の間柄をいふ。

★耳 食ジシヨク

學問して識得せしにあらざして、他人の説に妄りに従ふこと。きゝがくもん。耳學。「外語・高校」

★紫宸殿

シシンテン
宮中の正殿のこと。「専檢・海兵・陸教」

★市井 シセイ

市町をいふ。四達して井の字の如し、よりて名とすと
いふ。同語に「處^{ハトスル}商^カ 就^カ市井^ニ」とある。「大谷大」

★四姓 シセイ

源氏・平氏・藤原氏・橘氏の四つの姓のこと。「東商
大」

★四聲 シセイ

平聲・上聲・入聲・去聲の漢字の四つの韻。漢詩を作
る時必要である。

★蚩笑 シセウ

あなどり笑ふこと。「外語・明專」

★咫尺 シセキ

離の極めて近い距ること。周代の尺度で咫は八寸、尺は
十寸。「水産・神宮・海欄・商大」

★使節 シセツ

天子の使者、つかひ。「金業」

★自然之啓沃 シセンノケイヨク

天然自然が吾人の心にそよいてくれること。啓沃は啓
經に「啓^{イナ}ニ乃心^{チテ}沃^メニ朕心^ニ」から出た語である。「仙

★自然淘汰 シセンタウタ

生物が競争に勝つ者は生存し、然らざる者は滅亡する
こと。人為淘汰の對。「名工・専檢」

★使嗾 シソウ

そよのかすこと。けしかけること。「名工・秋鏡」

★至尊 シツン

天子のこと。「女高師」

★時代錯誤 ジダイサクゴ

時代にそはぬこと。舊弊なことを云ふ者に浴せかける
罵の言葉。「廣高師・外語・滿教専・臺農・海經・成蹊高
陸士・臨教・臨教・桐工」

★事大思想 ジダイシサウ

強大なるものに事へるのが得策だとする考へ。事大主
義。「盛農」

★時代思潮 ジダイシテウ

時代の思想のながれ。「山商・金業」

★指彈 シダン

つまはじきすること。「東北大」

★絲竹 シシチク

樂器の總稱。絲は琴、琵琶の類、竹は笙笛の類。「大
外」

★七字之題目 シチジノダイモク

商無妙法蓮華經の字。「東商大」

★自重 ジチヨウ

己の行をつゝしみて輕々しくせぬこと。自愛。「仙工」

★司直 シチヨク

公平正直を司る人の義で法官、裁判官などのこと。漢
書に「寬饒正^{スハ}色^ハ、國之司直^{ナリ}」とある。

★執拗 シツアフ

ひつこいこと。「海樓・明專」

★十干 ジツカン

甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の十のえと
のこと。十二支は子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・
申・酉・戌・亥の十二。「京蠶・東商大」

★失脚 シツキヤク

諸事に失敗して殆んど立つ能はざる如きこと。
シツク

★水のしたたり。點滴。「外語・東高師」

★媿シツケ

子供のしつけのこと。「東高師」

★失業問題 シツゲフモンダイ

職業をなくする者についての問題。「成蹊高」

★失言 シツゲン

言葉のいひをこなひ。戰國策に「困^ニ於思慮^ニ、失^ニ言^ニ、
於君^ニ」とある。「横附」

★實現 ジツゲン

實際にあらはすこと。「名工」

★室如懸磬 シツケンケイのゴトシ

音程のつきること。「東亞同」

★桎梏 シツコク

身の動かざるやうになりし足かせ手かせなり。桎は足
にはむる械、梏は手にはむる械なり。束縛すること。
孟子に「桎梏^ニ、死者非^ニ正命^ニ也^{ナリ}」とある。「神商
大・千岡・和商・東同・名商・山商・高校」

★實存 ジツザイ

事物は吾人の認識する否とに拘らず實際に存在して

ゐること。

★執事 シツジ

家政を掌る家來のこと。又人を尊びてその名を指さず取次の人迄といふ意より轉じ貴人の代名詞とする。

★失笑 シツセウ

ふきだすこと。〔愛憎〕

★實踐躬行 ジツセンキウカウ

實際に身に行ふこと。〔神商大〕

★失踪 シツソウ

行方をくらますこと。逐電。〔和商〕

★失墜 シツツキ

失ひおとすこと。左傳に「群臣以レ死守レ之弗敢失墜」とある。〔海軍・山商〕

★櫛比 シツビ

くしの齒のやうに立ち並ぶこと。比は並なり。「其比如レ櫛」より出づ。〔盛農〕

★疾風知勁草 シツブウケイサウ

意志の堅固な者は困難に遭遇した場合によく知れるといふこと。強い風が吹くと強い草が目立つとの意によ

る。〔商船・神商大〕

★疾風迅雷 シツブウジンライ

非常に速いこと。敏捷なること。

★櫛風沐雨 シツブウモクウ

風雨のいとひもなく艱難に堪へ忍ぶこと。風に髪を梳り、雨にぬるゝ義による。莊子に「腓無レ股、脛無レ毛、沐ニ甚雨一櫛ニ疾風一、置ニ萬國」とある。〔水産・北大・専檢・東亞同〕

★執柄 シツペイ

政權をとること。又舞政闘白の異稱。

★質撲・質朴 シツボク

かざりのないこと。撲と朴は同字にして、ありのままのこと。〔西南・和商〕

★思潮 シテウ

思想のながれ。〔神宮〕

★四天王 シテンワウ

天地を守護する帝釋の外臣で、東方は持國天、南方は增長天、西方は廣目天、北方は多聞天の總稱。又は配下の中で武勇の最も勝れた四人のこと。〔廣高師〕

★緇徒 シト

僧侶のこと。緇は墨ぞめの衣、即ち黒衣を着てゐるともがらの義による。〔廣高師・外語〕

★舐犢 シトク

犢は子牛、母牛が子牛を舐めて愛すること。子の愛に溺れたるものを舐犢の愛といふ。

★品定 シナサダメ

優劣を批評すること。品評。〔専檢・醫專〕

★指南 シナン

學藝などを指導すること。史記に「支那ノ周ノ時、越裳氏來貢ス。歸ルニ其ノ路ヲ忘ル。周公方角ヲ指ホスル指南車ヲ作り與ヘテ、其國ニ歸ラシム」とあり、張衡の文に「予習レ非而遂迷也、幸見レ指南於吾子」とある。〔米工〕

★老舗 シニセ

代々續いた古い店のこと。〔和商〕

★削鋸 シノギケツ

烈しく争ふこと。鋸は刀の身の兩側に通つてゐる筋で刀で烈しく斬り合ふ義による。〔明專・陸士〕

★東雲 シノノメ

夜のあけがた。〔蒲工〕

★衝篠 シノをツク

雨が勢はげしく降る譬。篠竹を束れた様に勢はげしく降る雨の義なり。〔高校〕

★士爲知己者一死 シ

男子たる者は善く己の心を知つてゐる人の爲には身命をなげうつても事を仕遂げるものであるといふこと。史記に「士爲知己者一死、女爲己者一容」とある。

★師走 シハス

舊の十二月の異稱。年果つの義による。〔東高師・高資〕

★資稟 シヒン

生まれつき。天性、資性。〔小商・高校〕

★十善之君 シフセンノキミ

天子の稱。殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・貪欲・嗔恚・愚癡の十惡を犯さざるを十善といひ、この十善を全うするもの、天子に生るといふによる。〔專

檢

★集大成 シウタイセイ

古來の物事を集めて一つのものに完成すること。集成。
〔廣高師2〕

★自負 ジフ

自分の才學などを誇ることを。史記に「心獨喜自負」とある。

★雌伏 シフク

メンドリの雄鳥にしたがふ如く、他のものに屈服して下の位置にかんんでゐること。後漢書に「大丈夫當ニ雄飛一安能雌伏」とある。〔山商〕

★拾収 シフシウ

とりまとめること。〔山商〕

★執著 シフチャク

物事に深く思ひ入ること。〔山商・北大・外語・陸士・名商〕

★十八番 ジフハチベン

得意の藝又自慢する事柄のこと。俳優市川家に傳へてゐる十八種の得意の狂言の意より轉ず。〔神宮・法大〕

★什物 ジフブツ

日川の道具。什器。又は大切な秘藏のもの。〔愛醫〕

★時文 ジブン

現代支那で行はれてゐる文章のこと。

★斯文 シブン

文學、文教のこと。孔子を祭る東京本郷湯島の聖堂内に斯文會なる會存在す。

★自暴自棄 ジボウジキ

自ら身を害し自ら身をすてること。やけになること。〔神商大・名工〕

★新發意 シボチ

シンボチとも讀む。新に佛門に入つた人。〔高校〕

★揣摩 シマ

自分の心で他の心をおしはかること。情を揣り意を摩する義による。推測。臆測。揣測も同意なり。〔仙醫・二高・京大2・海軍2・京城工・名工2・千園・大工・高貴・京城大・陸士・熊工・水産〕

★始末書 シマツシロ

過失のあつた時、其の原因・結果の顛末を記して差出

す文書のこと。

★四民 シミン

士・農・工・商のこと。〔女高師〕

★使命 シメイ

使としてのつとめ。役目。〔和商・外語・山商〕

★注連繩 シメナハ

神前其他清淨地を區劃する繩のこと。〔外語・高校〕

★四面楚歌 シメンソカ

四方が皆敵に圍まれたること。又は周圍がみな反對者ばかりの意。十八史略に「楚ノ項羽ノ軍ガ漢ノ高祖ニ垓下ニ圍マレシ時、四面ノ漢軍ノ中デ楚歌ヲ歌フ者多キヲ聞キテ、項羽乃チ大ニ驚イテ曰ク、漢既ニ楚ヲ得タルカト、夜起ツテ帳中ニ飲ス。美人アリ、名ハ虞、常ニ寵セラレテ從フ。駿馬アリ、名ハ騶、常ニ之ニ騎ル。是ニ於テ項羽乃チ悲歌慷慨シテ、自カラ詩ヲ作り曰ク、力拔レ山蓋シ世、時不利兮離不レ逝、離不レ逝兮可ニ奈何、虞兮虞兮奈レ若何。ト。歌フコト數回、美人之ニ和ス。項羽涙下ルコト數行、左右皆泣イテ、能ク仰ギ視ルナシ」と。

★駟不及舌 シモシタにオロバズ

一旦口外した言は四頭だての馬車で追ひかけてもとり返しがつかぬとのこと。即ち言論の慎しむべきことをいふ。この語は論語に「子貢曰、駟不及舌、蓋言語不レ慎則不レ悔ニ。人感情、損己之品位、君」に出づ。〔仙醫・海兵・愛醫・廣高師・専檢2・熊醫・福商・京大2・熊工・東高師・名工〕

★斲養 シヤウ

(1)薪をとり炊事すること。(2)身分のいやしいもの。

★攘夷 ジヤウイ

外國人を國外に追ひはらふこと。〔神商大・陸士〕

★尙友 シヤウイウ

尙は上なり、進み上りて古人を友とする義。孟子より出づ。〔日商〕

★相印 シヤウイン

宰相の印のこと。〔専檢・外語・東高師・武専〕

★障碍物 シヤウガイブツ

邪魔物のこと。〔海欄〕

★城下之盟 ジヤウカノメイ

自分達の居城の下に推し寄せられて後に和議を講ずること。國家を保つ者の尤も恥とするところである。左傳に「城下之盟、有以國斃、不能從也」とある。

★商鑑不遠 シヤウカントホカラズ
國家滅亡の前例は眼前にありとの誠。商は王國の名、殷に同じ。鑑は手本。殷鑑不遠と同じ。同部を見よ。

★猖獗 シヤウケツ
凶徒、傳染病等悪いもの、勢の盛んなること。〔高校・七高・北大・廣高師〕

★冗語贅説 ジヤウゴセイセツ
不必要な言説のこと。冗はむだ。〔明專〕

★商賈 シヤウコ
商人のこと。賈は坐賣のこと。〔千巒・大商〕

★相國 シヤウコク
宰相のこと。又太政大臣をもいふ。〔桐工樂・法政大〕

★城狐社鼠 ジヤウコシヤツ
城狐も社鼠も共に君側に居る小人、奸人に喩ふ。説苑に「狐ハ人ノ攻ムル所ナリ、鼠ハ人ノ燭ス所ナリ、臣

未ダ嘗テ糧孤ノ攻メラレ、社鼠ノ燭セラレシヲ見ザルナリ。何ントナレバ託スル所ノ者然ルナリ」とある。晉書に「王敦謂レ鯁曰、劉隗奸邪、將スレ危ニ社稷、吾欲レ除ニ君側之奸、如何、對曰、隗誠始レ禍、然城狐社鼠也」とある。

★常算 ジヤウサン
平凡な計のこと。〔高校・陸士・大醫大〕

★上梓 ジヤウシ
書物を出版すること。文字を梓の木版に上せる義による。〔麻農・盛農〕

★將相 シヤウシヤウ
大將と宰相のこと。晉書に「此兒容貌志氣將相之器也」とある。〔大東・神宮〕

★情緒 ジヤウシヨ
思ひにつれて起るかんじ。〔水農・和商〕

★庠序 シヤウジヨ
學校のこと。庠は老を養ふ義、序は射を習ふを義とす。禮の學記に「古之教者家有庠、黨有序、衛有庠、國有學」とある。〔大商・國大〕

★精進 シヤウジン

餘念なく佛道を修めること。又身を淨めものいみすること。俱舍論に「無雜故精、無間故進」とある。

★將帥 シヤウスキ
軍隊を率ゐる者のこと。〔商船・專檢〕

★唱道 シヤウダウ
となへ始めること。〔山商・陸士・廣高師・秋嶺〕

★常套 ジヤウタウ
ありふれた普通のこと。套、套語。常套手段。〔陸士・專檢〕

★情致 ジヤウチ
おもむき。

★常住 ジヤウジュウ
いつも變らぬこと。〔大分商・水農・和商〕

★象徴 シヤウチヨウ
かたどり現はすこと。〔女高師・早大・東美・滿教專〕

★情報 ジヤウハウ
事情を具して様子を知せること。

★尙武 シヤウブ
シの部

武道をたつとぶこと。尙文の對。〔海嶺・九樂〕

★不設城府 ジヤウフをモウケズ
他に對して隔てなく打解けて談じ合ふこと。城府は區域である。〔福商・仙工〕

★上臈 ジヤウラウ
すべて身分の貴い婦人の稱。貴婦人。〔陸士〕

★商量 シヤウリヤウ
はかり考へること。きりもりすること。易經に出づ。

★莊園 シヤウエン
平安朝以後、皇族・公卿及び神社・佛閣等の所有に屬し、租税・課税より免れ、國司の治外法權になつた土地のこと。〔東北大〕

★釋迦說法 シヤカにセツボウ
無駄なこと。〔海兵〕

★惹起 ジヤクキ
ひきおこすこと。〔女高師〕

★社會奉仕 シヤクワイホウシ
世間に對する務めのこと。〔水農・桐工・法大・千園〕

★社會之木鐸

シヤクワイノボクタク
世の中の指導者。木鐸は木の舌のついてある鈴で、支那で官吏が人民に命令・法律などをしめす時に鳴らしたものである。轉じて學者等の世を指導する者に譬へて用ひる。〔專檢・神宮〕

★借 款

シヤククワン
借金のこと。又は借金の條件。〔廣高師・築工・高松商〕

★弱 冠

シヤククワン
二十歳のこと。禮記の「人生十年曰レ幼、二十曰レ弱、冠。三十曰レ壯、有レ室。四十曰レ強、而仕」より出た語。〔陸經・神商〕

★錫 仗

シヤクシヤウ
僧徒修驗者の携ふる杖のこと。頭に數個の環あり、行くに地を突きて響をなさしめ惡蟲毒獸を撃むといふ。

★弱肉強食

シヤクニクキヤウシヨク
弱きものゝ肉は、強き者の餌食となるといふ義にて、弱者の強國に併合せらるゝをいふ。韓愈の文に「弱之肉、強之食」とある。

★杓子定規

シヤクシヂヤウギ

他に適用し難い標準を以て他を律しようとする事。

昔の杓子の柄は曲つてゐた故による。〔海兵〕

★綽 々

シヤクシヤク
ゆつたりとして餘裕あるさま。孟子に「綽々然、有餘裕」とある。〔明尊・東高師・熊工〕

★釋 然

シヤクセン
疑のとけるさま。〔上智大〕

★綽 然

シヤクセン
ゆつたりとしたさま。

★釋 放

シヤクハウ
拘禁又は束縛を解いてゆるしはなつこと。

★釋 明

シヤクメイ
ときあかすこと。

★寂 滅

シヤクメツ
物が自然に滅びうせること。死。〔北大〕

★借 問

シヤクモン
假に問ふこと。〔高松商〕

★雀 躍

シヤクヤク
雀の飛び廻るが如く躍り騒ぐこと。非常に悦びたる時

の様子。欣喜雀躍など多く用ふ。

★綽 約

シヤクヤク
柔媚にして容姿の美しき貌。莊子に「神人アリ、肌膚冰雪ノ若ク、綽約トシテ處子ノ若シ」とある。處子は處女の義。

★酌 量

シヤクリヤウ
事情をくみとつて適宜の加減をすること。情狀酌量。

★枉 尺直 尋

シヤクをマゲテヒロをナホス
大を爲すために小を犠牲に供すること。即ち八尺(尋)を直くする爲めには一尺を曲げるを厭はぬ義による。〔明尊・專檢〕

★藉 口

シヤコウ
口實を設けて言ひわけをすること。〔盛農〕

★社 稷

シヤシヨク
國家のこと。社は土の神、稷は穀物の神。國には必ず社と稷とあり、故に國家を社稷といふ。「米工・東美・金工・仙醫・外語・山商?・廣高師?・水産・陸士・東商大・醫專・横商」

★社稷之臣

シヤシヨクノシン
國家の安危に任ずる臣のこと。詩に「中外衆レ權、社稷臣」とある。〔陸士・桐工・東商大〕

★社 鼠

シヤツ
君側の奸人のこと。論苑に「齊ノ桓公、管仲ニ問フテ曰ク、國何ヲカ患トス。管仲對ヘテ曰ク、彼ノ社鼠ヲ患フト。桓公曰ク、何ノ謂ゾト。管仲對ヘテ曰ク、夫レ社ハ木ヲ東ネテ之ヲ塗ル。鼠、因ツテ往イテ託ス。之ヲ燻ブレバ、則チ其ノ木ヲ燒カンコトヲ恐ル。之ニ水ヲ灌ゲバ、則チ其ノ塗ヲ敗ランコトヲ恐ル。此ノ鼠ヲ殺スヲ得ベカラザル所以ノモノハ、社ヲ以テノ故ナリ。夫レ國ニモ亦社鼠アリ、人主ノ左右是レナリ。内ハ則チ善惡ヲ君上ニ蔽ヒ、外ハ則チ權重ヲ百姓ニ賣ル。之ヲ誅セザレバ、則チ亂ヲ爲ス。之ヲ誅スレバ、則チ人主ニ害セラル。腹ニ據リテ而シテ之ヲ有ス。此レ亦國ノ社鼠ナリト」とある。坪内逍遙氏の名文「桐一葉」の社鼠の字もこの意に徴して讀めば尙意味深長なり。

★舍 弟

シヤテイ
自分の弟のこと。

★這般之情景 シヤハンノジャウケイ
この有様といふこと。〔明専・海兵〕

★沙 門 シヤモン
僧侶の稱。〔女高師〕

★洒 落 シヤラク
心がさつぱりしてわだかまりのないこと。シヤレと讀む時はみえを作りめかすこと。灑落も同じ。〔山商・龍大・陸士〕

★射 利 シヤリ
利益を目あてにすること。〔高校・立大〕

★衆口鑠金 シニウコウキンをトカす
衆人がかれこれ言ふ時は、堅き金の如き物をもとかすといふので、讒言の恐るべきに譬へる。〔海欄・海經〕

★需要供給 ジニエウキヨウキウ
入用であること、それに對してあてがふこと。

★宿 痾 シニクア
久しい間なほらぬ病氣のこと。〔慶大・名工〕

★宿 業 シニクゴウ
前世のむくい。〔名商〕

★倏 忽 シニクコツ
たちまち。極めて短い時間。俛は犬の疾く走る義で、速にて捕捉すべからざる意。楚辭に「俛而來兮、忽而逝」とある。〔陸士・東北大・早高・和商〕

★宿 志 シニクシ
永年の志のこと。

★祝 福 シニクフク
いはふこと。

★宿 命 シニクメイ
前世より定つた運命といふこと。

★祝融之災 シニクニウノワザハヒ
火災のこと。祝融は夏の神、火の神なり。〔満工〕

★宿 老 シニクラウ
經驗の多い人のこと。

★主 觀 シニクワン
知覺・思考の本体となるもの、平たく云へば物を觀察する側のもの。これに對して觀察される側のものを客觀といふ。〔東高師・朝大・京城大・西南・明専〕

★主 權 シニケン

★首 肯 シニコウ
國家を統治する最高の權力のこと。〔國大〕

★首 肯 シニコウ
うなづき承知すること。制府錄に「張公首肯久^{シウス}之^テ」とある。〔京置・福商・鹿農・神商〕

★主 宰 シニサイ
主になつて司どること。

★孺 子 ジニシ
幼弱の子といふこと。又少年を輕蔑していふ語。〔陸士・長商・甲南〕

★豎 子 ジニシ
小兒のこと。召使ふ小童。又人を輕蔑して呼ぶ語。史記に「遂爲^ニ豎子名^ニ」とある。〔北大・東高師・米工〕

★主 上 シニジャウ
天皇の尊稱。至尊。〔神宮〕

★守 株 シニシュ
一事に拘泥して、臨機應變の才のないこと。韓非子に「宋人、田ヲ耕ス者アリ。田中ニ株アリ。兎走リテ株ニ觸レ、頸ヲ折リテ死ス。因リテ其ノ衆ヲ釋キテ株ヲ守ル。復兎ヲ得^ンコトヲ冀ヒ、兎復得^ベカラズ。而シテ

身ハ宋國ノ笑トナル」とある。之を守株持^ッ見^ッといふ。〔專檢〕

★侏 儒 シニジュ
身長の短小なる人のこと。漢書に「東方朔自ヲ以爲ヘラク、疎薄シト。乃チ侏儒ヲ給イテ曰ク、上、汝等ヲ殺サント欲スト。侏儒、帝ニ言フ。帝、朔ヲ召シテ之ヲ問フ。朔曰ク、侏儒ハ長三尺、月俸侏粟ナリ。臣ハ九尺餘、月俸モ亦タ一囊粟ナリ。侏儒ハ飽イテ死セムト欲ス、臣ハ餓エテ死セムト欲スト」とある。

★殊 勝 シニショウ
とりわけ勝れたもの。けなげ。神妙。

★縞 子 シニス
滑かて光澤のある練絲織の綾絹。多く帶地に用ゆ。〔東高師・米工〕

★首鼠兩端 シニソリヤウタン
どちらとも容易に決定せざること。鼠は性疑ひ深くして、穴より出づれば一前一却、左せむか右せむかと容易に決せざるに本づく。〔陸士・米工・早高・京城醫・水産〕

★主 張 シヌチャウ

自分の見を通さうとすること。宋史に曰く「顧安、時、慮、順、主、張、世、道」とある。〔成蹊高〕

★述 懐 ジヌツクワイ

自分の思をのべること。〔明専〕

★入 魂 ジユツコン

殊に親しく交ること。懸意。〔廣高師・京城法・九樂・上黨・東北大・千圃〕

★出 藍 シヌツラン

弟子の師よりもすぐれたること。荀子に「青ハ之ヲ藍ヨリ取りテ藍ヨリ青シ」とあり、學問も絶えず勉むれば、弟子却つて師にまさる。出藍の譽ありと云へば、師にも勝る評判があるといふ意味なり。〔北農・關大・東亞同・岡大・高校・陸士・東北大・廣高師2・京法〕

★出 塵 シヌツロ

家を出かけること。〔廣高師〕

★首 途 シヌト

かどてのこと。〔陸士・米工・早高・京城醫〕

★夙 夜 シヌクヤ

朝早くから夜おそくまで事を勉むること。〔專檢2・水産・陸士・桐工〕

★須 臾 シヌユ

しばらくの間といふこと。〔小商・大商大・長商・高校2・大外語・中商・甲南〕

★修羅之巷 シヌラノチマタ

戦争又は争亂の場處、激戰場裡。修羅場。〔熊工〕

★受 理 ジユリ

受け入れて處理又は審理すること。〔廣高師〕

★宿 論 シヌクロン

長い間唱へてゐる議論のこと。

★春 秋 シユンジュウ

(1)春と秋。(2)孔子の著はされた書物の名。(3)支那歴史上の時期、周の平王から威列王の頃迄。(4)としつき。(5)年輪のこと。

★富 春秋 シユンジュウニトヒ

年輪のわかいこと、前途有望なること。春秋高、又は春秋長、は年老いたこと。〔海兵2・仙醫・京城醫・專檢2〕

★春秋之筆法 シユンジュウノヒツバウ

嚴肅なる道徳的態度の書きぶりのこと。孔子の著した魯の史記(春秋)は一字を以て褒貶の意を示し、筆すべきは筆し、誅すべきは誅する嚴肅なる書きぶりであつたによる。〔東商大・水産〕

★巡 錫 ジユンシヤク

僧侶が各地をめぐつて教をひろめること。〔陸士〕

★恂 々 ジユンジュン

信實なるさま。論語に「於三郷黨恂々如也」とある。〔水農〕

★逡 巡 シユンジュン

しりごみすること。史記に「逡巡再拜」とある。〔水産・海兵・小商〕

★浚 深 シユンセツ

泥あくたをさらへて深くすること。〔五高・米工・盛農・京高麗・名商・高資〕

★守 錢 虜 シヌセンリヨ

金錢を蓄へて散ぜざるものを譏りていふ。守錢奴。後漢書に「凡種貨財、實能施賑、否則守錢虜耳、盡」

散所^{シテ}有^ル以^テ頌^ム於^テ昆弟^ノ故^ニ舊^ニとある。

★蠢 動 シユンドウ

うごめくこと。〔米工・水産・東商大〕

★俊 髦 シユンバウ

才徳の大衆にすぐれたる者のこと。俊は萬人に秀でたるをいひ、髦はすぐれて長き鬣をいふ。郭璞曰く「士中ノ俊ハ猶ホ毛中ノ髦ノ如シ」とある。〔明専〕

★馴 致 ジユンチ

自然にさうなること。〔鹿師・名工・愛醫〕

★巡 撫 ジユンブ

地方を巡つて人心を安んずること。

★自 餘 シユ

それ以外といふこと。

★丞 相 ジヨウシヤウ

大臣のこと。宰相に同じ。丞は承なり、相は助なり。君主の意を承け助ける義による。〔東高師〕

★悚 然 シヨウセン

ぞつとすること。〔高校〕

★勝地無^レ主 シヨウチニヌシナシ

自然は自由に楽しむことが出来るといふこと。

★衝動 シヨウドウ

俄に内部から起る力のこと。〔水農〕

★聳動 シヨウドウ

おそれうごくこと。〔専檢〕

★竦動 シヨウドウ

心を動かしぞつとすること。

★冗費 ジヨウヒ

むだな費用のこと。〔水産・東商大〕

★冗談 ジヨウダン

むだばなし。冗はむだ。

★懲通 シヨウツウ

誘ひすゝめること。〔海兵・陸士・山高・名工・海經・千岡・満工〕

★從容 シヨウヨウ

ゆつたりとして追らないさま。從容自若はゆつたりと落ちついて動じないこと。〔北大・大商・米工・東醫〕

★諸行無常 シヨギヤウムジャウ

萬有は生滅變化して少しも常住せぬといふこと。傳燈

録に「諸行無常、是生滅法、生滅已、寂滅爲樂」とある。〔東商大・岐農〕

★食言 シヨクゲン

言を出して其の言を守らざること。言明せしことにそむくこと。書經に「朕不食言」とある。〔専檢・濱商・廣高師・水産〕

★蜀魂 シヨクコン

ほととぎすのこと。蜀の望帝、帝位に復せんと欲せしも得ずして死し、化して鵲となり、晝夜悲鳴す。蜀人之を聞いて我が望帝の魂なりと言ひしに基く。蜀魂も同じ。〔長商・高檢〕

★尊食 ジヨクシヨク

尊（しとれ）の中にて食すること。即ち朝早く食することなり。尊食而發は朝早く出發することなり。〔満醫・高校・國大・陸士〕

★辱知 ジヨクチ

其の人と交際があること謙稱。辱知諸賢などいふ。

★褥禮 ジヨクレイ

くだくしき禮儀作法のこと。繁文褥禮の語あり。

★絮説 ジヨセツ

くはしく説くこと。

★所詮 シヨセン

つまる所。要するに。結局。〔京城醫・山商・高松商〕

★處女 シヨジヨ

未だ嫁がざる女のこと。處は居なり、故に家に居る義なり。孫子に曰く「始如二處女二敵人開レ戸後、如二脱兎二敵不レ及レ拒」と。又品字箋に「女ノ未ダ嫁セザルヲ處女トイヒ、士ノ未ダ仕ヘザルヲ處士トイフ」とある。士とは學徳のある者なり。

★處方 シヨハウ

病氣に應じて藥を調劑すること。〔東高師・九藥〕

★所望 シヨマウ

望み願ふこと。懸望。〔水産〕

★支離滅裂 シリメツレツ

はなれぐれで筋道の立たぬこと。〔名工〕

★壟斷市利 シリをロウダン

利益を專斷すること。〔神商大〕

★砥礪 シレイ・テイレイ

シ

★熾烈 シレツ

ときみがくこと。砥礪切磋。〔海兵・醫專・海軍・仙醫〕

★尸位素餐 シイソサン

功なくして祿を食むこと。尸とは祭祀の時、一人の祭主として假に神の位に端坐せしむるものをいひ、尸位とは、位に居りて其事をなさざるをいふ。素餐は空しく食ふ義で、共に其の器にあらずして高位厚祿を食ふことを云ふ。〔海欄・拓大・名工・高校・海兵2・廣高師・京城醫・専檢・神商・福島商〕

★次韻 シケン

他人の作つた詩の韻を用ひて詩を作ること。〔松江高〕

★市尹 シケン

市長のこと。〔福商〕

★通刺 シをツウザ

名刺を出して案内を乞ふこと。〔愛醫〕

★襯衣 シンイ

シャツ、はだぎのこと。

★嗔恚 シンイ

シ

怒りうらむこと。〔陸士2・山商〕

★宸 憂 シンイウ
天子の御心配のこと。〔米工・盛農〕

★軫 憂 シンイウ
うれへること。

★信 仰 シンカウ
神佛を信心してすぐること。〔東北大〕

★人 格 シンカク
人のぬらち、ひとがら。又意思が明瞭で義務・責任を解し得る資格のこと。〔水産〕

★森 閑 シンカン
しづかなこと。〔神商〕

★震 撼 シンカン
ふるひうごかすこと。宋史に「震撼宇内」とある。〔海兵〕

★眞 贗之辨別 シンガンノベンベツ
にせかまことかの見分け。〔立教大〕

★仁 義 ジンギ
いつくしみの心と正しい行のこと。仁は心の徳、愛の

理。義は心の制、事の宜なり。孟子に曰く「王何必曰利亦有仁義而已矣」と。又荀子に「仁者愛人、義者循理」とある。

★箴 規 シンキ
いましめの規則。

★新機軸 シンキヂク
新しいやりかた。〔水農・名工〕

★宸 襟 シンキン
天子の御心のこと。宸は帝居又は天子の御事に冠して用ひる語。襟は胸の義。〔小商2・桐工・海欄・水産・米工〕

★膾炙人口 シンコウニクワイシヤ
よく世人にもてはやされること。〔八高・東音・東商船・陸士・盛農・海兵・長商・京城醫・東醫〕

★參 差 シンサ
長短そろはず不揃のこと。〔米工・仙醫・長商・上置・日醫・大齒〕

★神州 シンシウ
我が大日本國の異稱。〔海欄〕

★眞 摯 シンシ
まじめなこと。〔米工・長商・海軍〕

★唇齒輔車 シンシホシヤ
利害關係の最も密接なること。齒は唇亡齒寒の語あるが如く、唇を失へば安全でなく、輔は車輪の兩側にある挾木で共に相依り相助けて用をなすのである。左傳に「宮之奇諫メテ曰ク、輔ハ齒ノ表ナリ、齒亡ベバ虞必ズ之ニ從ハン。諺ニ所謂、輔車相依リ、唇亡ビテ齒寒シトハ其レ虞輔ノ謂ナリ」とある。〔海兵・明專2・山商・稗商〕

★親 炙 シンシヤ
親しく交つて感化を受けること。孟子に「況於親炙之者乎」とある。〔東北大・鹿農・長商・千閑・慶大・桐工・桐染・横商〕

★尋 常 シンジヤウ
尋は八尺、常は一丈六尺。轉じて僅かばかりの義に用ふ。韓愈の文に「其不_レ及_レ水盞尋常尺寸之間耳」とある。又平常の義として用ふ。

★斟 酌 シンシヤク
シの部

くみとること。參酌。〔東協大〕

★深思熟慮 シンシジユクリヨ
よく念を入れて考へること。

★神出鬼没 シンシユッキボツ
出たりひつこんだりする變化が速にしてはかれざること。唐書に「兩頭三面、神出鬼没」とある。〔醫專〕

★神色自若 シンシヨクジヤク
顔色が平常と少しも變らぬこと。

★摺 紳 シンシン
高貴貴顯の人のこと。摺は又縞とも書く。摺は挿む、紳は大帯なり。貴顯の人は笏を大帯に挿むといふによる。晋書に「所謂摺紳之士者、摺_レ笏垂_ニ紳帶_一也」とある。〔廣高師・慶大・千醫・專檢・普文〕

★盡 瘁 シンスイ
心力を盡し勞すること。詩經に「盡瘁事_レ國」とある。〔長商・山商・東女高師・專檢〕

★開_ニ拓新生命_一 シンセイメイイカイタクス
新しい生活方法をきりひらき講ずること。〔東商船〕

★針小棒大 シンセウボウダイ

はり程の小さな事を棒ほどおぼけさにいふこと。〔廣高師〕

★人世之波折 ジンセイノハセツ
人間の世の中の出来事。〔鳥農〕

★震 摺 シンセフ
ふるひおそれること。〔早高・山商・海欄・商船・桐工〕

★往 苒 ジンセン
のび／＼になつて長びくこと。魏書に「苒苒至^ル今」とある。

★慎 重 シンチヨウ
つゝしみ深くおもしろいこと。〔鹿農・専檢・北大・桐工〕

★進 歩 シンチヨク
仕事のはかどること。〔山商〕

★新陳代謝 シンチンタイシヤ
新しいものと古いものが入りかはること。

★眞 諦 シンタイ・シンタイ
まことのみち。眞理。

★寢 殿 シンテン

中古に於ける貴族の家の表座敷のこと。〔高校・三高〕
★當^リ仁不^レ讓^ラ於^ニ師^ニズ ジンにアタリてはシにユヅラ
仁徳を行ふ場合には、師と雖も譲るに及ばぬといふこと。

★眞 如 シンニヨ
永世不變の實體。

★軫 念 シンネン
天子の御心を痛めさせ給ふこと。〔水産〕

★信 憑 シンビヨウ
信用して依頼すること。〔廣高師〕

★振 旅 シンリョ
戰爭に勝つて兵をおさめて還ること。左傳に「三年而治^レ兵入而振旅」とある。

★人為淘汰 ジンキタウダ
人間の力でえりわけすること。

ス の 部

★樞 要 スウエウ
大事なところのこと。樞は戸のくるる、要は扇のみな

め。樞軸も同じ。

★樞 機 スウキ
國家の大政のこと。樞は戸のくるる、機は弩^{オホユキ}の引がれ。共に大切なところ。〔専檢・仙工〕

★數 奇 スウキ
不仕合、不遇のこと。數は命數、奇は奇數にして合はぬこと。史記に「李廣、數奇ニシテ、侯ニ封セラレズ」とある。數奇は風流なこと。混同すべからず。〔仙醫・山商・鹿農・明專・農大・水産2・法大・外語・小商〕

★趨 舍 スウシヤ
進むこと、退くこと。進退。史記に「趨舍有^リ時」とある。〔山商・廣高師・専檢・陸士〕

★趨 勢 スウセイ
世の中のみちゆき。傾向。〔高校・大谷〕

★芻 蕘 スウセウ
草かりと木こりのこと。詩經に「詢^フ子芻蕘」とある。

★過 猶^ホ不^レ及^バ スギたるはオホばざるがごとし
中正を以て一番よしとすること。賢智の過ぎたるは、

ス の 部

愚、不肖の及ばざるに勝れるが如きも、其の中道を失ふことは同じだといふ義なり。この語、論語より出づ。

★宿 世 スクセ
前世のこと。〔高校・上置〕

★雀百迄忘^レ踊^ル スズメヒヤクマテアドリをワスれぬ
生れつきは改りにくいこと。〔東高師〕

★則 スナハチ
原因を表はす。何々すればの義なるにより、俗にレバ則といふ。

即——よつて、とりもなほさずそのままに。
乃——そこで、やはり、かへつて。

便——すぐに、便利よく。
輒——すぐに雑作なく。便と輒は同意。

★簀 子 スノコ
竹を編んで作ったもの。又は細い板を横に並べ、間を少しづつあけて作ったもの。〔廣高師・大分商〕

★須 臾 スユ
しばらく、暫時。

★推 移 スキイ

うつり替ること。〔盛農・九樂・名工〕

★誰 何 スキカ
誰れであるかを尋ねとがめること。史記に「連利兵誰何」とある。〔外語〕

★推 敲 スキカウ
字句を鍛錬すること。推はオス、敲はタ、クナリ。淵
素雜記に「唐ノ詩人賈島、僧トナリ、李疑ガ幽居ヲ訪
フトキ、途中ニテ一勾ヲ得タリ。曰ク、鳥宿池邊樹、
僧敲月下門。始メ推ノ字ヲ用ヒント欲シ、又敲ノ字ヲ
用ヒント欲ス。之ヲ練ツテ未ダ定マズ、時々推敲ノ勢
ヲナス。時ニ權知事韓愈、驛車ニ乘リテ出ヅ。鳥、覺
エズ、之ノ僕衛ニ衝キ當ル。左右ニ擁セラレテ馬前ニ
至ル。愈、之ヲ問フ。鳥、具サニ得ル所ノ句ヲ道フ。
推敲ノ字未ダ定ラズト。愈、曰ク「敲」ノ字佳ナリト。
與ニ詩ヲ論ジ、遂ニ布衣ノ交ヲナス」とある。〔宇農・
盛農・神宮・大分商・水産・山商・京蠶・金藥・桐工・米工・
京城大〕

★衰 頽 スキタイ
衰へたれること。〔高校・北大〕

★出 師 スキシ
軍隊をくり出すこと。出兵。〔岡醫〕

★粹 人 スキジン
世の中の人情の表裏に通じた如才なき人。さばけた人。

★隨身 ズキシン
ともびとのこと。ズキジンは昔、攝政・關白などの護
衛として朝廷から賜つた供人。〔神商大・甲南〕

★慧 星 スキセイ
はらき星のこと。〔仙醫〕

★醉生夢死 スキセイムシ
何もなすことなく、一生を終ること。楊子語錄に「雖ニ
高才明智ニ誇リ分テ、醉生夢死、不ニ自覺」とある。
〔鹿農・寧檢・東醫〕

★垂 涎 スキセン
よだれをたらすこと。また物を非常にほしがること。
〔秋鱈・長商・陸士・京法〕

★鎌 刀 スキトウ

★出 納 スキタフ
出すことといれること。〔高校・長商2・外語・米工・車
美・法大・金工・名工〕

★水 干 スキカン
糊を用ひず水張にした絹。〔東商大〕

★醉眼朦朧 スキガンモウロウ
酔ふて眼光がぼんやりしてゐること。

★推 舉 スキキヨ
人をすゝめ擧げること。推薦。〔長商・盛農〕

★垂 拱 スキキヨウ
何事も爲さざること。垂は衣を垂れ、拱は手をこまね
く義なり。書經に「停信、明義、崇徳報功、垂
拱而天下治」とある。

★水魚之交 スキギヨノマジハリ
交際の親密なること。魚と水との關係の義による。水
魚之親ともいふ。〔水産〕

★翠華搖々 スキクワユウユウ
天子の旗が、憂ひげにゆれるさま。〔農大〕

★推 轂 スキコク
小利を求むるを鎌刀の末といふ。左傳に「鎌刀ノ末、
將ニ盡ク之ヲ爭ハントス」とある。

★推 輓 スキバン
人を推し進むること。前より牽くを輓となし、後より
おすを推となす。左傳に「衛君必入夫二子者、或輓
之或推之、欲無入得乎」とある。〔陸士〕

★翠 微 スキヒ
山の中腹、又は山の義である。爾雅に「山未及上、
曰ニ翠微」とあり、又一説に「山氣青綠色 故曰ニ翠
微」とある。

★推 步 スキホ
日月運行の度數をおしはかること。書經に「精推歩」と
ある。

★醉步踳跚 スキホマンサン
酔ふてよろめき乍ら歩くこと。

★睡 魔 スキマ
れむげを催きす神のこと。蘇軾の句に「春贈包居士、
僧戰三房睡魔」とある。

★末大 必折 スエダイナレバカナラザオ
ナレバズ

支族大なれば大宗を介すに至るといふこと。左傳に「末大ナレバズルナレバ、必折、尾大、不レ掉」とある。

★寸 志 スンシ

わづかの志。自分の進物を卑下していふ語。

★寸進尺退 スンシンセキタイ

得るところは少なくて失ふところの多いこと。

★寸善尺魔 スンセンシヤクマ

世の中は幸が少なく禍が多いこと。

★寸 楮 スンチヨ

短い手紙のこと。楮はカウゾ、即ち紙を作る木で、轉じて紙、又文書なり。

★寸鐵殺レ人 スンテツヒトをコロス

簡短なる語句を以て急所を衝き人を警醒せしめ、感動せしむること。

★寸馬豆人 スンバトウジン

高い處から人馬を見る時、小さく見えるを形容して云ふ語。山水賦に曰く「凡畫山水、意在筆先、丈山尺樹、寸馬豆人、遠人無目、遠樹無枝、遠山無皴、隱々似肩、遠水無波、高興雲齊、此其訣也」と。

又上位を占むべき者は上位を占むべく、下位に在るべき者は下位に在るべし。斯くして各人各々其所を得たる秩序整然たる状態は正義の實現であり、斯の如き社會は正義の社會である。法律の目的は正義にあり。

セの部

★井 蛙 セイア

井の中の蛙で、狭い識見に拘泥する世間知らずの者に譬へる。莊子に「井蛙ニハ以テ海ヲ語ルベカラザルハ、

虛ニ拘スレバナリ。曲士ニハ以テ道ヲ語ルベカラザルハ、教ニ束ネラルレバナリ」とある。〔盛農〕

★征 衣 セイイ

(1)旅衣。(2)出征の時の軍服。征は行なり。〔女高師〕

聖賢の言を立て、世に傳ふる者のこと。史記に「太史公曰、聞世之人、欲ニ砥行立名者、非レ附ニ青雲之士、惡ニ能施ニ于後世哉」とある。

★青雲之士 セイウンノシ

立身出世せんとする志のこと。青雲は青い雲の義より高い地位のことなり。即ち立身出世の意となる。

★聲 價 セイカ

ほまれ、れうち。評判。李白書に「登レ龍門、則聲價十倍」とある。〔京城醫・長商〕

★青雲之志 セイウンノコ、ロザシ

立身出世せんとする志のこと。青雲は青い雲の義より高い地位のことなり。即ち立身出世の意となる。

★聲 價 セイカ

ほまれ、れうち。評判。李白書に「登レ龍門、則聲價十倍」とある。〔京城醫・長商〕

★世紀末 セイキマツ

煩悶の状態で、十九世紀末に於て歐洲人が陥つた厭世懷疑の思想傾向のこと。〔廣高師・慶大〕

★制馭・制御 セイギヨ

他を抑へつけてすべ治めること。〔米工〕

★青 衿 セイキン

若き學生のこと。衿は襟に同じ。むかし若き學生は青色の襟の衣服を着たるが故にいふ。詩經に「青青子衿、悠悠我心」とある。〔盛農・廣高師・東北大・水産・京城工〕

★征 空 セイクウ

空中を征服すること。〔成蹊〕

★生 業 セイゲウ

世渡りの業。〔桐工〕

★聲 言 セイゲン

世渡りの業。〔桐工〕

★晴好雨奇 セイカウウキ

山水の景色の晴れてよく、又雨降りてよき趣きあること。蘇軾の詩に「水光潑潑晴方好、山色空濛雨亦奇」とより出づ。

★晴耕雨讀 セイカウウドク

田園生活のこと。天氣がよければ耕し、雨が降れば讀書して暮す生活の意による。〔東鑑賞〕

★性 格 セイカク

其人特有の性質のこと。たち。

★精 悍 セイカン

すばしこくて強いこと。史記に「爲レ人短小精悍」とある。

★青 眼 セイガン

親愛する目つきのこと。白眼の對なり。

★正 義 セイギ

正しい道のこと。詳く云へば、斯くあるべきであるといふ状態であり、各人が價值に應じて其所を得ることである。即ち價值大なる者には大なる結果が與へらるべく、價值小なる者には小なる結果が與へらるべし。

言ひふらすこと。發明。揚言。〔明專〕

★贅言 ゼイゲン
無用のことば。贅はコブなり。贅語。楊子法言に「書不_レ經非_レ書也、言不_レ經非_レ言也、言書不_レ經多_レ贅矣」とある。

★正鵠 セイコウ

まよ、要點のこと。正も鵠も射的なり。正は布に畫きたるの的にして、鵠は皮につけたるのなり。故に射て中らざることを正鵠を失すといひ、何事にても正當を得ざることに用ひる。禮記に「孔子曰發而不_レ失正鵠者、其唯賢者乎、若夫不肖之人、則彼安能_レ以中」とある。〔陸士・東商大・東北大・海軍〕

★精彩 セイサイ

いき／＼とした氣象。〔海兵〕

★星霜 セイサウ

としつきのこと。星は一年に天を一周し、霜は毎年降る。故に一年を一星霜とす。杜牧集に「經_レ幾年、日_ニ幾_ニ換_ニ星霜_ニとある。

★悽愴 セイサウ

セイサウ

いたみかなしむこと。禮記に「霜露既降、君子履_レ之、必有_レ悽愴之心、非_レ其寒之謂_レ也」とある。悽愴はいたましいこと。悲愴。〔桐染〕

★政策 セイサク

政治をなす上の方針のこと。

★正朔 セイサク

正は正月、朔は月の初日。よつて曆を正朔といふ。正朔を奉ずとは、他國に藩屬して、その國の曆法を奉ずること。

★枘鑿不相容 ゼイザクアヒイレズ

物が適合しないこと。物の組織して合はざること。枘ツヅ鑿ツツともいふ。史記に「持_レ三方枘_ニ欲_レ入_ニ圓鑿_ニ、其能_レ入_乎とある。四角な枘を丸い穴に入れんとするも不可なることなり。

★成算 セイサン

既に出來上つた考。成竹。〔上蠶・山商・長商・慶大〕

★青史 セイシ

歴史のこと。古、紙が無く、竹の青皮を火にあぶつて油をぬき、之に記した。故に青といふのである。

★清淨無垢 セイジヤウムク

清くて汚れのないこと。

★脆弱 ゼイジャク

もろくて弱いこと。〔海兵・海國・東寶〕

★聖壽 セイジュ

天子の御壽命のこと。〔京法〕

★濟勝之具 セイシヨウノグ

達者な脚のこと。健脚。景色の勝れた所をわたり歩く道具の義。〔馬檢〕

★精髓 セイズキ

物事の眞の正味のこと。眞髓。〔海兵〕

★噬臍 ゼイセイ

後悔すること。左傳に「若不_レ早圖_レ、後君噬_レ臍其及_レ圖_レ之乎」とある。〔海欄・横商・五高・廣高師・盛農〕

★整然 セイゼン

秩序ただしさま。

★腥膻 セイセン

なまぐさいけもの。又其を食ふ賤人のこと。外國人をのしつていふ。

★清濁併呑 セイダクアハセノム

善人も悪人も共に自分の部下にし、之と交際する大雅量のあること。〔東亞〕

★清談之徒 セイダント

脫俗の話をする徒といふこと。支那の老莊學の一派で、有名な竹林の七賢の如きもの。〔海欄・臨教2・東高師〕

★掣肘 セイチウ

自由に動かせぬこと。干渉して人の意志の邪魔をすること。家語に「宓子賤、字ハ不齊、魯ニ仕ヘテ單父ノ令トナリ、之ヲ治ムルトキ、魯君ヨリ二人ノ吏ヲ請ヒ、コレヲシテ字ヲ書カシメ、子賤傍ヨリ其肘ヲ引キ、其字善カラザレバ子賤之ヲ怒ル。吏患ヒテ辭シ歸ル。魯君コレヲ聞キテ、之レ子賤、寡人ノ不肖ヲ諫シムルナリト云ヘリ」とある。

★成竹 セイチク

事を行ふにあたり既に出來上つた考のこと。成算。畫家は竹を畫くに、先づ出來上つた竹の姿を胸中に想像し、然る後に筆を下すにより出づ。蘇軾の畫竹記に

「登^ツ竹^ヲ必^ズ得^ズニ成^ラ竹^ヲ於^テ胸^中」とある。

★青天之霹靂 セイテンノヘキレキ

晴れきつた空に起る急激な雷のこと。又突然に起る大變動にいふ。

★青天白日 セイテンハクジツ

少しもうしろ暗いことのないこと。快く晴れた天氣の義による。

★成敗 セイハイ・セイバイ

セイハイは成功と失敗。セイバイは罪をせめこらすこと。〔神商人・醫專・小商〕

★儕輩 セイバイ

仲間・同輩のこと。

★濟美 セイビ

美德を成就すること。

★靜謐 セイヒツ

世の中の靜かに治ること。謐はやすらか。天下太平。

〔外語〕

★成文法 セイブンポフ

文章にかき表はされた法律のこと。

★清穆 セイボク

清らかで和氣の満ちてゐること。

★性命 セイメイ

人の性と天の命のこと。程子曰く「天ノ付與スル之ヲ命トイヒ、之ヲ稟ケテ我ニアル之ヲ性トイフ。事物ニ現ハル、之ヲ理トイフ。三者未ダ嘗テ異ル事アラズ」とあり、又易に「窮^リ理^盡性^至於^命」とある。

★聲明 セイメイ

公表言明すること。

★誓文拂 セイモンバラヒ

陰曆十月廿日に、商人などが平素の罪ほろぼしの爲め官参りをしたことであつたが、後には吳服屋の賣出しにいふやうになつた。

★稅率 セイリツ

稅九課する割合のこと。

★清涼殿 セイリヤウテン

天皇陛下常の御殿のこと。紫宸殿の西にある。

★清廉 セイレン

心が潔白で行が正しいこと。

★清漣 セイレン

さどなみ。〔海兵〕

★聲援 セイエン

聲をかけて助勢すること。

★宵衣肝食 セウイカンシヨク

天子が政事に勤勞せられること。宵はよる、肝はひぐれ、おそい。即ち夜のまだ明けぬうちに衣裳をめされ、日が没してからおそく食事を召上ること。〔專檢・盛農2・海欄・名工・國大〕

★逍遙 セウエウ

ぶら〜と歩くこと。〔臨教2・盛農・水産・北大・桐工〕

★紹介 セウカイ

人をとりもち、ひき合せること。照會と混用すべからず。〔東商大・仙商・名工・金工・小商・鐵道〕

★小康 セウカウ

少しのしづまり。小康を保つは少しく安心出来る状態にあること。

★消閑 セウカン

ひまつぶしのこと。

★照鑑 セウカン

神や佛がみそなはすこと。

★消極的 セウキョクテキ

なまぬこと。ひつこみ思案的なること。積極的の對。

〔高檢・西南〕

★照會 セウクワイ

問ひ合せること。紹介と混同すべからず。〔長商・廣高師・明專・商大・海兵・名工・神商大〕

★焦燥 セウサウ

いら〜とすること。〔金工〕

★笑止 セウシ

(1)をかしいこと。(2)物笑になる事を氣の毒に思ふこと。

★瀟酒 セウシヤ

あかねけしてさつぱりしてゐること。〔米工〕

★蕭牆之憂 セウシャウノウレヒ

外からでなく、内に起る憂のこと。騷動。内亂。蕭牆は門屏なり。故に門の内に起る憂のこと。論語に「吾恐在^ニ蕭牆之内^ニ」とあり、又韓非子に「不^レ謹^ニ蕭牆之憂^ニ、而固^ニ金城於遠境^ニ」とある。〔陸士〕

★霄壤之差 セウジヤウノサ

甚だしく差違のあること。霄は天、壤は地なり。雲泥之差。月窟之差。〔高校・北大・廣高師・九樂・大藥〕

★紹述 セウジユツ

前の事業を受繼いでつべ明かにすること。〔海機〕

★小人之過也必文

小人（君子の反對）は過失があつた場合、之を憚つて外面を善きやうに取りつくり、過ちが無い様に見せかけるものであるといふこと。論語に出づ。〔山商〕

★小心翼翼 セウシンヨクヨク

注意深くこまかい心。翼翼は恭しく慎む義なり。詩經に出づ。〔海經〕

★儻惇 セウスキ

逞ひやつれること。孟子に「民之儻惇於虐政」未レ有テ甚レ於此時「者上」也」とあり、又屈原の漁父辭に「顔色儻惇形容枯槁」とある。

★饒舌 セウゼツ

おしやべりのこと。多言。〔女職〕

★消息 セウソク

(1)時のうつり變り。(2)動靜、様子、有様のこと。音信。

〔鹿農・山商・東北大〕

★消長 セウチヤウ

榮えると衰へること。消は減なり。榮枯。國運消長などいふ。〔小商〕

★詔勅 セウチヨク

天子のみことりのり。「詔ハ詰ナリ、教ナリ、百姓ニ告ゲ教フル所以ナリ」とある。〔小商〕

★蕭條 セウデウ

極めて物淋しいさま。班固の燕然山銘に「蕭條萬里、野無遺寇」とある。又滿日蕭條などいふ。〔北大〕

★椒房 セウバウ

皇后のゐます宮のこと。漢官儀に「皇后稱椒房、其實蔓延盈升、以椒塗室、取溫暖、除濕氣也」とある。即ち子孫の椒子の如く多からんことを欲するによる。椒はサンシヨなり。〔盛農・農大・京法〕

★焦眉之急 セウヒノキフ

非常に切迫したる急務のこと。〔海兵・女高師・廣高師〕

★小品文 セウヒンブン

短かくまとまつた美文のこと。〔水農〕

★紹復 セウフク

繼ぎおこすこと。〔山商・千園〕

★召聘 セウヘイ

禮を厚くしてまゐりきこへること。〔神商大〕

★昭穆 セウボク

祖先を廟祀する順序のこと。昭は左なり、穆は右なり。父を昭として南に面し、子を穆として北に面す。國語に「宗廟之有昭穆也、以次二世之長幼、而等三代之親疏也」とある。

★變理 セウリ

調和すること。國政變理。

★焦慮 セウリヨ

あせりなやむこと。苦慮。

★折閱 セキエツ

損をして賣ること。折は損なり、閱は賣るなり。荀子に「良賈不爲折閱」とある。

★碩學 セキガク

大學者のこと。碩は大なり。〔早高〕

★釋褐 セキカツ

任官すること。褐は毛織の衣にして、賤民庶人の服なり、釋はとく、即ち脱ぎすてるなり。故に釋褐は任官することとなる。

★積極的 セキキヨクテキ

進んではたらきかけること。進んで爲すことを主とすること。消極の對。〔陸士・明華・西南〕

★席卷 セキケン

むしろを巻くが如く勢に乗じて容易に取ること。賈誼の文に「席三卷、天下三尊、字内」とある。

★碩儒 セキジュ

大儒者のこと。碩は大なり。儒は孔孟の學を修め其の教義を奉ずるもの。

★置赤心於人腹中

己れの心の誠を人に移して、人も亦さうだと信じて疑はぬこと。十八史略に「蕭十推赤心置人腹中、安得不救乎」とある。〔富高〕

★釋奠 セキテン

孔子をまつる祭のこと。孔子祭。

★尺 積 セキトク

手紙のこと。古の制、書簡は長さ一尺、故に尺積といふとある。

★寂 寞 セキバク

人なくして淋しきこと。楚辭に「山蕭々、而無^ハ歌兮、野寂^ハ寞、而無^ハ人」とある。「小商・長商・和商・京法」

★尺 蠖之屈 以求^レ信 也

セキワクノクツするはモツてノビむことをモトむるナリ

人が暫く身を屈し艱難に耐ふるは、他日大に發展せんが爲であるといふこと。尺蠖はしやくとり虫、信は伸である。易に出づ。「専檢・陸士」

★世 故 セコ

世の中の風俗習慣等種々のならはし。世故に長ずなどいふ。「高校・廣高師・水産」

★世 辭 セジ

人に對する愛想のこと。

★是是非非主義

ぜぜヒヒシユギ 善き事を善しとし、悪しき事を悪しとする方針。「愛

★節 會 セチエ

昔朝廷で行はれた儀式を稱していふ、即ち元旦の節會、白馬の節會、豊明の節會などである。「北大・陸士」

★舌 耕 セツカウ

辯舌を以て生計をなすこと。即ち力を以て耕さずして舌にて耕す義による。從容錄に「才士筆耕、辯士舌耕」とある。

★折 角 セツカク

骨を折ること。苦心すること。

★折 簡 セツカン

全紙を二つ切にしたる短き手紙をいふ。簡はもと竹簡とて竹の札なり。古は竹の札を用ひたれば、竹ならざるもかくいふ。

★折 檻 セツカン

強く責め諫めて意見をする事。漢書の「成帝ノ元延元年、朱雲、倭臣安昌侯張萬ヲ斬ラントテ極諫ス。帝大ニ怒リテ曰ク、小臣下ニ居リテ上ヲ侮リ、師ヲ辱シム。罪死ストモ教サズト。御史ヲシテ朱雲ヲ引ズリ下サン

★設 計 セツケイ

トス。雲、殿ノ檻ニツカマル、檻折ル」より出づ。もくろみのこと。計畫。企圖。「陸士」

★切 瑳 琢 磨 セツサタクマ

學業に勵み、徳を磨くこと。骨や角や玉や石を細工する者は切つたり磨いたりする故にいふ。大學に「如^ク切^ル如^ク磋^ス、道^ノ學也、如^ク琢^ス如^ク磨^ス、自修也」とある。「東亞・北大・水産・盛農・外語・京費・大工・米工・京城工」

★折 枝 セツシ

(1)枝を折ること。(2)按摩をとること。

★攝 政 セツシヨウ・セツセイ

君主に代つて政事を行ふ人のこと。

★切 齒 扼 腕 セツシヤクワン

甚だしく憤怒すること。即ち齒をくひしぱり、腕をにぎりしむる義による。史記に「樊於期偏袒扼腕而進曰此臣日夜切齒腐心也」とある。「米工」

★折 衝 セツシヨウ

敵が衝突して来るのをくじき止めること。又轉じて他

とかけひきして自分の體面を全くすること。折衝禦侮。晏子春秋に「孔子曰不^レ出^レ楹^ノ門之間、而折^レ衝、千里之外、晏子之謂也」とある。「千醫・高校・神商大・福商・名工・廣高師・陸士・海兵・山商・北大」

★節 制 セツセイ

ほどよくとりしまること。「慈賢」

★抽 速 セツソク

下手であるけれど早いこと。巧運の對。「高枝」

★絶 對 セツタイ

何物にも制限せられず、又他に對立するものないこと。相對の對。「海經・專檢2・陸士」

★絶 體 絶 命 セツタイゼツメイ

逃れる手段のない場合のこと。即ち體も命もきはまりて如何ともしがたき義による。

★刹 那 セツナ

極めて短い時間のこと。この語は佛語で、永劫に對する語である。刹那主義は、その刹那々に考と行爲とを一致させて其事にあたるといふ論旨である。岩野泡鳴氏によつて唱へられた。「陸士・海經・長商2・盛農」

神宮・米工・福商・山商・名工・東商大・女高師・小商・明大・修工・朝大・甲南・高檢・水農・盛農・京城大

★説 破 セツバ

ときふせること。

★絶 壁 セツベキ

険しきがけのこと。斷絶絶壁などいふ。

★絶 倫 ゼツリン

對立する者のないほどすぐれてゐること。精力絶倫。

★雪 冤 セツエン

無實の罪をすゝぐこと。「専檢・慶大」

★是非 ゼヒ

(1)よしあし、善惡、良否、臧否。(2)よかれあしかれ、必ず、どうあつても。

★捷 徑 セツケイ

ちかみちのこと。捷はハヤキなり、徑は邪道にして小道なり。難殺に「夫唯捷徑以害レ歩」とある。

★惛 伏 セフフク

おそれてすくむこと。「陸士」

★臺 詞 セリフ

舞臺で俳優が用ひる文句のこと。科白とも書く。「同志」

★涉 獵 セフレフ

多くの書物に目を通すこと。水鳥が水を涉つて、餌をあさる如く、又獵が禽獸をかり集めるが如く、あちこちと深ぐり歩く義より轉ず。漢書に「涉獵書紀、不能爲醇備」とある。「千醫・山商」

★先憂後樂 センイウコウラク

天下の人より先に心配し、天下の人より後に樂しむこと。志士仁人が國家を思ふの情をいふ。茫文正公神道碑に「士ハ當ニ天下ノ憂ニ先チ憂ヘ、天下ノ樂ニ後レ樂シムベキナリト」とあり、柳村子にも「先憂爲ニ後樂之本、暫勞爲ニ永逸之始」とある。

★先考 センカフ

死亡した父のこと。考は亡父、妣は亡母。故に先妣は死亡した母。考妣は死亡した父母のこと。「専檢・女高師」

★銓 衡 センカウ

人物の優劣、即ち才能又は身分等をはかりしらべるこ

と。銓ははかりの分銅、衡ははかりのさを。晉書に「汝若居ニ銓衡、當レ舉ニ如レ此人」とある。「盛農・熊工・小商」

★先覺 センカク

一般の人より早く覺つた識者のこと。先知先覺。孟子に曰く「予天民之先覺者也、予將下以ニ斯道ニ覺中、斯民」と。「山商・東高師」

★禪 閑 センカフ

閑白の入道したる者のこと。「醫事」

★僉 議 センギ

大勢の者が評議すること。僉はミナノ義。衆議。「千醫・東高師」

★詮 議 センギ

罪人の罪を糺したづねること。

★占 據 センキヤ

一定の場所をしめて他人の入るを拒絶すること。「廣高師」

★千金之子不垂堂

ヘンキンノコはダウにスキセ 富人の子は自分の身を深く受るといふこと。不垂堂

と。銓ははかりの分銅、衡ははかりのさを。晉書に「汝若居ニ銓衡、當レ舉ニ如レ此人」とある。「盛農・熊工・小商」

★先覺 センカク 一般の人より早く覺つた識者のこと。先知先覺。孟子に曰く「予天民之先覺者也、予將下以ニ斯道ニ覺中、斯民」と。「山商・東高師」

★禪 閑 センカフ 閑白の入道したる者のこと。「醫事」

★僉 議 センギ 大勢の者が評議すること。僉はミナノ義。衆議。「千醫・東高師」

★詮 議 センギ 罪人の罪を糺したづねること。

★占 據 センキヤ 一定の場所をしめて他人の入るを拒絶すること。「廣高師」

★千金之子不垂堂 富人の子は自分の身を深く受るといふこと。不垂堂

★善根 ゼンゴン
なさをかける心根のこと。慈悲のおこなひ。あはれみ。

★前栽 ゼンサイ

庭さきに植込込んだ草木。〔高校・廣高師・神商・海經〕

★千載一遇 センサイイチダウ

容易に遇ふことの出来ないこと。千載は千年。千年に一度遇ふといふ義。文選に「千載一遇、賢聖之嘉會、一ヒテニハハキコト」
遇レ之不能無レ欣」とある。〔大外・旅工・神商大〕

★穿鑿 センサク

こまかいことまで根ほりはほり調べること。穿は委曲して入る、鑿は孔をうがつなり。蘇軾の文に「穿鑿至此」とある。〔海兵〕

★宣旨 センシ

天子の命令のこと。〔陸士・水産・上蠶〕

★善柔 ゼンジュウ

内心に信なくして上面でこびへつらふことの巧みなること。〔高校・長商・福商〕

★禪讓 ゼンジャウ

天子が位を讓ること。禪讓放伐は徳なき天子の位は徳ある者が讓り受け、之を放ち伐つべきだといふ思想なり。

★辱弱 センジャク

よわいこと。辱は弱い劣るの義。〔陸士〕

★前車覆後車戒 ゼンシヤノクツガヘルハコウシヤノイマシメ

前人の失敗に鑑みて、後人は自ら戒めねばならぬといふこと。即ち前に行く車の覆つたのを見たなら、後から行く車は、前の車と同じわだちを行つてはならぬとの意。〔海經・臨教・小商〕

★餽粥不給 センジュクモキフセズ

かゆすらも食べることが出来ぬ程貧しいこと。後漢書に「朝暮送餽粥」とある。〔慶大・京城醫〕

★先蹤 センシヨウ

古人のあしあとの義。前人のなしたる事績。先例。〔明專・醫專〕

★千緒萬端 センシヨバンタン

色々雑多な事。〔京城醫〕

★先生 センセイ

我より先に生れて道をわきまへ知れる人。孟子に「稱レ師曰先生」とあり、又「先生將何之」とある。

★宣誓 センセイ

のべちかふこと。

★潜勢力 センセイリヨク

ひそみかくれたる力のこと。〔水農〕

★戦々兢兢 センケンキョウキョウ

恐れいまして落付かぬこと。詩經に「戦々兢兢、如履薄氷」とある。

★踐祚 センソ

天皇の御位につき給ふこと。登極。踐はフムなり、祚は位なり。禮記に「踐祚臨祭祀」とある。而して踐祚と即位とは區別すべし。即ち踐祚は天子の位を繼承し給ふをいひ、即位はその踐祚したることを天下萬民に告げさせ給ふこと。〔專檢・尺高・桐染〕

★選擇 センタク

えらびとること。孟子に「選擇而使レ子」とある。〔長商・桐工〕

★然諾 ゼンダク

★蟬脫 センダツ

舊いことを棄て去り一新すること。せみがもぬける義による。〔水農〕

★旃檀從二葉一香 センタンハフタバヨリカンバシ

偉い人は子供の時から優れてゐるといふこと。即ち旃檀といふ香の高い木は二葉の時から最早芳香を放つといふ義による。〔海經〕

★善智識 ゼンチシキ

能く人を善に導く高德のある僧のこと。高僧。名僧。〔北大・小商・岐農〕

★千丈之堤以二螻蟻之穴一潰 センチャウノツミミモロウギノアナヲモツテツヒシ

小さな事でも注意せぬと遂に大事が破れるといふ事。即ち大きな長い堤も小さな虫の穴から破れる。油斷大敵。韓非子に「千丈之堤、以二螻蟻之穴一潰、百尺之室、以二突隙之烟一焚」とある。突隙はケムリダシ。〔海經〕

★芟除 センヂヨ・サンジヨ
除くこと。賊を滅すこと。

★筌蹄 センテイ
物を捕へる具。又方便の具のこと。筌は魚を引き寄せ

て捕ふる具、蹄は兔などを捕ふる具。莊子に「筌ハ魚ニ在ル所以、魚ヲ得テ而シテ筌ヲ忘ル。蹄ハ兔ニ在ル所以、兔ヲ得テ而シテ蹄ヲ忘ル。昔ハ意ニ在ル所以、意ヲ得テ而シテ言ヲ忘ル。吾レ安ソ夫ノ言ヲ忘ル、ノ人ヲ得テ、之ト共ニ言ハンヤ」とある。

★前提 センテイ
或事柄の基となるもの。三段論法にては大前提、小前提より結論を得るのである。「鹿農」

★先哲 センテツ
既に世を去りし智徳のすぐれたる人のこと。曹植の句に「徳配姜源、不辱先哲」とある。

★先天 センテン
生れぬ先から持つてゐるもの。事に對し後天は生れた後經驗によつて得たるもの。

★宣傳 センデン

あまねく知れ渡るやうにのべ傳へること。「山商・神宮・米工・音樂」

★先途 セント
大事な時といふこと。

★仙洞 センドウ
(1)仙人の居所。(2)上皇の御所。「千醫・廣高師・女高師」

★煽動 センドウ
おだてること。煽はあふる、動はうごかす。

★先入爲主 センニフシユとナ
さきに聞いた方が信ぜられ易いといふこと。漢書に「觀三覽古戒、反覆參考、無以先入之語爲主」とある。「金醫・盛農・神商」

★千人諾諾、不如一士諤諤
センニンノダク／＼ハイツシノガク／＼ニシカズ
衆愚は一賢に如かずといふこと。善惡の別なく君命に聽従する多数の臣よりも、君の惡を諫める一人の直言の士が勝れてゐるといふ義。史記に「趙良曰ク、千羊ノ皮ハ、一狐ノ腋(ワキノシタ)ニ如カズ。千人諾々、不如一士諤々ト。僕請フ、終日正言セン、可ナランカ」

ト。高峽君曰ク、語ニ之アリ、親言ハ華ナリ、至言ハ實ナリ、苦言ハ藥ナリ、甘言ハ疾ナリ。子樂シテ終日正言スルナラバ、鞅ガ藥ナリト」とある。「東高師」

★羨望 センバウ
うらやましいこと。

★千篇一律 センベンイチリツ
何時も同じ調子のこと。「高松商」

★著二先鞭 センベンツク
人に先だちて事をなすこと。晋書に「恐先我著二鞭」より出づ。

★宣命 センメイ・センミヤウ
天子のみことのりのこと。「専檢」

★開明 センメイ
ひらきあきらかにすること。「廣高師・海兵・金工」

★殲滅 センメツ
みな殺しにすること。

★前門拒虎、後門進狼
センモンニトラをフセいでコウモンにオホカミをス、

一難去つて又一難來ること。「海兵」

★宣揚 センヤウ
廣く天下に表はすこと。のべあげる。國體宣揚。「外語」

★千羊皮不_レ如_二一狐腋_一
センヤウノカハハイツコ
衆愚は一賢に如かざる譬のこと。即ち千匹の羊の毛皮よりも一匹の狐の腋の下の毛皮がよいといふ義。千人諾々を見よ。「東高師」

★戰慄 センリツ
ふるへ恐れること。「商船」

★旋律 センリツ
音聲の規則正しい抑揚調子のこと。

★川柳 センリウ
五七五の三句で出來て、極めて諧謔諷刺のふうのあるもの。江戸時代桐井川柳の詠みはじめたものである。「名商・國大」

★僭越 センエツ
分に過ぎること。僭とは節を踰ゆること。「東亞」

ソの部

★總角 ソウカク

アゲマキといふ昔の子供の髪^{カミ}の結方。轉じて幼時のこと。總角^{トウカク}好^{ヨシ}は幼時の親交なり。

★綜合 ソウガフ

別々のものを一所に集めまとめること。

★總括 ソウクワツ

一まとめにすること。

★宗社 ソウシャ

宗廟社稷の略て國家のこと。宗廟は祖先のおたまや。社稷は土地の神・穀物の神。周禮に「職掌^{シヨウ}建^{ケン}二國之神位^{シノヒ}、右社稷、左宗廟」とある。

★宗匠 ソウシヤウ

すべて師匠たる者のこと。工師のことより轉ず。

★宋襄之仁 ソウジャウノジン

つまらぬ讓歩又はなさけのこと。左傳に「宋ノ襄公、楚ト戦フ。公子目夷、敵ノ未ダ陣セザルニ及ビテ、之ヲ撃タンコトヲ請フ。襄公曰ク、君子ハ人ニ阨ニ困シ

メズト。遂ニ楚ノ爲ニ破ラル。世笑ツテ宋襄之仁ト爲ス」といふ故事に據る。〔千園〕

★操縦 ソウジユウ

あやつること。〔名工〕

★叢書 ソウシヨ

同種の書を集めまとめて一部の書としたもの。漢學叢書。

★宗族 ソウゾク

一家一門のこと。

★宗秩寮 ソウチツレウ

宮内省の一寮のこと。〔高松商〕

★宗廟 ソウベウ

皇室の祖靈をまつた宮のこと。おたまや。宗廟不ニ血食^{ケツシキ}、は國家の滅亡したること。〔尊檢・高校・海經〕

★聰明 ソウメイ

かしこくさといふこと。聰は聞かざる所なく、明は見ざる所なき義なり。荀子に「聰明^{メイ}、守^シ之^ノ以^テ、愚^ノ、功^ノ被^ルニ天下^ノ、守^レ之^ノ以^テ、讓^ル」とある。

★綜覽 ソウラン

★粟散邊土 ソクサンヘンド

邊鄙な小國のこと。

★束脩 ソクシウ

入門のときの禮物のこと。進物。入門料。脩は脯にして乾肉なり。脯^ホを十個束れたるを束脩といふ。論語に「子曰ク、束脩ヲ行フヨリ以上ハ、吾レ未ダ嘗テ誨ウル無クンバアラズ」とある。

★即身成佛 ソクシンジャウブツ

その身そのまま佛になること。

★族籍 ソクセキ

人民の階級のとらへ。又華族・士族・平民と本籍のこと。

★蹇々匪躬之節 ソククノヒキユウノセツ

臣が君に對する滿身の忠節のこと。

★束帶 ソクタイ

冠をつけ帯を結びて威儀をととのふること。〔高檢・廣高師・專檢・農大・京注〕

★續貂之譏 ソクテウノソシリ

つまらぬ物を以て、よき物につぐといふ譏のこと。續

全體を見ること。覽は見るなり。

★總攬 ソウラン

一手に握ること。攬は手に握るなり。

★憎惡 ソウワ

にくみ嫌ふこと。〔筑嶺・高文・醫專〕

★租界 ソカイ

外國人の居留地のこと。〔高松商〕

★阻隔 ソカク

はばみ隔てること。〔海嶺〕

★惻隱之心 ソクインノココロ

いたましく思ふ心のこと。惻はイタム^ハの切なるなり、隱は痛の深きなり。孟子に「惻隱之心仁之端也、羞惡之心義之端也、辭讓之心禮之端也、是非之心智之端也」とある。〔長商〕

★即興 ソクキヨウ

その場の興味といふこと。即吟。

★息災 ソクサイ

無事無病のこと。息はやむ、絶える。災難を絶えしめる義による。

ソの部

紹之議はつまらぬ議論のこととなる。〔日醫〕

★俗念 ソクネン

さとれぬ俗な考のこと。〔早高〕

★仄聞 ソクブン

ほのかに聞くこと。

★素懷 ソクワイ

平素の志。素志。

★即位 ソクキ

皇位につかせられた事を天下萬民に告げ給ふ儀式のこと。踐祚の部を見て踐祚と區別すべし。

★素絹 ソケン

白い絹のこと。僧衣。〔大分商〕

★齟齬 ソゴ

物ごとがくひ違ふこと。豫期に反すること。商が上下そろはぬ義よりなる。〔北大・大商・大外語〕

★蔬菜 ソサイ

野菜もの。

★沮喪 ソサウ

氣力がくじけて無くなること。意氣沮喪。〔鹿農〕

★塑像 ソザウ

土で作つた像のこと。〔大阪商〕

★素餐 ソサン

無能者が功無きに高位高官にゐること。〔海欄・東高師・臺脚〕

★志素 ソシ

平素の志のこと。素懷。

★措辭 ソジ

言葉の使ひ方のこと。

★祖師 ソシ

一派の宗門を開いた人のこと。

★楚囚 ソシウ

囚はれし人のこと。俘虜。晋國にとりこたつた楚人の義より轉じ来る。

★咀嚼 ソシヤク

(1)かみ砕くこと。(2)詠味すること。(3)了解すること。

★租述 ソジユツ

その道に本づいて述べとくこと。中庸に「仲尼祖述」

堯舜二憲三章文武二とある。〔福商・廣高師・大農教・京法〕

★沮洳 ソジヨ

水にひたりし地のこと。〔廣高師〕

★止謗莫如自修

ソシリをトモむるはミツカチラサむるにシクはナシ他人から謗られるのを止める方法は、自ら身を修め修養をなすに勝る方法はないといふこと。〔廣高師〕

★粗成濫造 ソセイランザウ

粗末なつくり方で物をみだりに造ること。〔東商大〕

★祖宗 ソソウ

現代以前の歴代天子のこと。漢書に「古者祖有功而宗有德」とある。

★措大 ソダイ

(1)才學に秀でたる者。秀才。(2)書生。措大は本来、大事を措置するに足るの義に用ひたるものであるが、後世は轉じて一般に嘲罵又は謙遜の意を表はす場合に用ひるやうになつた。窮措大、老措大などいふ。

★祖道 ソダウ

ソの部

★卒爾 ソツジ

發別の宴會のこと。書言故事に「黃帝ノ子皐祖、遠遊ヲ好シテ道ニ死セシヨリ、後世、之ヲ道ノ神トシテ祭り、旅スルモノアレバ、ソノ傍ニテ饌別ノ宴ヲ開ク。依ツテ送別ノ宴ヲ祖道トイフ」とある。〔北大・大農教・陸士〕

★率先 ソツセン

衆人に先き立つこと。史記の「丞相晉所レ重、其率先レ之」より出づ。

★率直 ソツチヨク

さつぱりとして正直なこと。〔專檢〕

★俎豆 ソトウ

祭器の名。祭禮の食物を盛つて供へる臺とたかつき。〔專檢〕

★素讀 ソドク

大ざつばな読み方のこと。

ソの部

★素封家 ソホウカ

金満家のこと。素は空なり。官位秩祿なき人にして、田園收養の富の封侯に等しきをいふ。史記に「今有下無ニ秩祿之奉、爵邑之入、而樂與之比者上命、曰素封」とある。「専檢・山商2・外語・長商・愛賢・神商大」

★征矢 ソヤ

戦に用ひる矢のこと。「高校・法大」

★素養 ソヤウ

平素學徳を養ひ修めておくこと。漢書に「士不素養、不可以重國」とある。「高校」

★疎遠 ソエン

音信の遠くなること。御無沙汰。

★損友 ソンイウ

交際して損になる友人のこと。益友の對。「長商」

★村學究 ソンガクキウ

田舎の學者のこと。

★存外 ソングワイ

思の外といふこと。案外。

★遜色 ソンシヨク

他に一步をゆづる様子のこと。遜はゆづるなり。無遜色といふ。

★尊俎 ソンソ

酒宴の席のこと。尊は樽で酒を入れるたる、俎はまたいたて肉を載せる器。酒宴の席の意より轉じて平和の交際のこととなる。折衝尊俎之間は兵力を用ひず、平和の間に國威を張ること。後漢書に「起謀於尊俎之間」とある。

★樽俎折衝 ソンソセツシヨウ

平和の交際の間にかきひきや談判をして自國の國威を掲げること。樽俎は尊俎と同じく、酒宴の席の意より平和の交際のこととなる。春秋に「孔子曰、不出樽俎之間而折衝千里之外」とある。

★付度 ソンタク

他人の意中を思ひ察すること。付は思ふなり、度ははかるなり。詩經に「他人有レ心、予付二度之」とある。

★存亡禍福在己 ソンバウクワフクハオノレニアリ

立ち行くも滅びるも、禍も福もみな自分の勢力如何にあるといふこと。

★村夫子 ソンフウシ

田舎の先生のこと。陸游の句に「今朝偶々偶三村夫子、借得齊民一策書」とある。

夕の部

★退嬰 タイエイ

しりごみしてあとしざりすること。進取の對。「名商・桐工」

★退耕 タイカウ

官を退いて耕作すること。歸農。「横商」

★大行不顧細瑾 タイカウハサイキンヲカヘリミ

大事をなす者は小事に拘らざること。史記の「大行不顧二細瑾一、大禮不レ辭二小讓一」に本づく。

★臺閣 ダイカク

政治の中心となる官廳のこと。即ち内閣の意。

★大廈高樓 タイカカウラウ

大きな建物のこと。宏壯雄大な建物。

★大喝 タイカツ

大聲でしかること。大喝一聲。

ソ・タの部

★對岸之火災視 タイガンノクワサイシ

自分にとりて少しも痛痒を感じない事の如く見なすこと。「京城醫・朝大」

★大義滅親 タイギオヤヲメツス

君國の爲にするといふ大いなるすぢ道のためには、一家親族をすてゝかへりみないといふこと。左傳に出づ。

★大器晚成 タイキバンセイ

大なるうつわ、即ち才人は成功がおそいといふこと。後漢書に「大鐘、大鼎、一朝一夕ニ成ラズ。汝、大才、當ニ晚成スマシト」とあり、論衡に「大器難レ成、寶貨難レ售」とある。

★大義名分 タイギメイブン

臣民の君國に對して守るべき義理と、名を正し分を守り秩序を維持する所の分限のこと。共に人の是非とも守るべき重大なる本分である。「高松商・水産」

★太極殿 タイキョクテン・ダイゴクテン

天子の朝政を聞き給ふ正殿のこと。

★體験 タイケン

實際に身に經驗して得たること。

★大功若拙 ダイコウワカク タイコウはセツのゴトシ

眞に巧なる者は却つて其の巧なるを表はさざること。

★成大功者不謀衆 ダイコウヲハハス タイコウをナすモノはシユ

大なる功を成す者は獨斷にて之をなす。衆に謀れば徒らに議論のみ多くして成功し難しとの意。

★大倉稊米 ダイサウノテイメイ

多くの中に唯一つあること。大海の一滴といふに同じ。

★對策 タイサク

物事に應ずるはかりごと。本來は支那で政事經義の間を出して、人を試験するとき、受験者が之に答へる文章のこと。

★泰山不讓土壤故能成其大 タイサンハドジヤウヲユツラズニユキヨクソノダイヲナス

度量の廣くして多く物を容るゝものは、大人物となる。李斯の逐客上書に「泰山不讓土壤、故能成其大、河海不讓細流、故就其深、王者不却衆庶、故能明其德」とある。

★對象 タイシヤウ

目的物のこと。〔陸士・東高師・米工・岐農〕

★對照 タイシヤウ

くらべて見ること。反對の比較。〔和商〕

★大上立德 ダイジョウタク ダイジョウはトクをタツ

人の最高の行は徳を立て世を始め人を濟ふことであるといふこと。

★大丈夫 ダイジャウフ

立派なる男子といふこと。大は稱美の辭なり、丈夫は一人前の男子なり。

★大車輪 ダイシャリン

忙しく大奮發してその事を爲すこと。大車輪の活動なといふ。〔海欄〕

★大聲不俚耳 ダイセイハリジニイラス

高尚なる言論は俗人には分らないといふこと。正しき音楽が俗人の耳には分らぬ義よりなる。莊子に出づ。〔普文・海欄・陸士〕

★大蠶 ダイタク

天子のみはた、天皇旗のこと。〔盛農〕

★大團圓 ダイダンエン

をばり、終結のこと。〔陸士〕

★台鼎 タイテイ

三公のこと。三公は人臣の最高位にして國家の要職なり。台は星の名、天に三台星あり、鼎に三足あり、故に象を三台星と、鼎の三足ととりて台鼎といふ。後漢書に「位登三台鼎」とある。〔日啓〕

★退轉 タイテン

うつり變ること。不退轉の精神などいふ。〔海兵〕

★秦斗 タイト

人を仰ぎ尊びていふ語のこと。即ち泰山北斗の略にして、泰山と北斗星とは衆人の常に仰ぎ見るものである故による。〔高校2・専檢・外語・水産2・海欄・京盤〕

★擡頭 タイトウ

頭をもちあげること。段々勢のつくこと。

★大同小異 ダイドウセウイ

大體同じて少し異なること。大した差はないこと。

★大徳減小怨 ダイタクセウエン をホロぼす

大なる徳は小なる怨恨を減すといふこと。左傳に出づ。

★大旆 タイハイ

夕の部

天子又は將軍の旗のこと。〔陸士〕

★頽廢 タイハイ

くづれたれること。

★乃父 ダイフ

汝の父の義で、君主が臣民の父を稱する語。又父が其子に對していふ自稱。書經に「既勞乃祖乃父」とある。

★台命 タイメイ

高貴の方の命令のこと。

★台覽 タイラン

見るの敬語なり。高貴の方の物を御覽になること。今は主として皇族にいふ。〔廣高師〕

★内裏 ダイリ

天皇の住ませ給ふ所のこと。皇居。内裏は天子の御様になぞらへた雛人形のこと。〔女高師・廣高師〕

★台臨 タイリン

高貴の方の御臨場になること。〔航欄〕

★當意即妙 タウイソクメウ

その場合に適してうまくやること。〔海兵・愛醫〕

★道學者

ダウガクシヤ
(1)道徳を主として道をとく學者のこと。(2)道學の稱は程子に始まり、朱子に至りて盛んなりしなり。大學の序に曰く「子思子憂、道學之失、其傳」とある。「陸教・廣高師」

★當局

タウキヨク
其の事を處理する任に當るものこと。當局者。唐書に「當局者迷、傍觀者審」とある。「女高師」

★韜晦

タウクワイ
才徳などを包みかくして人に知らせないこと。「東商大・海機」

★刀圭家

タウケイカ
醫者のこと。刀圭は藥を盛る匙にて分量をはかるをいふ。詩に「量藥用三刀圭」とある。

★讜言

タウゲン
直言又は善言のこと。讜は正直な言。讜直は直言して憚らぬこと。「神商大」

★韜鈴家

タウケンカ
兵法家のこと。韜は弓袋なり、鈴は矛の柄なり。古の

兵法の書に六韜と玉鈴篇とがある。故に韜鈴を兵法の義とするのである。

★蹈襲

タウシフ
前人の言論・文章其他主義方針等を其の儘うけつぐこと。金史に「作詩極三刻苦、不蹈襲前人」とある。

★堂上方

ダウジヤウガタ
公卿の敬稱のこと。昔は昇殿を許された四位以上の公卿の稱なりしも、後世は廣く公卿の稱となつた。堂上の反對は地下なり。

★瞠若

ダウジヤク
目をみはつて驚くさま。瞠は直視すること、若は助辭なり。莊子に「夫子奔逸絶塵、而回瞠三若乎其後」とある。

★陶朱猗頓之富

タウシュエイトンノトミ
大富豪のこと。陶朱と猗頓とは共に支那春秋時代の二大富豪なり。陶朱は越王句踐の賢臣の范蠡のこと。史記に「范蠡、陶ニ止り、以爲ラク、陶ハ天下ノ中、四ニモ通ジ、貨物ノ交易スル所ナリト。産ヲ治メ積居シ、三タビ千金ヲ致シ、自ラ稱シテ陶朱公トナス。子孫業

ヲ修メテ之ヲ息シ、遂ニ巨萬ニ至ル。故ニ富ヲイフ者皆陶朱公ヲ稱ス」とある。「猗頓の富も参考すべし」

★蕩盡

タウジン
費ひ盡すこと。「神商・稷農」

★當世薩摩守

タウセイサツマノカミ
汽車・汽船・自動車・電車などに無料金で乗ること。當世は現代、薩摩守は平忠度の官名からタノリ(只乘)の意に用ひたもの。「同志」

★刀泉

タウセン
錢のこと。錢を刀といふのは其の民に利なること刀の利なる如しとの義。又錢を泉といふは其流行して天下に遍からざるなきを以てなり。

★淘汰

タウダ
よしあしを選びて、其の惡を去り其の善をすぐり捨ふこと。淘、汰ともに「洗ふ」又「よなぐ」と訓む。不用のものを洗ひ去るをいふ。「陸士」

★滔滔

タウタウ
水の流れて返らざるさま。水の盛んに流れるさま。能

辯の形容。論語に「滔滔者天下皆是也」とある。「和商」

★道聽塗說

ダウテイトセツ
道で聞いたことを又すぐみちで話すこと。善言を聞いても深く心に留めて己の有とせざること。輕薄なる人のなすことなり。論語に「道聽而塗說、德之棄也」とある。「高校」

★道徳

ダウトク
人として必ず行ふべき正しい道のこと。

★唐突

タウトツ
だしぬけといふこと。不意。馬融の語に「守規不固兮、爲所唐突」とある。「千園」

★道破

ダウハ
いひやぶること。論破。「海機・海兵・陸士・東北大・北大」

★刀筆吏

タウヒツノリ
字を書くのみ的小吏のこと。古は竹簡に文字を記せし

により小刀と筆を用ひたり。史記に「蕭相國何、於三秦時爲三刀筆吏」とある。

★陶治

入材を育成し鍛へること。陶は焼いて器を造ること、治は金屬を鑄ること。漢書に曰く「臣聞ク、命ハ天ノ令ナリ。性ハ生ノ質ナリ。情ハ人ノ欲ナリ。或ハ天、或ハ壽、或ハ仁、或ハ鄙。陶冶シテ之ヲ成スモ、粹美ナル能ハズ」と。「山商・水産・東商大・盛農・眞大・桐工・熊工・陸士」

★蟻螂之斧

タウラウノヲノ 自らの力をはからずして大敵にあたること。蟻螂はカマキリ。莊子に「蟻螂之怒レ、臂以當三車轍」とあり、又「蟻螂回三盤車」とある。即ちカマキリが鎌で車の通路をひきとめる義より前出の意となる。「海兵・水産」

★桃李不言下自成蹊

タウリイハザレドシモオノ 德行ある人は不言のうち人に佩服せしめるといふこと。即ち桃や李もよには善い花実がある故、自然に人が寄り来つて樹下に道が出来来る義なり。史記に「太史

公曰ク、傳ニ曰ク、其ノ身正シケレバ、令セズシテ行ハル。其ノ身正シカラザレバ、令スト雖モ從ハズト、其レ李將軍ノ謂ナリ。余李將軍ヲ見ルニ、悛々トシテ鄙人ノ如シ。口道辭スル能ハズ。死スルノ日ニ及ンデ、天下知ルト知ラザルト、皆爲ニ哀ヲ盡ス。彼レ其ノ忠實ノ心、誠ニ士丈夫ニ信セラレタレバナリ。諺ニ曰ク、桃李不レ言、下自成蹊ト。此ノ言小ト雖モ、以テ大ニ喻フベシ」とある。「専檢・陸士・名高」

★當惑

タウワク 施す手段に惑ひこまること。「鹿農」

★雲

ダウ 他人の手紙の敬稱。芳墨。「横商・眞蠶」

★蛇蝎視

ダカツシ 蛇とさそりのやうに最も嫌ふこと。

★高御座

タカミクラ 陛下の玉座のこと。「山商」

★貨悖而入者亦悖而出

カタラモトリテイモノハマタモトリテイブ 不正の行爲によつて得た財貨は、亦不正の爲に失はれ

るといふこと。大學に「言悖而出者亦悖而入、貨悖而入者亦悖而出」とある。「海樓」

★唾棄

ダキ 唾をはきかけて棄てるやうに忌み棄てる。「陸士」

★瀧口

タキグチ 御所の守護に當つた武士のこと。

★多岐亡羊

タギバウヤウ 學問の道の多くして眞理を得ることの困難なる喻。列子に曰く「楊子ノ隣人羊ヲ亡セリ。既ニ其ノ黨ヲ率キ、又楊子ノ豎ニ請ヒテ之ヲ追フ。楊子曰ク、吁一羊ヲ亡ス、何ゾ追フ者ノ衆キヤト。隣人曰ク、岐路多ケレバナリト。既ニシテ歸ル。問フ、羊ヲ獲タルカト。曰ク、之ヲ亡セリト。曰ク、爰ゾ之ヲ亡セルト。曰ク、岐路ノ中ニ、又岐路アリ。吾レ之ク所ヲ知ラズ、ハ歸ル所以ナリト。楊子曰ク、大道以ニ多岐亡レ羊、學者以ニ多方喪レ生」とある。亡羊之嘆ともいふ。「山商・専檢・小商・京城醫・名工」

★情氣滿々

ダキマンマン いやきがさして緊張をかくこと。

★謫居無聊

タクキヨムレウ 罪を蒙りて流された閑居のさびしく退屈なこと。無聊は樂みのないこと。「陸士・醫專・東商大」

★棄駝

タクダ (1)駱駝の一名。(2)植木屋のこと。柳宗元の文に「郭棄駝、不知ニ始何名一、病レ僂隆然、伏行、有テ類ニ棄駝ニ者上、故郷人號ニ之駝、駝聞レ之曰、甚善、名レ我因當、因捨ニ其名一、亦自謂ニ棄駝」とある。

★卓拔

タクバツ すぐれて群をぬくこと。卓絶。「熊工・高校」

★踔踴風發

タクレイフウハツ 議論が人にすぐれてするどく、風のやうに勢よく口から出ること。雄辯を形容していふ。「小商」

★兌換

ダクワン 紙幣を貨幣に引きかへること。正金と引換へる約定で發行した紙幣を兌換紙幣といふ。「千園」

★卓越

タクエツ すぐれこえること。衆に立ちこえること。卓絶。「水産」

★竹之園生

皇族のこと。竹園ともいふ。支那の前漢の時、孝文帝の子孝王が梁に封ぜられて園を作り竹を植えた故事から皇族のことを申上げる。〔専検・海軍〕

★妥協

互に譲歩して意見を一致せしむること。

★打算的

事をやるのに勘定づくですること。〔陸士・高校・早高〕

★他山之石

小人又は不善の人も、君子又は善人の徳器を増す具となるとの喩。即ち他山は山の名にして、その山にある石の粗悪なるは固より玉の比較ではないが、然しながら玉は石を以て磨きて始めてよく玉の美をなすといふ義より、他山之石は小人又は不善の人に比したものである。詩經に「他山之石可以攻玉」とある。〔海兵・盛農・陸士・京城商・神商大・島農・商船〕

★山車

祭禮の時、車の上に種々な飾物をして曳く車のこと。〔廣高師・外語〕

★多士濟々

才智ある人が多く揃つてゐること。詩經に出づ。〔陸士〕

★多情多恨

物事にははれを感じ、心に思ひなやむことの多いこと。

★他生縁

前世からの約束ごと。〔外語・小商〕

★蛇足

無用なること。餘計なこと。蛇を盡きて足を添へたりといふ故事なり。戰國策に「楚有三祠者、賜舍人屠酒、相謂曰、請畫地爲蛇、先成者飲、一人蛇先成、引酒且言吾能爲之足、未成、一人之蛇成、奪其尾、曰、蛇固無足、子安能爲之足、遂飲其酒、爲二蛇足者、終亡其酒」とある。〔海兵・高校・盛農・東商大〕

★妥當

無理がなくおだやかにあてはまること。適切にして當を得たること。〔鹿農・山商〕

★多々益辯

多ければ多いほど益々善く之を用ふるといふこと。多々益善に同じ。〔明専・醫専・熊工〕

★帶刀

古、東宮に仕へた護衛の士のこと。又大刀を身に帯びること。

★帶刀先生

帶刀の長官のこと。〔京城商〕

★達觀

すつかり見とほして俗事や小事に拘泥せぬこと。大觀。〔鹿農・盛農・専檢・普文〕

★達見

道理を十分に見ぬいたかんがへのこと。〔陸士〕

★達人

學藝の蘊奥を極めた人のこと。又は世の中をすつかり見とほして俗事・小事に拘泥せぬ人のこと。

★辰之刻

午前八時のこと。〔神宮〕

★突盾

夕の部

★敵對すること

敵對すること。〔高校〕

★茶毘

火葬のこと。〔山商〕

★懦夫

心のおぢけた者、意氣地なしのこと。孟子に「懦夫有立レ志」とある。

★拿捕

とらへること。拿は撃の俗字にしてつかむ意なり。

★玉之緒

いのちのこと。壽命。〔山商・福商〕

★懷璧有罪

身分不相應なものを持つて災を招くといふこと。左傳に「西夫無罪、懷璧有罪」とある。〔専檢・山商〕

★他力本願

如來の助によつて善い往生を得んとする願のこと。

★知足者富

足るを知りて、心に満足する者は富者に同じといふこと。知レ足第一富とあり、又遺教經に「不知レ足者、雖レ富而貧」とある。

★知^レ足^レ不^レ辱^レ たるをすればハツカしめられズ
足るを知りて分に安んじてゐれば、人からはづかしめ
られるやうなことはないといふこと。〔東高師・仙翁・
海經・名工〕

★誰^カ知^カ鳥^ノ之^ノ雌^ノ雄^ニ タレかカラスノシユウをシらん
區別がまぎらはしくて明かでないといふこと。即ち鳥
の雌雄は相似てゐて分ち難き故による。詩經に「具曰^レ
予^ラ聖^ト、誰^カ知^カ鳥^ノ之^ノ雌^ノ雄^ニ」とある。〔陸士・海兵・神商・
大外語〕

★坦 夷 タンイ
たひらかなこと。〔陸士・東高師・明大〕

★彈 効 ダンガイ
人の罪惡を咎めて上に告ぐること。罪をあばきたゞし
て排斥攻撃すること。〔專檢・陸士・盛農・鹿農〕

★單行本 タンカウボン
單獨に一冊ものとして出版された本のこと。叢書に對
していふ。

★斷金之友 ダンキンノトモ
極めて堅い親交を結んでゐる友のこと。又斷金之交は

至つて親密なる交といふこと。易に「二人局^ク志^ヲ、其
利^キ斷^ツ金^ヲ、同心之旨、其臭如^ク蘭^ニ」とある。即ち友情
が極めて堅く、金屬をうち切る程であるといふ義によ
る。〔海兵・千圃〕

★坦 懷 タンクワイ
心にわだかまりのないこと。虚心坦懷。〔水農〕

★彈丸黑子之地 ダンクワンコクシノチ
狭小の地のこと。庾信賦に「地惟黑子、城猶^シ彈丸^ニ」
とある。〔陸士・陸經・盛農〕

★端 倪 タンゲイ
はて、本末、終始のこと。端は山の頂、倪は水涯。莊
子に「反覆終始、不^レ知^レ端^ニ倪^ニ」とある。不^レ可^レ端^ニ倪^ニ
も始も終も分らぬ義なり。〔專檢・長商・上誦・醫專・水
農〕

★端 午 タンゴ
舊五月五日の節句のこと。あやめの節句。〔東高師〕

★端 坐 タンザ
正しく坐ること。正坐。〔商船・明大〕

★單食壺漿 タンシコシヤウ

飯を竹器に盛り、飲料を壺に入れたるものこと。旅
行に携へる。單は竹器、食は飯、漿は飲料なり。孟子
に曰く「單食壺漿、以^テ迎^テ王^ノ師^ニ」と。〔廣高師・山商・小
商・水産〕

★丹 心 タンシン

まごころのこと。赤心に同じ。文天祥の文に「人世自^レ
古^カ誰^カ無^レ死^シ、留^シ取^リ丹^心昭^シ汗^青」とある。〔廣高
師・山商・高檢〕

★丹 青 タンセイ

赤色と青色の義より繪の具のこと。漢書に「竹帛所^レ
載^ス、丹青所^レ畫^ス」とある。丹青は眞面目にせい出して勉
めること。〔海樹・海軍・小商・宇農〕

★儋石儲 タンセキのタクハ

少し許りのたくはへのこと。儋は二石、石は一石なり。
直ちに問題に觸れること。即ちたゞ一ふりの刀を持つ
て敵の中に斬り込む義による。〔東商大〕

★斷腸之思 ダンチャウノオモヒ
悲の甚だ切にして苦しい思ひのこと。搜神後記に「人

アリ、山ニ入り猿子ヲ得テ歸ル。猿母後ヨリ其ノ家ニ
至ル。此ノ人猿子ヲ庭樹ニ縛ス。ソノ母類ヲ搏チ、人
ニ向ヒテ哀ミ乞ハント欲ス。コノ人竟ニ之ヲ殺ス。猿
母悲ミ喚ビ、自ラ擲チテ死ス。コノ人腹ヲ破リ之ヲ視
ルニ、腸皆斷裂セリ」とある。

★耽 溺 タンテキ

酒色にふけりおぼれること。〔陸士・名工・朝大・宇農〕

★丹 田 タンテン

した腹のこと。〔名工〕

★檀 那 ダンナ

主人のこと。又は顧客・貴人などに對して用ひる敬稱。
又且那と音く。檀家は寺院に屬してゐる檀那の家のこと。
と。韻府に「梵語 陀那鉢底、唐言三施主、稱^ニ檀那^ト、
者、誰^カ陀^カ爲^レ檀^ト」とある。〔陸士〕

★丹之所藏 者赤 タンノザウするトコロのモノはア
人は善惡の友によりて自然に化せられるといふこと。

家語に「善人ト居^レバ芝蘭ノ室ニ入ルガ如ク、久シク
シテ其ノ香ヲ^レ聞カズ、即チ之ヲ化スレバナリ。不善人
ト居^レバ飽魚ノ肆ニ入ルガ如シ、久シクシテ其ノ臭

タ・チの部

ヲ開カズ、亦之ト化スレバナリ。丹之所^{スル}藏者赤、漆之所^{スル}藏者黑。是ヲ以テ君子ハ必ズ其ノ與ニ居ル所ノ者ヲ慎シム」とある。

★短兵接戦

タンベイセツセン
互に相近づいて刀劍を用ひて戦ふこと。短兵は短かい兵器、弓矢の類は長兵といふ。「陸士・東高師・廣高師・法大」

★旦暮

タンボ
あさばんのこと。朝夕。旦夕。又事が急迫する義に用ふ。

★斷末魔

ダンマツマ
一命の終らんとする間際のこと。臨終。「米工・九藥・明専・女高師」

★貪婪

タンラン・ドンラン
むさぼること。極めて慾の深いこと。貪は金錢をむさぼること、婪は食物をむさぼること。「陸士・鹿農」

★團樂

ダンラン
相集りて樂しむまどひのこと。傳燈錄に「有レ男不レ婚、有レ女不レ嫁、大家團樂頭、共説ニ無生活」とある。

★膽略

タンリヤク
大膽で智略のあること。「高校・米工・畫師」

★端麗

タンレイ
正しく美しいこと。

チの部

★治安

チアン
國家が安らかにをさまること。「山商」

★知音

チイン
善く己の心を知れる人のこと。知己。知友。列子に「伯牙善ク琴ヲ鼓ス。鐘子期善ク聽ク。伯牙琴ヲ鼓スルニ、志、高山ニ在レバ、鐘子期曰ク、善哉峨々トシテ泰山ノ如シト。志、流水ニ在レバ、鐘子期曰ク、善哉洋洋トシテ江河ノ若シト。伯牙ノ念フ所ハ、必ズ之ヲ得」とあるに本づく。「高校・山商・專檢・千園」

★胄子

チュウシ
長男、よつぎのこと。胄は長なり。書經に「命レ汝曲レ樂、教ニ胄子」とある。華族の子弟を華胄といふはこの義に本づく。

★抽象

チュウシヤウ
個々の物から共通の性質を引き出し、それを纏めて一つの新しい觀念とする心のはたらきのこと。具體の對なり。「廣高師・陸士・早高・高松商・滿工」

★疇昔

チュウセキ
過去、むかしのこと。疇は發語の辭。「名商・仙工」

★惆悵

チュウチャウ
なげき恨むこと。惆は失意なり、悵は恨むなり。後漢書に「情惆悵、以増レ傷」とあり、又白居易の詩に「惆悵春歸留不レ得、紫藤花下漸黄昏」とある。

★躊躇逡巡

チュウチュウシンジュン
ためらひてしりごみすること。「小商・海兵」

★稠密

チュウミツ
こみあつてゐること。人口稠密。「鹿農」

★儔侶

チュウリョ
たぐひ、なかまのこと。儔四。

★癡漢

チカン
馬鹿者のこと。北史に「李集強諫不レ屈、帝笑曰、天下有ニ如レ此癡漢」とある。痴は癡の俗字なり。

チの部

★知己

チキ
善く己れを知る人のこと。知音。知人。史記に「士爲ニ知レ己者ニ死、女爲ニ説レ己者ニ容」とある。「專檢・水産・國大・小商・神商大」

★遲疑逡巡

チギシンジュン
疑ひおそれしりごみし決斷のつかざること。

★知行

チギヤウ
封土・領土のこと。チカウと讀む時は、知ると行ふとのこと。「高松商」

★池魚之殃

チギヨノワザハロ
意外の所に災害の及ぶこと。多く類焼に用ふ。風俗通に「宋城門失レ火、自汲ニ取池中之水ニ而空三竭池魚ニ也」とある。

★値遇

チグウ
稀にあふこと。値遇の縁。又人に知られて重用されること。知遇。「陸士・大分商」

★蓄積

チクセキ
たくはへること。貯蓄。「鹿農」

★忸怩

チクヂ

はづるさま。きまりの惑るさうなさま。〔高校・名工・鹿鹿・三農〕

★逐條審議

チクアウシンギ 一條毎に條を逐ふて審議すること。

★逐電

チクデン 逃げてあとをくりますこと。〔水産・高校〕

★竹帛

チクハク 書物のこと。竹は竹のふだ、帛はきれ。古代は紙なく、故に竹帛に書した。史記に「祖宗ノ功德、竹帛ニ著シ、萬世ニ施シ、永々窮リ無ケン」とある。竹帛の功とは書物の上に勳功を残し止むること。〔水産・高校・京鷲・小商〕

★竹馬之友

チクバノトモ 竹馬に乗つて共に樂んだ友のこと。幼な友達。〔海欄〕

★竹林之七賢

チクリンノシチケン 支那の晋代に交友厚く、老莊の學などに就いて話しあふた嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎の諸隱遁者のこと。又清談の徒といふ。

★舳 艦

チクロ 舟のへききともものこと。舳艦千里、舳艦相衝などいふ。〔東商大・慈醫〕

★逐鹿戰

チクロクセン 本來支那に於ては鹿を以て帝位に比し、之を争ふことをいふ。又後世利を争ふこと。魏徴の詩に「中原復逐鹿、投筆事戎軒」とある。又淮南子説林に「逐鹿者、不顧兎、決千金之貨者、不爭銖兩之價」とある。我が國に於ては大勢で勝負を争ふこと。又鹿を以て議員の地位に比し、當選を争ふ場合に用ふ。逐鹿場裡などいふ。〔盛農〕

★舳艦千里

チクロセンリ 船が多く前後千里も相連なるといふこと。舳は船後、舳を持つ所なり。艦は船前、權を刺す處なり。〔山商〕

★竹園

チクエン 皇族のこと。竹之園生の部を見よ。〔海軍・海兵〕

★笞刑

チケイ 鞭で罪人の體をたたくこと。〔外語〕

★絺綌

チゲキ 葛布（かたびら）のこと。

★褌奪

チダツ はぎらばふこと。資格・官位・勳章などをとりあげること。〔名工〕

★致知格物

チチカクアツ 事物の理を窮め、我が知をそこ迄致すこと。〔大分商〕

★父子

チチチチタリココタリ 父は父としての道を盡し、子は子としての道を盡すといふこと。即ちこれは儒教の正名論で、孔子は「君、君タリ、臣、臣タリ、父、父タリ、子、子タリ」と言はれたが、この八字の中、上の方の四字は「名」であり、下の方の四字は「實」である。即ち君といふ名を有つたものは君といふ實を具へよ、臣といふ名を有つたものは臣といふ實を具へよ、父、父子、亦然りであるといふのである。〔盛農・愛憎大〕

★蟄居

チツキヨ 人がとちこもつてゐること。

★地方色

チハウシヨク 其の土地の特色のこと。〔陸士〕

★千早振

チハヤブル

★置酒

チシユ 酒宴を開くこと。軍中に置酒などいふ。〔海欄〕

★癡人前説夢

チジンノマヘニユメをトク この上もなく馬鹿々々しきことの喩。馬鹿者に夢の話をするなり。

神・人にかけて言ふ枕詞。〔米工〕

★治兵振旅 チハイシンリヨ

兵を治め衆をととのへて歸ること。左傳に「三年、而治兵、入而振旅」とある。〔陸士〕

★綴密 チミツ

きめがこまかいこと。又こまかで手落がないこと。精巧緻密。〔長商〕

★魍魅魍魎 チミマウリヤウ

種々の怪物のこと。魍魅は山林の異氣の生ずるところ、魍魎は水の神。皆怪物にて人の害をなす。左傳に「魍魅魍魎莫能終之」とある。魍魎は罔雨とも書く。

★致命 チメイ

命をさしげること。又その爲めに死ぬこと。致命傷。〔米工・盛農〕

★知命之年 チメイノトシ

五十歳のこと。論語の「五十而知天命」より出づ。〔專檢〕

★除目 チモク・チヨモク

任官すること。除は官に拜する、目は目錄の義で、任

★打擲 チヤウチヤク

なぐること。

★丈夫 チヤウフ

一人前の男子のこと。周の制で八寸を尺とし、十尺を丈と爲す。人の長は八尺故に丈夫といふ。ジャウフは達者なこと。

★長物 チヤウブツ

無用なもの。無用の長物。

★丈夫非無涙不灑離別間

チヤウフナンダナキニアラザ、リベツのカンにソ、ガズ

★張本 チヤウホン

男子の目に涙がないことはないが、離別などの私事の爲めには涙を流さぬといふこと。

★頂門一針 チヤウモンノイツシン

人の急所を抑へて痛切な戒を加へること。頭上に一本の針をさす義による。針は箴にてもよし。又頂門金椎も同じ意なり。〔北大・福商〕

官し目錄に記すること。支那では官吏を任免した報告書。〔廣高師・高校・北大・法大・明高・日醫・京醫大・龍大〕

★長廣舌 チヤウクワウセツ

長たらしくしゃべること。多辯。

★長頸烏喙 チヤウケイウカイ

長いくびと尖つた口のこと。殘念・貪慾の相をいふ。

★暢月 チヤウゲツ

陰曆十一月のこと。

★長袖者流 チヤウシウシャリユウ

公卿の家のこと。〔米工〕

★長袖善舞、多錢善賈 チヤウシウヨクマヒ、タセ

何事でも資財に富む者は事を爲すのに巧みだといふこと。即ち長い袖の着物を着てゐる者は舞が上手で、金持は商賈がうまいといふ義による。〔東高師〕

★逸長蛇 チヤウダをイツス

機會をのがすこと。

★悵悵 チヤウチヤウ

うらみかなしむさま。悵悵。〔海兵・神商大・岐農〕

★長夜之飲 チヤウヤノイン

夜は既に明けても向戸を閉じ、燭をつけて宴を張つてゐること。史記に「爲長夜之飲、百姓怨望」とある。

★著想 チヤクサウ

考をつけること。構想。〔小商・水農〕

★嫡子 チヤクシ

あとつぎのこと。嗣子。嫡流は本家の家筋、正統の血統といふこと。〔海兵・水産・山商〕

★著服 チヤクフク

身につけて我が有とすること。〔法大〕

★餉臺 チヤブダイ

チヤブダイのこと。食卓。〔米工〕

★中葉 チユウエウ

なかごころのこと。中世。〔大東・西南〕

★忠孝无二、文武不岐 チユウカウニナク、ブン

忠と孝とは元來同じもので、君に對して己を盡せば忠となり、親に對して己を盡せば孝となつて別々のものではない、文と武とも元來合して一道となるべきもので、別に分れる筈のものではないといふこと。〔海經〕

★忠孝兩全 チユウカウリヤウセン
君に忠を盡し、父母に孝を盡して兩道を全うすること。

★誅求苛察 チユウキウカサツ
監督・取締・政治等の厳し過ぎて不可なること。誅求は何處までも追ひ求めること。苛飲誅求はむごいとりたてのこと。

★中華 チユウクワ
世界の中央に位せる文明國の義にして、支那人が自ら其の國を稱する語である。

★中堅 チユウケン
最も精銳なる部分のこと。即ち上中下三軍の中、中軍の兵のこと。最も精銳なる故に稱す。

★中原之鹿 チユウゲンノシカ
中國の帝位といふこと。中原は中國なり。而して鹿を以て帝位・又は大祿に喩へ、それを争ふことを逐鹿戦といふ。同部を見よ。

★忠言逆耳 チユウゲンミミニサカラフ
忠實の諫言は快よく聞かれないといふこと。孔子家語

に「良藥苦於口、而利於病、忠言逆於耳、而利於行」とある。

★中興 チユウコウ
一旦衰へた世が再び興り盛んになること。中は當るなり。建武之中興。「幽教・曹文・早高・專檢」

★仲秋 チユウシュウ
舊八月十五日のこと。八月十五日は秋の半なり、故に云ふ。「商船」

★中傷 チユウシユウ
他人の悪事を發きて其の名譽を故意に傷けること。漢書に「雖中傷、莫有怨者」とある。「東協大」

★忠恕 チユウジヨ
己れを盡し己れを推して他人を思ひやること。論語に「夫子之誨忠恕而已矣」とある。

★忠信 チユウシン
まこと。心に誠あるを忠といひ、行に誠あるを信といふ。「廣高師」

★忠臣與孝子不爲昭昭之節、不爲冥冥之墮行

チユウシンとカウシはセウノのタメにセツをノベズメイノのタメにオコナヒをオトクズ

忠臣と孝子とは人が見てゐるからと云ふて、その爲に殊更に節義の行をすることなく、又人が見て居らぬからとて、その爲に悪い行をすることはない。その行には表裏の區別をしないといふこと。「新醫」

★忠臣不事二君 チユウシンハニクンニツカヘズ
忠義なる臣は二人の君に事へぬといふこと。史記に曰く「忠臣不事二君、烈女不更二夫」と。

★柱石之臣 チユウセキノシン
家の柱石の如く、國家を維持する大臣のこと。

★中道 チユウダウ
事業のなかばのこと。又偏せざる正しき道のこと。

★重鎮 チユウチン
おもいおさへとなるもの。

★冲天 チユウテン
天にのぼること。意氣冲天。「甲南」

★中庸 チユウヨウ
偏よらずして不易なる理のこと。又四書の一つにして

書名。中は偏らず過不及なきことなり、庸は不易なることなり。中庸に「君子中庸、小人反中庸」とある。

★黜陟 チユツチヨク
無能の者をしりぞけ、功勞ある者をのぼせ用ひること。黜はシリゾケル、陟はアゲル。舜典に「黜陟幽明」とある。幽は暗なり。「五高・二高・三高・陸士・盛農・東商大・廣高師・專檢・東醫」

★怵惕 チユツテキ
おそれて心の落付かないこと。怵は恐れる義。孟子に「皆有怵惕懼之心」とある。「新醫」

★徵逐 チヨウチク
招いたり招かれたりして往き來すること。韓愈の文に「酒食遊戯相徵逐」とある。「東商大・陸士」

★澄澈 チヨウテツ
水がよくすんで底まで見えること。「名商」

★徵發 チヨウハツ
戦時品其他を人民に賦課して徵發すること。類語に徵收、徵集。「廣高師」

★重陽 チヨウヤウ
陽の部

九月九日の節句のこと。重九。「九ヲ陽數トナス、九日ト九月ト並ビ應ズ、故ニ重陽ト云フ」とある。「水産・東商大・専檢」

★勅 勅 チョクカク

天子の御怒りのこと。〔名工〕

★直 觀 チョククワン

推量・經驗等によらず、直接に知得してしつかり見分けること。

★直系親 チョクケイシン

正しい系統の親族のこと。

★直情徑行 チョクジヤウケイカウ

自分の情をその儘舉動にあらはし、性質が素直で邪しまさざること。徑も直なり。禮記に出づ。「神商船・名商・小商・専檢・北大・神商大・東北大」

★直接國稅 チョクセツコクセイ

直接國家に納める税金のこと。地租・所得稅などの類。間接國稅の對。

★陟 罰 チョクバツ

功ある者をのぼせ、罪ある者を罰すること。陟はアゲ

ル。黜陟。「海兵・海經・長商」

★直 面 チョクメン

面と向ふこと。「水産」

★儲 君 チョクン

皇太子のこと。儲は副なり。國君の副たる義なり。儲貳も同じ。「専檢・東醫專」

★女 史 デヨシ

女子の文筆ある者の稱。支那の女官の名より轉ず。名の下に添へて呼ぶ。

★女子與小人一難レ養ヒデヨシとセウジンとはヤシナ

婦人と下僕の類とは多く道理を解せざるを以て養ひ難きこと。之を近ければ不遜、之を遠ければ即ち怒む。論語に「子曰、唯女子與小人一難レ養也、近レ之則不遜、遠レ之則怨、君子ノ臣妾ニ於ケル、莊以テ之ニ臨ミ、慈以テ養フトキハ、則チ二者ノ愚ナシ」とある。

★女丈夫 チョヂヤウフ

心の一人前の男のやうに雄々しい女のこと。女傑。

★楮 表 チョヘウ

紙上といふこと。楮はカウゾウなり。紙はカウゾウに

て作る故なり。表は上なり。「神商大・京城醫」

★治亂興亡 チランコウバウ

天下の治りと亂れ、又興りと亡ぶること。歐陽修の文に「嗟呼夫、亂興亡之迹、爲三人君一者、可ニ以鑒一矣」とある。

★股 チン

我なり。古は上下通じて用ひしが、秦の始皇より以後は、天子に限り稱することゝなつた。即ち「李斯議ヌラク、天子自ラ稱シテ朕トイヘン」とあり、書經に「帝曰、朕在位七十載」とある。

★陣笠連 デンガサレン

雜兵又は下廻りの仲間といふこと。陣笠は昔、陣中にある時用ひた笠。雜兵のは薄い鐵や革で作り、將士のは木製で漆が塗つてあつた。

★塵 寰 デンクワン

ちりの世界、即ち俗人の住める世間といふこと。「仙工」

★椿 萱 チンケン

父母のこと。椿は父なり、萱は母なり。成語考に「父

母共ニ存スルヲ椿萱并ニ茂ルトイフ」とある。椿萱は高齡を祝していふ。

★珍 羞 チンシウ

珍しい魚、又は膳部のこと。「女高師」

★沈思默考 チンシモクカウ

じつと靜かに考へること。

★陳 謝 チンシャ

理由をのべてあやまること。

★沈 藉 チンシヤ

互によりすがること。相枕として重なり合ふこと。漢書に「一發視皆相枕藉死」とある。「陸士」

★沈 靜 チンセイ

落付いて靜かなこと。「東商大」

★鳩 毒 チンドク

鳩といふ毒鳥の毒。「黑身赤眼ニシテ蝮蛇ヲ食フ、其ノ羽ヲ酒ニヒタシ、之ヲ飲ムトキハ、即死ス」とある。

★闖 入 チンニフ

窺ひ入ること。闖は窺ふなり。

★陳 腐 チンブ